



かげをうつす

星野廉



目次

影	
＊	3
遅れて気づく	
＊	9
世界の影 影の世界	
＊	19
影は見えない	
＊	25
影を見る	
＊	31
樹影、言影、幻影	
＊	39
影の落とし物	
＊	51
気づくものには必ず遅れる	
＊	61
先立たれる	
＊	67
投げた影に影を重ねて見る	
＊	75
陰に光を当てる	
＊	87
うつるとうつすで影を編む	
＊	99
意味のある影、意味のない影	

*	111
大切な人の写真が踏めますか？	
*	125
似ている、そっくり、同じ、同一	
*	139
影に先立つ【引用の織物】	
*	155
見るために人がつくった「影」	
*	175
影を踏むのをためらう	
*	185
影に影を見る	
*	191
月影、星影	
*	197
蛍の影、螢の影、火垂るの影	
*	205
影の精度を向上させる	
*	213
おもかげ	
*	219
かげ、figure	
*	225
影のこだまを聞く	
*	239
素描、描写、写生	
*	251
言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼろし	
*	265
影の文法	
*	273

影の落とし物
* 283

心が壊れないために何かになんかを見てしまう
* 293

Moves Like Jagger (連想でつなぐ)
* 305

色のない景色
* 317

そっくりなのは、そっくりにつくってあるから
* 325

本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ
* 341

影

＊

影

星野廉

2022年3月18日 11:20

影が先立つ。

人に先立つ。

人が先立つ。

影に先立つ。

＊

影に気づくのはいつも遅れる。

影に気づいても影は見えない。

＊

「見る・見える」という影が影を見えなくしている。

影と影が重なり、どちらがどちらなのか見えなくなる。

声に声がかぶさり、どちらの響きなのか分けられなくなる。

文字が文字に重なり、どちらがどちらなのか読めなくなる。

綾が綾をなし、文目もわかぬ。あやめがあやまるさまのあやしさ。

＊

姿形の影、音声の影。

顔が消えて残る表情。身振りの身が消えて残る振り。なぞるしかない、なぞ。

鏡に映る像という影。ふるえてこだまする音の影。なぞるしかない、なぞ。

意味という影、筋書きという影、物語という影、旋律という影。なぞるしかない、なぞ。

＊

外にありながら中にもある影。

外にある影はすり抜けて入ってくる。気がついたときにはもう入っている。

中にある影はすり抜けて出ていく。気がついたときにはすでに出ている。

影が入り出るとき、人は一瞬我をなくし、おそらく一時的に乗っ取られている。

＊

中でどうなっているのかは不明。中にあるときにはその気配だけがある。その振りだけがある。

なぞるしかない、なぞ。

影はすくえない。すくいがたいほどすくえない。

手をかざしてみたところで、指をすするとすり抜けていく影。影の影をなぞるしかない。

＊

外にあっても中にあっても思いどおりにならない影。

影は外そのもの。外は向こう、外はかなた、外はなか、外はうち。

外はこっち、外はそっち、外はあっち、外はどこか。

なぞるしかない、なぞ。

*

うつろな影。

影はうつろう。

うつろな響き。

響きはうつろう。

*

影に気づくのはいつも遅れる。影に気づいても影は見えない。

人に先立ち消える影。影に先立ち消える人。

そのとき謎が残ったとしても、もうなぞる人はいない。

#言葉 #日本語 #影 #鏡 #文字 #音声 #意味 #旋律 #物語 #なぞる #謎 #抽象
#具象

遅れて気づく

＊

遅れて気づく

星野廉

2022年3月16日 09:53

目次

遅れる

ずれる

とほうもないずれ

何となく

遅れる

それは遅れて気づくのです。それが先にあったというのは、知識であり情報です。学習の成果でもあります。

自分の影に気づくのも遅れます。影より先に自分の体があるというのは、じつは後付けの知なのです。知はつねに遅れます。

＊

私たちの誰もが生まれたときから、外にあって、外から入って来て、中から外へ出ることもあって、思いどおりにはならないという意味で「外であるもの」。

言葉（話し言葉、書き言葉、表情、身振り）のほかには、筋書きや物語とか「賭ける」という行為とか、人を動かしている「何か」がそうでしょう。音楽でいう旋律とか節回しとかコード進行も、そうだという気がします。

こうしたものに、私たちは遅れます。

＊

それは私たちが生んだり作った。私たちがいるから、それがあるのだ。

話は逆で、後になって気づいたことであり、気づくことです。

いま気づくのではなく、気づくのはいつも後になります。

むしろ、それらは既に「ある」のであり、自立しているのです。私たちの思惑とは関係なく「ある」し、おそらく「いる」のです。

それらはつねに先立つものなのですが、いつか先立つのは私たちのほうです。順番としては、そうなるはずです。その時こそが、終りなのですから。

影のことです。

ずれる

私たちはずれてしまったようです。

ずれた者に、ずれは見えないのかもしれない。

「ずれた者に、ずれは見えないのかもしれない」と書けるのは、何かが気づかせてくれているのかもしれない。

これは知ではないでしょう。狂いに見なされることにちがひありません。

気づかせてくれる「何か」は、外にあって、外から入って来て、中から外へ出ることもあって、外なのです。

外ですから、私たちの思いどおりにはなりません。

＊

思いどおりにならないものを相手にして、私たちは賭けるしかありません。

宙づりにされている私たちは、何かに引っ掛かって賭けるしかないのです。

掛けて賭けた結果が、書けたであっても、これは賭けの結果でしかありません。占いには、裏はないのです。

騙る語るに落ちるとするのは、このことかもしれません。

必然と呼ぼうと偶然と呼ぼうと、はたまた蓋然と呼ぼうと、当然とか自然と呼ぼうと、です。あと、啞然、呆然、愕然、漫然も同じでしょう。

＊

言葉を獲得してしまった。これはずれたのでしょうか。

文字を得てしまった。これもずれたのでしょうか。

ほかの生き物にくらべて、とほうもなく動いている。移動せずにはいられない。これもずれたのでしょうか。

年中、二十四時間、生殖可能。もしそうなら、これもたぶんずれたのでしょうか。発情期の生き物は雄も雌も精神的に不安定だという説があります。常時であれば、とほうもないずれです。

＊

恋愛小説、ミステリー、ビジネス書。演劇、映画、ゲーム。どこへ行ってもあります。二十四時間、どこかにあります。

発情、性愛、謎解き、殺し、犯罪、お金儲け。私たちは、こうした物語に取り憑かれています。

芸術、文化、文明。自画自賛。

とほうもないずれ

おそらく言葉を獲得したときに、とほうもなくずれたのです。

文字を得たときに、さらにとほうもなくずれたのです。

＊

世界

上の文字をご覧ください。

これが世界です。これが「世界」なのですよ。

世界の代わりとは言え、よくできています。

世界に似ているもの、似せたもの、世界のにせものにしては、似ているどころか、そのものだと思ってしまう。

＊

世界

これが世界なんだよ。

幼いお子さんに、これが世界だと言ってみてください。

一瞬、お子さんは言葉を失うかもしれません。「うっそー」と言うかもしれません。首を傾げて意味が分からない仕草をするかもしれません。うん、そうだね、と納得したかに見える子もいるにちがいません。

納得していないらしい子を笑えるでしょうか。成長を待たずに、あえて説明する気になるでしょうか。

納得していない子に学ぶこともできる気がします。

*

言葉、そして文字。これは、とほうもないずれを前提とした、とほうもない手品なのです。

この手品に驚くのは、ヒトのこどもしかいないでしょう。カバのこどもには無理です。おさるさんのこどもにもおとなにも無理でしょう。

思いだしましょう。私たちはみんな、こどもだったのです。

魔法なんかじゃありません。手品です。手にした品なのです。

でも、じっさいには手にしてなんかいないようです。人の手を離れた手品という感じがします。手に負えないのです。

*

言葉として立ち現われる、論理とパラドックスと物語は言葉の綾であって、現実の綾ではありえません。

人にとって魔法のように魅力的であることは確かです。

魔法の魔法は、ちょっとだけちょういと人に思わせることです。不可解だと、人は魔法だと錯覚してくれません。

魔法使いは人の格好をしていなければならないのです。人でなしのモンスターであってはなりません。

*

いわば隔靴搔痒の遠隔操作である、この手品にも有効性があります。

仲間を月に送りこんだり、この星の気温を何度か上げたりするほどの有効性があります。

戦車を動かし、ミサイルを飛ばせるほどの有効性もあります。

私がこの文字を機械で書き、みなさんがこの文字を端末の画面で見ているのも、手品の有効性があるからです。

この手品が、知と論理に支えられている——あるいはその逆——という証拠でしょう。

＊

世界

これが世界だと読むことが、人の知なのです。学習の成果です。したがって、おさるさんは、言葉と現実を混同しません。

何となく

ずれる。遅れる。遅れて気づく。

何となくずれて、何となく遅れて、何となくずれに気づいて、何となく手遅れになって、何となく終わる。

＊

何となくは、学習の成果であり、知の一つの到達点です。

＊

何となく、言葉を話している。

何となく、文字を使っている。

何となく、この星中を動きまわっている。

何となく、止まれなくなってしまった。

*

何となく、ずれてしまった。

何となく、とほうもないことをしている。

何となく、何となくをしている。

何となく、とほうもないことをしてしまった。

何となく、手遅れになる。

何となく、終わるのでしょ。

そのとき、物語も終わるはずですが、たぶん何となくは終わらないでしょう。

*

それらはつねに先立つものなのですが、いつか先立つのは私たちのほうです。順番としては、そうなるはずですが、その時こそが、終りなのですから。

影のことです。

いくら遅れて気づくとはいえ、消えた後に気づくなんて、それはかなわない夢しかないでしょう。

言葉を使えば、何とでも言えるにしてもです。

*

暗く終わって申し訳ありません。

外は晴れていい天気です。

#言葉# 影 # 文字 # 知識 # 情報 # 世界 # 物語 # 筋書き

世界の影 影の世界

＊

世界の影 影の世界

星野廉

2022年3月19日 08:03

世界の影 影の世界

世界の意味 意味の世界

言葉の夢 夢の言葉

言葉の影 影の言葉

なぞるしかない、なぞ。

＊

影がうながしてくれる。

意味が導いてくれる。

言葉が手を引いてくれる。

夢が手招きしてくれる。

なぞるしかない、なぞをなぞる。

＊

いつも先にいて導いてくれる「何か」。

生まれた時に既にあった「何か」。

目をつむるといつもある「何か」。

思うよりまえにあるらしい「何か」。

なぞをなぞる。

＊

なぞるしかない、なぞ。

なぞるしかない、なぞをなぞる。

なぞをなぞる。

＊

たぶん、なぞなんてない。「何か」なんてない。

なぞるといふ身振りの振りがあただけ。

振り。なぞり、なすり、すり。すりのすり。コピーのコピー。

この振りをなぞることが、世界とかかわること。世界と同期すること。

＊

なぞる。

手をかざし、指で空（くう）をなぞってみよう。

「何か」を求めるのではなく、「何か」をなぞろうとするのでもなく。

そうすれば、世界も言葉も意味も夢も影もなくなるはず。

赤ちゃんのとき、きっとあなたがしていたはずのこと。

きっと笑みが浮かぶはず。世界もあなたに微笑みかけるはず。

#言葉 #日本語 #影 #夢 #意味 #なぞる #謎

影は見えない

＊

影は見えない

星野廉

2022年3月19日 09:54

影に気づくのはいつも遅れる。
影に気づいても影は見えない。
(拙文「影」より引用)

人がいて影と陰ができる。たとえば木のように影と陰を作る。

影はかげの姿形で、陰はかげの作る暗い場所だそうです。大ざっぱに言えばそうらしいです。自分の中に納得する影がいて、納得しない陰があります。

おかげさまで、「かげ」という言葉の多様性を感じることができました。かげさまさま。かげはさまさまということですね。

いまのは影に助けられて出てきた駄洒落です。駄洒落とは蔑称であり、掛け詞の別称です。

＊

人は影が見えない。

芸術、文学、科学技術、生活必需品。こうしたものは、人が作ったものです。人は自分たちの作ったものは自分たちのものであり、自分たちの一部であると思いがちです。

自分たちがいて、そこにあるもの。自分たちがいたから、存在するもの。自分たちがそれよりも先だと思いこんでいる。

影のことです。

自分たちの思いのままになり、自分たちの手中にあると信じているわけです。

自分たちのしもべであり奴隷。

それでいて、作ったものが見えないのです。見えていないのです。見ているつもりがみえていないというのは、人の常態と考えられます。

*

自分たちの作ったものが見えていないし、それを知ってもいないというのは、芸術作品、文学作品、科学技術の産物である製品をめぐるの、人びとの右往左往ぶりを見れば明らかでしょう。

見ても聞いても触れても、解釈できないのです。作品に振りまわされている場合も多々あります。また、持っているつもりが、持てあまして使えこなせないのです。逆に物にもてあそばれている例にも事欠きません。

作品をめぐるの、ああでもないこうでもない、ああだこうだ。わからない。わかった。いや、それは違う。やっぱりそうだよ。いやいや、そうかな。

製品や商品をめぐるの、何これ、なんでこうなるの、うまく動いてくれない、いやいやこれだけやってくれるんだから御の字、もっともっと、もっと品質と効率を向上させなきゃ、もっと増やそう、てか最近暴走してね？

*

数ある影のうち、誰にとってももっとも親しいものである言葉で考えてみましょう。いつもあなたのそばにいてくれる影です。あなたの舌に乗り、あなたの指を動かすことでなぞることできる言葉。

世界とあなたのあいだにさす影。

目をつむっても来てくれます。臨終のさいにもきっとそばにいてくれるでしょう。こんな友が他にいますか？

音声、声、息、空気のふるえ、声帯のふるえ。

文字、形、模様、インクや墨の染み、黒鉛と粘土の染み、画素の集まり。

言葉はさまざまな有り様を示してくれます。抽象と具象を兼ねそなえているために、人の中に入り出ていくという稀に見る動きもします。これ以上の超能力、超現象、魔法を私は他に知りません。

出入りするというのが抽象としての働きです。それでいて物でもあるわけです。これが具象としての立ちあわれです。

*

山

どうしてこれが山なのでしょう。その必然性はないのに山だとされています。人が「決めた」のでしょうか、もはや「決まった」という感じ。「決まり」なのです。ルール、規則、慣習。

山という文字を見ていると、さまざまな山が思いだされます。山についての思い出だけでなく、山という漢字と音がさまざまなイメージを呼びさします。

山をかける。人生山あり谷あり。てんこ盛り。こんな言葉も連想しますが、これを邪念と退けては、山は見えたことになりません。単なる抽象、つまり綺麗事であり絵空事であり嘘になるという意味です。

あなたは、山で何を想うのでしょうか。あなたの見えている山は、私には見えません。

それでも山が見えると言えるのでしょうか。山という影が見えると言えるのでしょうか。

*

そういえば、こんな美しい言葉がありました。

やまかげ、山陰、山影、山蔭、山景、ヤマカゲ、yamakage。

山影という言葉が発し、放ち、話し、送ってくれる、贈ってくれる、光と影と陰をながめているだけ。これだけで十分です。

とらえようとは思いません。すくい取ろうとする気にもなれません。山影という言葉が影になっている気がします。

言葉のおくってくれるものは、もらい切れないようです。私たちがつねにおくれているからでしょう。その気配はしても見えないのです。翳っている感じ。

かげる、陰る、翳る。

こんな美しい言葉が浮かんできました。思いがけない贈り物です。

影に気づくのはいつも遅れます。私たちは永遠の遅れの中にいるようです。

「おくれる」は「おくる」でもあったそうです。また、影に助けられました。

#日本語 # 影 # 陰 # 芸術 # 文学 # 科学技術# 作品 # 製品 # 商品 # 山

影を見る

＊

影を見る

星野廉

2022年3月23日 08:38

目次

言葉の影、現実の影、知覚の影

立つと「立つ」

立ちあらわれる「立つ」と立つ

言葉の影、現実の影、知覚の影

何かではなく、何かの影しか、私たちは見ていないのかもしれませんが。個人的な思いなのですが、私は何を見るにつけ、それが見えている気がしません。

自分だけかとも思うのですが、まわりの人を見てみると、どうも見えているように感じられないのです。失礼な話ですけど。

私が勝手に「見る・見える」の敷居を高くしているだけなのかもしれません。わざわざ自分で見えなくしているのかもしれませんが。

人と交わらない性格の私には、この種のことが多い気がします。

いずれにせよ、ひとさまの「見る・見える」は、そのひとさまにしか見えていないのですから、想像するしかないようです。

＊

言葉が見えない。言葉の影が見えるだけ。現実は見えないから、現実の影を見ている。

現実なんて言っても、私たちは五感というまだら模様のカーテン越しに「見ている」つまりとらえているだけ。まだら状の知覚の影を見ているだけなのかもしれません。

私の言う見えないとは、そういう意味です。

立つと「立つ」

意味が立ちあらわれる。

このフレーズについて昨夜寝入り際に考えていました。とりとめのない思いに浸っている時間です。一日のうちで、寝入り際がいちばん楽しいです。

意味が立ちあらわれるのに立ちあうと、意味が立ちさわぐ。

うとうとしながら、こんなふう言葉にいじります。舌で転がしている感じです。

＊

立つ。

視覚的なイメージが浮かぶときと、言葉が言葉を誘いだすように言葉が浮かんでくるときがあります。

学校時代に「起立！」と声が掛かって、みんなして起立したときのもようが頭に浮かびます。その姿の記憶から、「直立不動」という言葉が呼びさまされます。

立つが「立つ」に変わる瞬間です。イメージが言葉に変わると言えばお分かりいただけるでしょうか。

立ちあらわれる「立つ」と立つ

意味が立ちあらわれる。

このフレーズを見ているうちに、「立つ」に興味が出てきました。

「立つ・立てる」というふうに変がしてみます。

「建つ・建てる」もあったなあと思いだし、「たつ」で辞書を引いてみることにしました。

「立つ、建つ／起つ、発つ／経つ／絶つ、断つ、裁つ、截つ」

わくわくします。頭の中にいろいろな言葉や情景やイメージの断片が浮かんでいきます。

*

「立つ・立てる」に絞ります。

立つとか立てるといって、不安定な感じがします。立ったのはいいが、立てたのはいいが、大丈夫なの？ 心配なのです。

そもそも人にとって立っているのは不自然な気がします。落ち着かないのです。座っていたり寝っ転がっているほうが楽です。

ヒトがあるいは、ヒト以前のサルが立ちはじめたのはいつなのだろう。考えても仕方ありません。調べるのは面倒です。

とにかく大昔はヒトにとって立つのは稀な体位だったようです。四つ足歩行をしたり、木の枝につかまっていたのでしょう。

*

立つ（立てる）と、いつかそのうちに倒れるというイメージがあります。立っている（立っている）間は緊張して体に力が入っているような感じもします。

立つのは一時的な体勢なのです。いつまでも立っているわけではない気がします。

立っているためには力が要りますから、元気なのでしょうね。元気でなければ立ちませんし、立てません。

＊

前立腺を連想しました。漢字の組みあわせとして見ると不思議な字面をしています。英語では prostate (gland) ですが、漢字の語感と一致します。ヨーロッパの言葉からの翻訳語のようです。

pro には前という意味があります。state は、「立つ」にこじつけると立ち位置という感じでしょうか。似た言葉に status があります。

stand、statutue、static、stop、stay、start、stay、station、step、stray、stroll ……

st は移動と静止をあらわすと、昔習った記憶があります。そんなふうには単語を覚えたのです。

こういう st みたいなものを語幹とか語根と言った記憶があります。語源的な裏づけがあるのか不明ですが、個人的には、ただつながればそれでいいのです。

前立腺肥大、前立腺がん。男性にとっては身近な病気です。つらいですよ。行動が制限されます。気持ちも萎縮します。萎えるのです。立つの反対は萎えるかもしれません。

＊

そう言えば、トイレに立つと言いますね。小用に立つとも言います。おもにおしっこなのでしょいか。

立ち小便という言葉も思いうかびました。いまでは男性も座っておしっこをする場合が増えました。

立つ、座るは、生理現象や排泄と関係が深い動作です。寝るはずばり性行為を指すことがあります。

おもしろいですね。

*

そそり立つ、そびえ立つ——。立ちあらわれましたね。威勢がいいです。立派です。

風立ちぬ。風が立つとはどういう状態なのでしょう。匂い立つような美しさなんて言い回しがあります。

香りが立つ。これも美しい語感の言い回しです。響きも字面も綺麗です。においや香りはいかにも影という感じがします。見えないからでしょうか。

五感のうちで見えるのは視覚だけだと気づきました。考えれば当たり前ですけど、不思議な気もします。

四対一なのに、視覚の優位は揺るぎません。なかなかしぶといのです。

暗闇での「立つ・立てる」は、明るいところでのそれとは異なる気がします。どうなのでしょう。想像するとわくわくしてきました。いつか試してみます。

五感、語感、語幹、互換、交感。

脇道に逸れそうになりました。

*

影を見るのも楽しいものです。

#言葉 #日本語 #影 #五感 #語感 #現実 #知覚 #英語

樹影、言影、幻影

＊

樹影、言影、幻影

星野廉

2022年3月31日 08:09

目次

かげ、影、陰

言葉のかたち

記憶の風景、記憶のかたち

写生と描写

描写、なぞる

言葉の影、言葉というまぼろし

複写、複製、印影、拡散

外にある線をなぞる

かげ、影、陰

かげという言葉が好きです。「かげ、カゲ、影、陰、蔭、翳、景」という字面をみているだけで、気が遠くなりそうになります。

呼びさまされるイメージに圧倒されるのでしょうか、息が苦しくなり收拾がつかなくなるので、深呼吸をして心を静めます。

寝入り際に、かげについて思いをめぐらすことがあるのですが、そんなときには幸せな気分になります。

昨夜は、影と陰について考えていました。

大きな木の下を夢想しながら、かげについて考えていたのです。それを思いだしながら、文字にしてみます。

言葉のかたち

木の陰で木の影について思いをめぐらしていたのです。夢うつつの中での話です。

まず影と陰の違いを見てみましょう。影と陰の使い分けは、例文で見るのがいちばんです。以下の例文は私が作文したものです。

葉の落ちた地面に、木が影を落としている。

庭の池に木の影が映っている。

散歩の途中に木の陰で一休みした。

犬が木陰で身を横たえている。

影は光をさえぎってできる、あるいは水や鏡に映った形や姿です。一方の陰は、日の当たっていない場所です。

*

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

まず現実での体験があって、言葉は後という意味です。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

言葉、とりわけ文字は後付けです。理屈なのです。分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

私は研究者でも探求者でもありません。ただ言葉が好きだけです。言葉の不思議さに取り憑かれているだけです。

こうやって言葉に付きあってもらっているだけで満足しています。

記憶の風景、記憶のかたち

昨夜の寝入り際の夢うつつの中で浮かんだ景色を、いま思いえがいています。

言葉にしてみます。

＊

草原を歩いていると、遠くに大きな木が見えた。近づいてみると、木のそばには池がある。草の生えた地面に木がくっきりとした影を落としている。

池には、その大きな木の先端の影が映っている。草で被われた地面に落ちている木の影が伸びて、水面に映る木の影につながっているように見えなくもない。

どうなっているのだろうと興味を覚え、歩を進めて木の陰の中に入った。地面に映った木の影が池に映った影と重なっている。

不思議な気持ちでそのさまに見入っていると、そばで何かが動いた気配がしてぎくりとした。

木の陰で身をひそめていたのか、猫がこちらを見ている。灰色っぽい毛の痩せた猫だ。

＊

この後に、寝入った記憶があります。昨夜と今朝の夢では影も陰も出てこなかった気がします。

写生と描写

以上の作文は、昨夜の寝際に浮かんだ風景を思いだしながら作ったものですが、読みかえてみると、その嘘っぽさに恥ずかしくなります。

記憶を頼りに何かを思いえがいたり、ましてやそれを言葉にすることの困難を実感しただけでなく、そこまでして言葉にしようとする自分の執念にたじろいでしまったのです。

影と陰について意識的になっているために取って付けたような作文になっています。いかにも作りものっぽいのです。

＊

文章を書くという行為は、ふつう室内でおこなわれます。私の場合には自宅の居間でパソコンを使って書くのが習慣になっています。

何かを、あるいは何らかの風景を見ながら、その場でノートやメモ帳にペンで書くとか、スマホに文字を入力して書くというのは想像しにくいです。

書くことを職業としている人なら、現場で取材メモを取るでしょう。いわば言葉によるデッサンでしょう。でも、清書するのは帰ってからの屋内だと思います。

俳句や短歌や短い詩の場合には、その場で言葉を口にして、何かに書きとめたりすることは十分に考えられます。俳句だとそのまま、作品になるのかもしれませんが。

写生という言葉が、明治になって俳句の関係者たちの間で口にされるようになったのは、分かりやすい展開だと言えるでしょう。

＊

絵画と文章を同列に扱うことはできませんが、デッサン、素描、写生、描写という共通の言葉で論じることは多いです。私もやっています。

文章の場合に話を限れば、その場で文字にして、以後手を加えないという写生は、きわめて稀な出来事だと思います。俳句くらいのものでしょうか。

デッサン、素描はあるでしょうが、後で清書することになります。さらには推敲もあるでしょう。

小説、エッセイ、新聞や雑誌の記事、ブログという形で、私たちが読む文章は、現場で撮られた写真とは異なり、現場から持ち帰ったメモや記憶を元にして描かれた絵に近いと言えます。

描写、なぞる

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。

(意外に思われるかもしれませんが、『夢十夜』を書いたときの夏目漱石は、このことにきわめて意識的であった節があります。夢日記の形を取りながらも、あの作品が夢の再現では断じてないからです。細部に見られる優れた描写に目を注げば一目瞭然なのです。)

その意味で、なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではありません。

むしろ、影（言葉のことです）そのものの世界に入っているといともなみなのです。影には

影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるのです。

絵を描いているとき、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれるのと似ています。

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

言葉の影、言葉というまぼろし

木の影と似た言い方に樹影があります。木の影と木の陰だけでなく、木の姿という意味もあるようです。

樹齢二百年という、そのいちょうの樹影がピラミッドに見えた。

即席に作った文ですが、こんな使い方ができそうです。

＊

木という生き物、その木の姿である樹影、その木に日の光が当たって地面に移る影、その木にさえぎられてできる陰。そうした「かげ」たちは、木そのものではありません。

言葉は、それが指ししめしたり、名指す事物そのものではありません。その意味で、かげに似ている気がします。いわば言影です。勝手に作った言葉ですが、ことかげとか、ことえいとでも読みましょうか。

言葉には姿があります。文字のことです。文字は形であり姿ですが、文字には音（おん）も、語義も意味もイメージもあります。

音と意味とイメージは目に見えません。それなのに、音と意味とイメージには大きな存在感があります。

＊

音と意味とイメージは、まるで文字の影のようですが、そんなことはなく、むしろ音が先で、文字は後付けなのです。まず話し言葉があって、書き言葉が出てきたのはずっと後のことだと言われています。

それなのに、目に見える形としてある文字はいかにも偉そうに見えます。人は目に見えるものに信を置きます。一方で、目に見えないものに畏怖の念をいだくことがあります。

言葉は目に見えるものでありながら、目に見えないものでもあります。具象と抽象を兼ねそなえているという言い方もできるでしょう。

だから、人の外にあって、人の中に入ったり出たりできるのです。

不思議ですね。謎です。考えれば考えるほど不思議でなりません。

複写、複製、印影、拡散

まるでまぼろしのようです。幻影のようです。見ているようで見えていない。見えていないようで見える。

まぼろしは見るものではなく、なぞるものではないでしょうか。なぞるのであれば、目をつむってもできそうです。

なぞることなら、日向もなく陰もない、したがって影もない闇の中でもできそうです。

なぞることなら、生きていない物でもできるのです。

＊

見ていなくても、闇の中でも、描写はできます。無生物も、描写ができます。

まぼろしはまぼろしも描けるのです。まぼろしでまぼろしを描くこともできるのです。

まぼろしをなぞる。さらに言うなら、なぞるをなぞる。

これは、人の外にある出来事であって、人の中に入ったり出たりすることがあっても、つまり人がなぞることはあっても、外そのものなのです。

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械やAIにも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいは外にはないのです。

たぶん、あらゆるさかいがそうなのでしょう。さかいは人が決めるものです。だから、線引きをめぐる争いが跡を絶ちません。

さかいはありません。少なくとも外にはありません。

外にある線をなぞる

人は自分で勝手に引いた線をなぞっているだけだとも言えそうです。自分が引いたはずの線が「外にある外である」のは皮肉ではないでしょうか。これは線が自立しているからに他なりません。

＊

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

これは、いま始まったことではありません。写本、写経、印刷の時代から起きている出来事なのです。

(人が文字をなぞり写すのは、線からなる文字が外にあるからです。内にあれば、わざわざ苦労して写しません。)

そして、複写。コピー (印影と呼びたいです)、複製。さらには、現在のコピーのコピー、複製=拡散が起きているのは、同じ理由でそうなっていると言えそうです。

いまや、「写す」と「なぞる」は人の手に負えないものになり、人は振りまわされています。いや、これもいま始まったことではないでしょう。

影が外にある外であるという話は、人が言葉を持ったときに始まったにちがいありません。

#影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 記憶 # 描写 # 写生 # デッサン # 文字 # 幻# 夏目漱石
複製 # 拡散 # AI

影の落とし物

＊

影の落とし物

星野廉

2022年4月2日 09:03

目次

作文

慣用句、決まり文句、定型を外す

文字どおりに取る

ありえない描写

落とし物

作文

影という言葉を使った言い回しはたくさんあります。どれもがぞくぞくするようなイメージをいだかせてくれます。

「影を落とす」という言い方が好きです。作文してみましよう。

久しぶりに庭に出ると、伸び放題になったヤツデの茂みが、これまた伸びた雑草の上に黒く大きな影を落としていた。

夕日が舗装された道路に影を落としている。私はまぶしさに目を細めた。

戦争の記憶がいまも彼の日常に影を落としているのは間違いない。

＊

最初の例文は、そのまま文字どおりに取れます。ヤツデに日が当たって、その下に影

が映っているという物理的な現象を言葉にしたものです。余計な飾りを取れば、純粋な描写だと言えそうです。

「夕日が影を落とす」という場合には、「光がさす」という意味になるのですが、個人的にはこの言い回しを使ったことはありません。初めての作文です。

三番目の例文の「影を落とす」はネガティブな影響を与えるという意味ですから比喩的な言い方だと理解しています。

慣用句、決まり文句、定型を外す

「影を落とす」という言い回しほどの辞書でも、「影」の語義の例文としてではなく、別の扱いになっています。いわゆる慣用句とか成句であり、決まり文句とか定型とも言えそうです。

大きく分けて、上の作文で見た三つの使い方ができるようです。

つぎの例文を見てください。

彼は影を落とした。気がつく自分の影がなくなっていたのだ。夕日が影を落として
いる坂道を下っていくと、長い影を引きずりながら上ってくる友人が見えた。すれ違い
ざまに軽く会釈した瞬間、彼ははっとした。目の前にあるはずの自分の影がない。

稚拙で理屈に合わない描写もありますが、小説であれば、ありえる文章ではないでしょう
か。小説という言葉は言い訳の材料になりますから。小説では何を書いてもいいので
す。詩もそうかもしれません。

「そこのあなた、忘れ物です。影を落としましたよ」

こんな言葉も浮かびました。

＊

「影を落とす」という慣用句を文字どおりに取る。こういうことを私はよくやります。

へそが曲がっているからか、もっと深刻な意味あいのある何らかの症状なのかは分かりません。

「へそが曲がる」も文字どおりに取ると、なかなか面白い光景が頭に浮かびます。「へそで茶を沸かす」は、これまでに何度も視覚化してにやにやしたことがあります。

文字どおりに取るという意味のリテラリズム (literalism) という言葉や、美学・文学関連の用語があることは知っていますが、その意味を調べたことはありません。

文字どおりに取る

影を落とす、影が落ちる、影は落ちる、影に落ちる、影と落ちる、影で落ちる

こういうふうには、言葉を転がすことが好きです。寝入り際にやるルーティーン of 定番です。眠れない夜にも、この遊びをよくやります。

文字どおりに取って、そのさまを思いえがいて楽しむのです。もう少しやってみましょう。

影が影を落とす、影に影が落ちる、陰に影が落ちる、「影を落としたことが、その後の影の生き方に影を落とすことになった」

*

「影に影が落ちる」と「陰に影が落ちる」は、日常生活でよく目にします。いまも見えます。

居間のテーブルでパソコンを使っているのですが、目の前にあるモニターの背後には、窓からの光で薄く長い影ができています。そこに頭上の蛍光灯を浴びたモニターが、濃

い影を落としているのです。

輪郭のあいまいな長く四角い影に、くっきりとした長方形の濃い影が落ちているわけですが、陰の中に影があるとも言えそうな気がします。

*

むしろ、影（言葉のことです）そのものの世界に入っただけのいとなみなのです。影には影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるのです。

絵を描いているとき、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれるのと似ています。

影は自立しているとも言えます。

（拙文「樹影、言影、幻影」より引用）

言葉の世界には独自の論理と文法がある。

この考え方は私にはとても魅力的に感じられます。人は無意識のうちに、こうした言葉の世界の論理と文法に従ったり、それと戯れたり、楽しんだり、裏切られたり、それによってもどかしい思いをしている気がします。

その一例が、「文字どおりに取る」です。文字どおりに取るとは、現実の論理を退けて言葉独自の論理に従うことでしょう。

そんなことをすれば無理が生じるのは当然です。誤解や曲解になることもあるでしょう。争いの原因になることも十分に考えられます。

その一方で、結果としてポジティブに働くなんてこともありうる気がします。

どっちに転ぶかは予想不可能だと思います。どっちに転んだかが、そもそも確定も特定もできないのではないのでしょうか。なにしろ、曖昧模糊としたものを相手にしている

のです。

すばっと割りきれのわけがありません。割りきれると考えるほうが不合理です。

＊

文字どおりに取ることが、洒落にならない場合もあります。

人の文字化が、もはや比喩やレトリックでなくなっていることは恐ろしくもあります。いまや人は文字どおり文字なのです。

(拙文「文字化する人」より引用)

＊

影が影を落とす——その光景を思いえがく。ありえないことや、ありえない姿や形、ありえない光景を思いえがく。

幼いころに歌い覚えた歌に、「もしもしかめよ、かめさんよ」があります。

月にいるウサギがカメさんに電話をしているさまを本気で思いえがいていました。いまでも、そのさまを思いうかべることができます。

ウサギといえば、勘違いの定番である「うさぎおいし、かのやま」を思い出しました。

あれは視覚的には浮かびません。でも、おかしくて、こどものころには何度も口にしていました。いまでも、ときどき浮かんできます。

ありえない描写

この章の冒頭で、ジジエクはヒッチコックの「海外特派員」を取り上げ、チューリップ畑が続くオランダの田舎で「風車の一つが風向きと逆に回っている」ことに主人公が気づく場面に注目するのですが、次のように要約できるでしょう。

見慣れた風景（オランダの風車の並ぶ風景）に、ちょっとした特徴（風向きと逆に回っている、一つの風車）が加わったとたんに、その自然な風景が不気味なものに変わってしまう。そこには属さない場違いな、つまり何の意味も持たない細部が加わったのである。

（拙文「人は存在しないもので動く」より引用）

ありえない描写とは、言葉の世界の論理と文法に従っている描写です。現実世界とは異なるの論理と文法で書かれ描かれていると言えます。

言葉を読む人は、いったんその言葉を信じないことには、読むことができません。評価、判断、否定は、後付けになります。一瞬だけでも、人は言葉の世界の「住人」になるのです。

言葉の世界ではどんな荒唐無稽も不条理も肯定されます。夢に似ています。夢ではすべてが肯定され、あれよあれよと進んでいくのです。

映画もそうですね。見ているもの（銀幕上の影です、現実ではありません）を信じないことには映画は見えません。

ヒッチコックはそのことに意識的であるだけでなく、そのことを映画という作品で具現するだけの、映画という世界での「論理力」と「文法力」を備えていた作家だと言えるでしょう。

レトリックはトリックなのです。いったん騙されないことには読めません。

【掌編小説】落とし物

五時半が過ぎたところで、坂の上にある喫茶店を出た。外はまだ明るい。ブラックで飲んだコーヒーは美味しかったが、頭のぼんやりとした感じはまだ去らない。

夕日が影を落としている坂道をゆっくりと下っていくと、先の方に男の姿が見えた。長い影を引きずりながら坂を上ってくる。

日を背にした男の影が、長い影を従えてやってくる。

男性が苦手な私はどきどきする。できるだけ距離を置いてすれ違おうと考え、歩きつづけながらも道の端へとわずかに寄る。

坂の下から吹き上げる風のせいか、生臭いにおいが鼻をつく。息をとめ、目を伏せたまま、男とすれ違った。

「あとう」背後から男の声がした。「落とし物です。影を落としましたよ」

振り向こうとした私は、足元を見るわけにもいかず、かといって後ろを見る気にもなれず、息を詰めたまま空を仰いだ。

作文 # 小説 # 掌編 # 影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 描写 # 文字 # リテラリズム # レトリック # 夢 # ジジエク # ヒッチコック # ジャック・ラカン

気づくものには必ず遅れる

＊

気づくものには必ず遅れる

星野廉

2022年4月2日 10:42

影に気づくのはいつも遅れる。影に気づいても影は見えない。

人に先立ち消える影。影に先立ち消える人。

そのとき謎が残ったとしても、もうなぞる人はいない。

(拙文「影」より引用)

日差しの強い日に、山の陰になった場所を目指して歩くのが好きです。くっきりと山の影が見えます。先端の鋭角や全体の丸みを帯びた形が、濃く地面に映しだされています。

そのまま、陰の中に入っていきます。陰は入るもの、影は見るもの。入った瞬間に、そんな思いがします。もっとも、これは後付けです。いま、家の居間で回想しているから、そんな言葉が浮かぶのです。

描写は創作だと気づきます。写生や再現ではありえないのです。言葉の世界に入っている、言葉の論理に従ってのいとなみだと痛感します。いま私が相手にしているのは言葉なのです。当り前のことですけど。

陰に入り、そのまま奥へと進んでいきます。足元に目をやると、さっきまでの濃い影は姿を消し、薄い影がついてくるのが見えます。これも影です。私の影。いつもいてくれる愛おしい存在です。

空を仰ぐと、太陽は見えません。光をはらんだ薄い青が冷たく広がり、その下には黒い山の影があります。一種の間接照明なのでしょうか、あたりの影はいかにも頼りなげに見えます。

木や建物の陰、屋内も、こんな感じなのでしょうか。光はあちこちから差してきます。光はあちこちにあり、うつり、まわりつき、はなれ、とび、ゆれているかのようです。光は静ではなく動なのです。

＊

陰に入り、陰の中であたりを見まわすと、影の薄い分だけ濃淡の階層が綾としてはっきり目に映るような感じがします。いたるところにかげがあるのです。影も陰も姿も像も反射も、すべてがかげと呼ばれていることに気づきます。

そのさまを見ていると、かげがさす、かげるという言葉が浮かんできて、その比喩的な意味が、意味というよりもそこに立ちあらわれた形として、こちらにうつってきます。心と体にさしかかり、かげるのです。

どのかげも、光と闇の織りなす濃淡の階層であることにも気づきます。光と闇を分けることの無理にも気づきます。いまになって気づくとは。かげに遅れている自分がいます。気づいても、また忘れるのでしょうか。

世界がいかに気づくもの、気づくべきもの、気づいてもいいものに満ちているかに気づきます。「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれない。

＊

” 谷には二つの池があった。

下の池は銀を溶かして湛たたえたように光っているのに、上の池はひっそり山影を沈めて死のような緑が深い。”

(川端康成作「骨こつ拾い」(『掌てのひらの小説』所収)より引用)

この川端の掌編では、光と闇、光と影、日向と日陰、表と裏、そして陰陽が美しく、また哀しく描かれていて、とても好きです。描写が多義的なのです。何度も読みかえて

います。

*

「遅れる」は「おくる」に近いらしいと最近知りました。遅れる、後れる、送る、贈るです。

(先立つ相手を敬い、先に行かせる(逝かせる)つまり送ることで、自分が遅れる(後れる)感じでしょうか。送るには葬送の意味もあります。)

なるほど。分けても仕方がないのに分けようとしている自分に気づきます。

いずれにせよ、気づくものに、人は必ず遅れているようです。

(その最たるものが、言葉ではないでしょうか。言葉が言葉であることを忘れるという意味です。言葉は私たちの後から来ながら、つねに先にあるものです。外にある外なのです。)

よく考えれば当り前のことなのです。当り前だから気づけるのであり、当り前だから忘れるのです。目の前にあるから、先に行くから、気づかないものでもあります。つまり、後れる、遅れる。影や言葉のように。

(かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。先立つは前に立つや先に起こると、先に亡くなるの両義があります。)

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうはずっと大切に思えます。目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

(ことのはに さきだつひとを おくるかげ)

#言葉 # エッセイ # 日本語 # 気づく # かげ # 陰 # 影 # 描写 # 多義性# 川端康成

先立たれる

＊

先立たれる

星野廉

2022年4月3日 09:11

「遅れる」は「おくる」に近いらしいと最近知りました。遅れる、後れる、送る、贈るです。
(先立つ相手を敬い、先に行かせる(逝かせる)つまり送ることで、自分が遅れる(後れる)感じでしょうか。送るには葬送の意味もあります。)

(ことのはに さきだつひとを おくるかげ)

(拙文「気づくものには必ず遅れる」より引用)

＊

ヒトがいつ表情や身振りを言葉として持つようになったのか。いつどのようにして、話し言葉を持つようになったのか。文字を手にしていく過程はどんなものだったのか。

こうしたことはたどることができません。想像するしかないわけです。その想像はスリリングなだけでなく、どこか甘美でもあります。ノスタルジーをとまなうからでしょう。

＊

視覚言語の一部である表情や身振り、話し言葉としての音声、書き言葉である文字は、人の体から発せられるものであり、放たれ一瞬離れた後に、別の人に届き、今度はその人の身体に染み入ります。

自分から見ると、自分の外にいる相手の身体から、中である自分の身体に入りこんでくるわけです。そして、今度はそれに反応した自分の中から身体を通して言葉にして、それがいったん外に出たうえで、相手の身体に入りこんでいきます。

こんな不思議なことが起きるのは、言葉が外にあるからだと思います。言葉を確認できるのは外にあるときだけなのです。私たちが目にし耳にし触れることができるのは、自分の外にあるときの言葉だという意味です。

＊

一方で、外にあるからこそ言葉は、なかなか自分の思いどおりになってくれません。相手の思いどおりにもなりません。ままならないのです。

自分と相手が歩み寄るしか、「伝わる」とか「通じる」は起こらないのかもしれませんが。ままならさは、それでしか解消できないようです。

必ずしも伝わり通じないのであれば、「分かった」という言葉よりも、じっさいに相手に歩み寄ってみせる行動が大切だと思います。

ままならさに対する唯一の方策は、歩み寄る行動しかないのかもしれませんが。それは面子を捨てる勇気だという気がします。

言葉の上での辻褃合わせを現実よりも優先させる。これが面子をたもつことです。現実に沿うのではなく筋を通そうとして、言葉のままならさに屈しているのです。相手に屈しているわけではありません。

＊

いま述べたことが露わになるのは、戦争や大災害が起きているときです。目の前の現実よりも、言葉の上での辻褃合わせが優先されます。

言葉を崇め、言葉にひれ伏しているのです。

誰がそうするのかというと、人びとの上に立っているリーダー（たち）です。たった一人の場合もありますね。たった一人の辻褃合わせのために、地域だけでなく、世界が危機に瀕しているのです。

辻褃合わせの「辻褃」、筋を合わせるの「筋」、こうしたものは人が発し、いったん放たれたため、人から離れた外にあります。外にあるからままならない、つまり思いどおりにならないのです。

ままならない言葉を前にしてリーダー（たち）も途方に暮れているにちがひありません。現実よりも言葉にとらわれて右往左往しているのですが、その素振りは見せません。面子があるからです。

＊

あの人（たち）は現実を見ていません。辻褃と筋を見ています。辻褃も筋も言葉です。言葉として複製拡散されます。情報やプロパガンダは言葉として流通します。

どんどん人の外に出ていく言葉は、ますます人の手を離れたものになっていきます。

言ってしまった以上、文字になってしまった以上、広まってしまった以上、回収して取り戻すわけにはいかないのです。これが辻褃であり、面子なのであり、要するに言葉なのであり、しかも思いどおりにならない、つまり訂正も撤回もできない言葉なのです。

その結果として、自分（たち）が招いた非常事態下に、リーダー（たち）が、さらなる辻褃合わせ、つまり面子をたもつことに血道を上げ、現実への対応がないがしろにされるのは、みなさんをご承知のとおりです。

いま、げんにそれが起きています。

＊

自分の外にあって思いどおりにならない言葉を思うとき、人の後に来たはずの言葉が、人の前に立っているような気がします。言葉に先立ったはずの人が、いつの間にか、言葉に先立たれているのです。

人は目の前にいる言葉になかなか気づきません。自分こそが前にいると思っているか

らかもしれません。これも面子にとらわれているからだという気がします。言葉は道具であり従者だと人が思っているという意味です。

事態は真逆なのに、です。

ひょっとすると言葉は自立しているのではないのでしょうか。自分で立っているのです。さらに言うなら、生きているのです。そんな荒唐無稽な思いに駆られます。

＊

”物に立たれたように、自分が立つ。未明の寝覚めとかぎらず、日常、くりかえされることだ。日常はその取りとめもない反復と言えるほどのものだ。”
(古井由吉作「物に立たれて」(『仮往生伝試文』) 所収より引用)

「十二月六日、日曜日、雪のち曇。」で始まる日記体の部分から引用したのですが、『仮往生伝試文』では説話とその解説風の文章よりも、日記体の記述が好きです。その描写は身体に染み入ってきます。

＊

表情、身振り、音声は、一瞬で消えます。文字は残ります。そのまま保存することも可能です。

この文字の特徴は特異とも言えるもので、思いだすたびに考えこんでしまいます。こんな不思議なことがあっていいものなののでしょうか。

当たり前なこととして、繰り返されている日常の出来事なのですが、当たり前という言葉で考えるのを止めるわけにはいかないのです。きっと飲み込みが悪いのでしょう。

＊

ヒトが言葉をいつどのようにして持ったのか。これは永遠にたどれそうもありません。

しかし、ヒトが言葉に先立つとき、つまりヒトがこの星からいなくなったときを想像することが、それほど荒唐無稽な話ではない世界情勢と地球の気象に直面しているいま、私は人に先立たれたときの言葉の行方を考えずにはいられないのです。

言葉の終焉、つまり人の終焉は、私にとってオブセッションにすらなっています。

*

文字は何らかの形で残る気がします。

人に先立たれた文字。人の影であったはずの文字が残る。影が残る。影は人を見送ってくれるのでしょうか。そのさまを思いえがくと苦しくなります。

ことのはに さきだつひとを おくるかげ

この想像は、言葉の発生という絵空事よりも、はるかにリアルな——つまり間近に迫っている——気配として私の前に立ちあらわれます。悪夢なのです。

その悪夢が現実とならないように、いま自分に何ができるのか。それを考えていきたいと思います。

#日本語 # 影 # 文字 # 表情 # 身振り # 話し言葉 # 書き言葉 # 古井由吉

投げた影に影を重ねて見る

＊

投げた影に影を重ねて見る

星野廉

2022年4月4日 08:05

目次

影をうつす、影がうつる

一対一に対応する

作文

正確に、細かく

現実をうつす

もっともっと

作られた影

筋書き

影に影を投影する

筋書きも、目的も、意味もない影たち

影をうつす、影がうつる

影といえば、映画や写真を避けて通るわけにはいきません。

幼いころに映画館で見た映画を思い出します。映画館が真っ暗なのです。いまの映画館は明るいです。

真っ暗な中で見る映画に惹きつけられ魅惑された記憶がかすかにあります。かすかで断片的なのですが、強烈なわくわくをとまなう思い出なのです。

映画も本来は銀幕上に投げられた「影」なのですね。その影に、人はいろいろなものを投影し重ねるわけです。影に影を重ねる映画の鑑賞はじつにスリリングな体験だと思います。

＊

写真も影ですね。

私は映画にも写真にも疎いので、知っていることだけを頼りに書いてみようと思います。この記事のためにあえて調べ物はしないという意味です。

できるだけ、いまここにあるもので、ああでもないこうでもない、ああだこうだを試してみるつもりです。

映画、写真、映画用のカメラ、写真を撮るためのカメラ、望遠鏡、顕微鏡、影絵、幻灯、スライド、複写機。

思いつくままに並べましたが、広げすぎたみたいです。それぞれの仕組みについてはよく知りません。まったく知らないものもあります。ただわくわくします。

私は研究者でも探求者でもないので、分からないという気持ちと不思議だという思いを大切に、楽しみながら書いてみます。

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうがずっと大切に思えます。目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

(拙文「気づくものには必ず遅れる」より引用)

分からないときには知ろうとしたり分かってもらうのではなく、気づかないものに目を向ける。これが私には合っているようです。横着なのでしょうね。

一対一に対応する

話を映画と写真に絞ります。ざっくりと両方とも影だという前提で話を進めます。映画と写真で思いだすのが、写像という言葉です。中学か高校か覚えていないのですが、たしか数学の授業で聞きました。

ぼんやりとしたイメージは、AというグループとBというグループがあって、それぞれの構成要素が一对一で対応しているとか、多対一とか、そんな話だったと記憶しています。

調べれば真偽が明らかになるのですが、あえて調べずに、いま述べたイメージに沿って書いてみます。

大切なのは、一对一で対応するという話です。とても刺激的なイメージです。

昔の写真で、すごい解像度のものをテレビで見たことがあります。モノクロで見るからに古い写真なのですが、細部が半端じゃなく鮮明なのです。鉱山の写真だった気がします。

集合写真もあったのですが、百人近い人たちが会しているのです。その一人ひとりの顔がそれなりにはっきりと写っていました。

作文

ここで作文をします。

写真に姿が写る。母と写っている写真はこれしかない。このページに裏ページの絵が写っている。

板書をノートに写した。写本。写経。筆写。書写。複写。写生。

鏡に顔が映る。水面に木の姿が映る。影が壁に映る。障子に人の影が映る。この辺はテレビがよく映らない。テレビにあなたの家が映ったよ。目に映る像。

プロジェクターを壁に直接投影する。プロジェクター映像を白い壁に映す。映写機。

＊

難しいですね。こういうのは苦手です。辞書や用字用語集を参照しないと作文できません。

大ざっぱな表記と言葉の使い方がつかめたので、これでよしとしましょう。

正確に、細かく

上の作文を見ていると、話が大きくなり、どんどん広がりそうな予感がするので、なるべく広げないようにします。

私にとっていちばん大切というか興味深いのは、一対一に対応するということなのです。

映画も写真も一対一に対応させるのが目的で作ったものだという気がします。言い換えると、風景や物を正確に、しかも細かく、そのままに「うつす」ということでしょう。

「そのまま」というのは曖昧な言い方ですが、今回は深入りしないでおきます。これを本気で考えるのは素人には無理だという気がします。わくわくしないし、楽しくもなさそうです。

現実をうつす

物や風景と写真を一対一に対応させる。

あっさり書きましたが、すごいことです。気が遠くなりそうになります。現実を「うつす」、つまり写し映し移すわけです。そんなことが可能とは思えないだけに、すごいなあと感心してしまう自分がいます。

像度の問題でしょうか。

これくらい鮮明なら、ま、いっか。ここまでそっくりなんだから、ほぼ同じっぼい。いや、もっともっと、くっきりはっきり、リアルに。

欲張れば切りがないと思います。贅沢を覚えるとエスカレートしそうです。これ以上を望みたいとは思いません。

作られた影

写真や映画は作られた影です。地面や水面にうつった影とはそこが違います。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうね。

何を見るためにでしょう。そっくりを見るためではないでしょうか。

そっくりを見るためには、正確で細かくなければなりません。解像度を高めるわけです。これは切りがありません。もっともっとになります。

(何にそっくりなのかといえば、現実こそっくりなのであり、同時にそれは人にそっくりであり、自分にそっくりなのだという気がします。このことについては、いつか記事として書いてみたいです。)

*

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

無限に広がった紙やスクリーンにうつすわけにはいきません。人間、そこまで欲張ってはならないでしょう。

映画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間ですが、これは長

いものを編集したもののようです。たとえば、ディレクターカットとか言いますよね。完全版も聞いたことがあります。トレーラー（予告編）もあります。

いろいろな編集が可能だけど、最終的にとりあえず作られ配給されたのが「作品」みたいです。それぞれ、長さ、つまり上映時間が異なると考えられます。

いずれにせよ、作られた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。空間と時間を切り取っているからでしょう。切り取ることにより、切り捨ててもいるにちがいありません。

やはり作りものなのです。うさんくささがつきまといます。

筋書き

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。

写真であれば目的やテーマです。つまり記念写真だとか、エロ写真だとか、可愛い動物とか、報道写真とか、ブロマイドとか（死語ですか？）、カボチャの成長の記録とか、指名手配とか、漠然と「涼しげな風景」とか、キャプションみたいなのです。

映画であれば、作品名、あらすじ、脚本、受賞歴、批評家や映画誌での評価、ジャンル、成人向けか否か、サウンドトラック……、あとが続きませんが、いろいろありそうです。とにかく、目的やテーマのほかに、話というかストーリーがあります。

ネットなんかの動画であれば、情報カメラによる映像とか、お笑いとか、ユーチューバーの動画とか、PVとか、MVとか……、あとが続きませんが、目的やテーマやジャンルや用途があります。

要するに、地面の影、水面の影、鏡に映った影（像）とは違って、何らかの目的やストーリーがあって作られているわけです。

＊

鏡像というのも、じつは作られた影ですね。そもそも鏡は作るものです。丹念に磨きあげて作ります。作られたものに映る影は特別なものであるはずです。

水面を覗きこむのとは一線を画してしかるべきだと思われま

鏡には枠があります。何らかの目的があって、作られているし、それぞれの目的があって各人が枠のある鏡を覗きこむわけです。目的があるのですから、その始まりと終わりという時間的な枠もあります。

お化粧、試着、顔色を見るため、歯磨き、うっとりするため、白髪を確認するため、毛の残り具合を確認するため、口内炎の状態を見るため、鼻毛を抜くため……。

ぱっとしない目的とストーリーですけど、ドラマがあることは確かです。じつに人間くさいドラマです。

＊

作られた影には作られたストーリーとドラマがある。

なんてまとめることができるかもしれません。したがって、筋書きがあるとも言えますし、フィクションであるとも言えそうです。

ストーリーとドラマは動きです。広い意味でのプレイ (play)、つまり演技、演劇、ドラマ、遊戯、演奏、競技、パフォーマンスがつまっているとも言える気がします。

だから、わくわくするのです。ドキドキもするのです。ぞくぞく、あらら、まあ、おーまいがっ、という感じです。

影に影を投影する

作られた影には、作られたストーリーがあるという話でしたね。そう考えると、やっぱり現実ではないわけです。作った物ですから当然です。フィクション、虚構です。

ましてや、一対一に対応しているなんて、まさにフィクションでしかないわけです。

*

現実
現実。現実と写真は違う。現実と映画は違う。写真は写真。映画は映画。ですよ。

現実
現実。現実と絵画は違う。絵画は絵画。ですよ。

現実
現実。物は物。言葉は言葉。言葉は現実ではない。言葉は物ではない。ですよ。

*

とはいうものの、写真や映画という人工的な影に、人は自分を投影したり、現実を投影したり、世界を投影したりするのでしょう。影に影を見ているとも言えそうです。

影に心を投影する。影に心を投げて、そこに心の影を見る。

わくわく、ぞくぞくする話であることは間違いありませんね。

筋書きも、目的も、意味もない影たち

テレビ、映画、写真、絵画、文学、美術、映像、動画——こうしたものは人が現実の影、つまり現実とそっくりなものを求めて作った影です。

目的があり、ストーリーやドラマ、つまり意味のある影です。だからぞくぞくわくわくするわけですが、これだけ意味に満ちた影に囲まれて生きていると疲れることがあります。

外に出て、たとえば木々が地面や水面に落とす影たちを見るとき、ほっとする自分がいることも確かです。その影たちには意味がないのです。ストーリーも目的もありません。ただそこに「ある」あるいは「いる」だけです。

*

外に出なくても、屋内でまわりを見まわせば、意味のない影たちがいます。さまざまな家具や製品という人工物の影のことです。いま私のいる居間にはいろいろな光源があり、いろいろな物たちがあちこちに影を投げたり落としています。

映ったり写ったり移ったりする影たちもいます。誰かが動けば、何かが動けば影は移ります。揺れます。時の経過とともにもうつります。そうでなくても、つねにかすかに震えているのが分かります。

そこには筋書きもドラマもありません。

意味に疲れているからでしょうか。私は最近、意味のない影たちの意味のない揺らぎに心を動かされます。ほっとするのです。

とりとめのない話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#日本語 # 影 # 映画 # 写真 # 意味 # 蓮實重彦

陰に光を当てる

＊

陰に光を当てる

星野廉

2022年4月4日 18:32

目次

影の薄い陰

作文

岩陰で二人がすることは

ネガとポジ

陰と隠でイメージの韻を踏む

陰の隠然たる存在感

一樹の陰

影の薄い陰

影ばかり見てきたので、影の薄い陰にも光を当ててみたいと思います。複数の辞書で陰を見ると、陰は影の陰に隠れているようで、じっさいにはなかなか興味深い存在感を漂わせていると気づきます。

陰に光を当てることで、その影が薄まるどころか、濃くなりそうな気配を感じるのです。「隠然たる」という言い回しがありますが、陰には隠然たる存在感があると言えます。それは淫靡でもあります。

陰獣、陰湿、陰険、陰画、隠微、隠喩、淫蕩、淫乱。

後で触れることになるでしょうが、このように陰と隠と淫は音読みをすると韻を踏んでいるだけでなく、イメージにおいても韻を踏んでいる気がしてなりません。

ぞくぞくするのはです。

作文

まず作文をしてみましょう。

*

散歩の途中に木の陰で一休みした。

犬が木陰で身を横たえている。

岩の陰に身を潜める。

物置の陰でこっそり煙草を吸う。

二人は岩陰に身を隠した。

陰は「休む」や「隠れる」と相性がいいようです。

「岩陰」というのはなかなか意味深な場を感じられます。岩に普通ではない「何か」を感じるからかもしれません。

「木陰」とは違った「何か」が漂ってきませんか？ 私は「岩陰」に「におい」を感じます。湿ったにおいです。木陰と違って風がないからかもしれません。ああいうところには、苔が生えていてもおかしくないのです。

後ほど触れますが、岩や大きな石を信仰や崇拝の対象としている例が多いことも、そうしたしっとりしたイメージに結びついている気がします。

岩陰で二人がすることは

ところで、上の最後の例文で岩陰に身を隠した二人は何をするのでしょうか。

この二人を男女として読んだ方は多いと思われます。べつに男女じゃなくてもかまいませんが、隠れた二人が何をするのかが気になります。

ふたりの間には「何か」があるはずですよ。「あれ」でしょうか。「なに」でしょうね。そ

うです、「それ」ですよ。

このように代名詞という名詞の代わりに使う言葉は、モザイクでありぼかしです。いやらしく感じて当然なのです。

今回は、そういう「なに」の話もすることになります。陰、隠、淫、韻ですから、当然なのです。

＊

「二人は岩陰で愛を確かめた」。上品な言い回しですね。

「二人は岩陰で愛を誓い合った」。愛を誓い合うとは遠回しですが、やっぱりあれでしょうか。

「二人は岩陰で愛を交わした」。かなり核心に近づいた表現ですね。交は「かわす」だけでなく「交わる・まじわる」も連想させます。「まじわる」となると、辞書にはそのものずばりの語義が出てきます。「愛をかわす」が「愛を躲す」になると、いま述べたのとは真逆の意味になりそうです。

「二人は岩陰で愛をささやき合った」。遠回しなだけにかえっていやらしく響きます。陰で唇が動くさまが目浮かぶようです。露骨に書いてごめんなさい。

以上の各文は「二人は」と「岩陰で」と「愛を」という三つの要素に、「動作と様態」がからまり、絶妙な雰囲気醸し出したセンテンスと言えそうです。

まさに陰と隠と淫のハーモニーです。

ネガとポジ

陰の反対は陽だと言われています。

陰陽、山陰、山陽、陰画（ネガ）、陽画（ポジ）、陰性（negative）、陽性（positive）、陰気、陽気、陰極（-）、陽極（+）、陰暦・太陰暦（月）、陽暦・太陽暦（太陽）

いわゆるネガとポジの関係性が、こうした対をなす言葉にあらわれているのは、みなさんご存じのとおりです。

日が当たるか当たらないかから、イメージがうつり変わるわけですね。とても興味深いです。勉強になります。

＊

さきほど岩陰の話をしました。岩が崇拜されたり、信仰の対象になる場合には、岩の形が大きな役割を果たしているようです。形には両方あります。

両方というのは男女のことです。男性のあそこそっくり形状の大きな岩は見事なものとして尊敬されます。パワーのシンボルという感じです。

女性のあれにもそっくりな奥行きのある岩も崇められます。これも出産や子沢山など豊かさのシンボルとして敬われるみたいですね。奥行きがあるのですから湿り気を帯びていそうです。

どちらもよく分かる気がします。頭で分かるというよりも体感的に分かる感じ。下半身にぬるま湯を掛けられたように、じわっとくるのです。変な譬えをしてごめんなさい。

写真で見るとよく分かります。ヒトとしての太古の遠い記憶が呼びさまされるのかもしれない。手を合わせたくなるのです。

＊

陰部という言い方も興味深いです。男女共通です。隠す場所というイメージでしょうか。「女」と「陰」を組みあわせる言い方もありますね。「陽」と「物」をくっつけると男性のシンボルになります。

女性を陰、男性を陽とする分け方がおこなわれてきたと言えそうです。「君は月、僕は太陽」とか「あなたは太陽、わたしは月」と言う一方で、「君は僕の太陽だ」とも言うフレーズもあります。

英語になりますが、「You are my sunshine.」がタイトルの曲もありますね。「日向・ひなた」という名前が女性に付けられている例も、よく見られます。

陽子さん、月子さん、月と書いて「るな」と読ませる場合もありますが綺麗ですね。

広がりすぎました。話を陰に戻しましょう。

陰と隠でイメージの韻を踏む

陰を使った言いまわしをみてみます。

お陰さま、陰の実力者、陰で支える、陰ながらご成功を祈ります、彼女の人生には陰がある、陰に回る、陰で悪口を言う、事件の陰に女あり、陰で取り引きをする、陰で糸を引く、草葉の陰から見守る

ポジティブにもネガティブにもなりえますが、基本は「隠れて」とか「人目につかない形で」のようです。陰と隠のイメージの韻を感じます。やや無理はありますが、こじつければ、淫に傾いた例や場合も想像できますね。

「陰の実力者」で連想するのは、「影の内閣 (shadow cabinet) ですが、これは英語からの訳語だそうです。野党が陰で「組閣」して牽制するのでしょうか。

影武者も思いだします。陰にいて敵をあざむく場合と、黒幕として陰で首謀する場合の二つの意味があるようです。

陰の隠然たる存在感

ひらがなの「かげ」はなんて頼りなげな字面をしているのでしょうか。そのはかなさは、まさにかげではありませんか。かげろうのように心もとないのです。

一方で漢字の「影、陰、蔭、翳、景」はなんと堂々としていることか。厳めしく偉そうにさえ見えます。

日本語において、漢字は「ない」を「ある」と錯覚させる装置ではないかと言いたくなります。

漢語はないことをあると思わせる（におわせる、ほのめかす、ふりをする）日本語における仕組みではないか、なんて思ってしまいます。無い無い、無無なんていくら言っても、あるあると暗にほのめかしているのです。

(拙文「【小話】存在と無が、存在と存在に見えるという話」より引用)

*

個人的な印象ですが、「影、陰、蔭、翳、景」でいちばん陰の薄いのは陰だという気がします。蔭のほうが画数が多いだけ、まだ存在感があります。

「影 15、陰 11、蔭 14、翳 17、景 12」というふうに画数で見ると、やはり陰は負けています。一画違いの景はシンメトリーによるプロポーションがダントツです。立ち姿が綺麗ですね。翳はまさにかげっていませんか？ 影はバランスが取れて美しい。

やっぱり陰は見劣りします。

*

それでも陰には隠然たる存在感があります。

何か、こう、じめっとしてるし、じととした湿度が感じられるのです。おそらく、陰、隠、淫とイメージの韻を踏んでいるからではないかと踏んでおります。

それが露わになるのは漢字を使った熟語です。

陰獣、陰湿、陰険、陰鬱、陰気、陰膳（かげぜん）、陰謀、陰蔽（隠蔽）、夜陰、陰囊、陰萎、陰惨、陰間（かげま）、陰舞（かげまい）、陰子（かげこ）、陰（いわかげ）、木陰（こかげ）、緑陰、山陰、陰雲、涼陰、藪陰（やぶかげ）、陰生植物、陰陰、陰陰滅滅

こうやって見ていると陰の姿形という意味での陰影には、湿度、不気味さ、曖昧さ、得体の知れなさ、涼所感、低温感、いかがわしさ、卑猥さ、背徳感が漂っています。

いい味を出しているではありませんか。素晴らしいと思います。私は好きです。

*

なお、上の熟語の最初に挙げた「陰獣」は江戸川乱歩の中編小説のタイトルでもあるのですが、「陰性のけだもの、特にキツネ。」と、ネット上の「精選版日本国語大辞典」では説明されています。

ぞくっとする字面と音の響きのある言葉ですね。江戸川乱歩の『虫』という小説にも使われているので紹介します。私の大好きな箇所です。

彼と彼以外の凡すべての人間とは、まるで別種類の生物である様に思われて仕方がなかった。この世界の人間共の、意地悪の癖に、あつかましくて、忘れっぽい陽気さが、彼には不思議でたまらなかった。彼はこの世に於おいて、全く異国人であった。彼は謂いわば、どうかした拍子ひょうしで、別の世界へ放り出された、たった一匹の、孤独な陰獣いんじゅうでしかなかった。

（青空文庫より引用）

こういう厭人癖のある、エクセントリックを突っ走って突き抜けた人物を描くのが、乱歩はうまいですね。筆がさえます。同傾向の『鏡地獄』もお薦めしたいです。

一樹の陰

影の薄いと思われた陰に光を当ててみましたが、陰は意外と影が濃かったことに気づきます。「影、蔭、翳、景」には感じられない独特の存在感もあります。

とくに淫と通じる陰影は他の「かげ」たちにはないものです。また陰陽という対比が見せる壮大な構図は宇宙観に通じるものがあります。影が薄っぺらくみえるほどです。

*

最後に、陰の出てくる「一樹の陰（蔭）」という言い回しを使った文を引用してみます。

縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍ろぼうに餓死がしたかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云いったものだ。この垣根の穴は今日こんにちに至るまで吾輩が隣家となりの三毛を訪問する時の通路になっている。（夏目漱石作『吾輩は猫である』・青空文庫より引用）

新潮文庫版の注解では、次のようになっています。

たまたま同じ木の陰に宿るのも前世の因縁、という意味。

「一樹の陰」自体には隠や淫とのイメージの韻もなく、「木（の）陰」と同様に写生と書いていい純粋な描写の趣があり、故事への言及が暗にあるだけのすっきりした言い回しです。

この一呼吸の短い引用箇所には、この作品の長いスパンが要約および凝縮されていて、見事な点描を感じます。いつもいただく印象なのですが、漱石の自然描写には艶があります。この部分の、垣根、破れ、蔭、穴、（雌猫に会うための）通路という連鎖にも、艶やかな象徴を感じます。性愛（生殖でもあります）の象徴です。

（こう感じるのは、今回陰を見てきたからかもしれません。影が見るものなのに対し、陰は入るものだという気がします。陰は足の裏で踏みしめ、皮膚で感じるものなのでしょう。こうやって陰に光を当てるのは無粋というものです。）

引用文では、風景描写、動き、時の経過、交友関係、人生（猫生）の奥行きが、いわば一筆でさっと描かれています。さらりとつづってありますが、なかなか書けない文章だと思います。

#日本語 # 陰 # 漢字 # 陰陽 # 語感 # 夏目漱石 # 江戸川乱歩

うつるとうつすで影を編む

＊

うつるとうつすで影を編む

星野廉

2022年4月15日 13:25

目次

映る、移る

移る、移す

撮る、撮す、写す

写り（複製）、移り（拡散）、残る（保存）

影絵、幻影、「いる」

言葉を編む、影を編む

幻灯、幻影、映写

移っている

映る、移る

木の影が地面に映っている。

木の影が池に映っている。

上の二つの文で描写されている影は自然界に見られるものです。この場合の「木の影」は木の姿が映った影、つまり像のことであり、木そのものでも、木の姿形でもありません。

影が地面と池に映っています。太陽に照らされた物の姿、つまり像が光の現象として、地面と水面に映っているわけです。

これを「移っている」と考えることもできるでしょう。大昔の人（大ざっぱな言い方で恐縮ですが）は「移っている」と考えていたのではないのでしょうか。私の偏見かもしれませんが。

こどものころの自分は、「移っている」に近い気持ちで影を見ていたような気がします。

移る、移す

上の二文を少しだけいじってみます。

木の影が地面に移っている。

木の影が水面に移っている。

影が「映っている」ではなく、影が「移っている」にしました。「移る」というと、物の影や姿ではなく、本体が動くというイメージを普通はいただきますね。つまり移動です。

影が実体のように、つまり物として地面に、あるいは水面に移っているさまを思いえがいてみてください。

影が自立しているのです。本体の木とはべつに生きているのです。

*

もう少しいじます。

木が地面に移っている。

木が水面に移っている。

上の二文を見ていると、比喻のようにも感じられます。ただ、文字どおりに取って絵として頭に浮かようとすると、ちょっと戸惑います。すんなりとは視覚的なイメージにならないのです。

そこをうんと踏んばって、物としての実体が、地面に、あるいは水面に移っているさまを思いえがいてみてください。

なんだかシュールですね。不思議な世界、ファンタジーのような絵が目には浮かびます。

夢の光景のようでもあります。夢では何でも肯定されます。ありえないだけに、怪しげで妖しげでもあります。

とはいうものの、いったん、思いえがいてしまうと、不思議なもので、それもありかなという気分になります。当初の躊躇は消えて、いまでは難なくイメージできます。

慣れは恐ろしいものです。というか、想像力は大したものだと思います。想像力とは夢の片割れではないでしょうか。人の想像力は過剰で過激なのです。

撮る、撮す、写す

木の影が地面に映っている。

木の影が池に映っている。

上の二つの光景を絵に描いたらどうでしょう。写生です。

カメラで撮ったらどうでしょう。写真です。または映画とか動画です。

＊

木の影が地面に移っているのを絵に描く。写す。写生する。

木の影が池に映っているさまをカメラで撮る。写す。撮影する。

これは「移っている」ではないでしょうか。影という実体のないものではなく、紙と鉛筆の粉、印画紙、フィルム、画素に形や模様として存在しているわけですから、「移った」という気がします。

気がするどころか、移った影は人の外にあって物として確認できるのですから、「移った」と言わざるをえません。しかも残るんです。

すごすぎます。こんなことをしているのは、この星でヒトだけです。人はとんでもないことをしているのです。

「写す」は「移す」であり「残る」。

何かに似ています。

写り（複製）、移り（拡散）、残る（保存）

分かりました。あれです。

後で触れることになると思いますが、文字に似ています。文字は、写り（複製）、移り（拡散）、残ります（保存）。

こんなものは地球上に文字以外にないのではないのでしょうか。人はこの時点でも、せつせつと写し、移し、残しています。

「なぞる」から、「写す」、「移す」、「残る」。ここまで出世した文字に感動しないではいられません。それにしても、なんでなのでしょう？　なんで、こんなことが起こっているのか、私にはさっぱり分かりません。

やっぱり「なぞる」は謎です。

影絵、幻影、「いる」

話を木に戻します。

木の影が壁に映っている。

これは影絵に近いですね。綺麗です。たしか、こんな景色を見たことがあります。長い塀に木々が映っているさまが目には浮かびます。記憶の中の風景なのでしょう。どこで見たのかは思い出せません。

木の影が障子に映っている。

この光景を見た記憶はありませんが、目に浮かびます。これも綺麗です。目に浮かぶというのは、勝手に「絵」を思いえがいている、つまり作っているのでしょうか。偽の

記憶みたいなものです。

壁や扉に映る木の影も、障子に映っている木の影も、影絵と似ています。同じではありません。影絵は、人が意識して作った影、つまり人工的なものです。

影絵、つまり人工の影の延長上に、写真や映画や動画があるとも言えそうです。

＊

人工の影は、「映った」よりも「映した」であり、要するに「写した」であり、さらには「移した」ではないでしょうか。

物を移動させるという意味ではなく、影をわざと作るという意味の「映す」、つまり「写す」は「移す」に思えてなりません。

「写す」と「移す」は人工であり人為であり、「映る」は自然界の現象だなんて、図式的にまとめたくなくなります。

人工の影は何を移すのでしょうか？ イメージ、意味、物語が考えられます。どれもが人の中にあって確認も検証もできないものである点に注目したいです。

でも、人はその確認も検証もできないものによって動きます。

これも確認も検証もできませんが、人工の影は心や魂も移すのではないのでしょうか？

あなたは、愛する人の写真を踏めますか？ 尊敬する人の動画がいたずらに修正や加工されて平気ですか？

人の想像力は想像を絶します。

＊

話を戻します。

影絵は自宅でも簡単に楽しめます。光源と手と指と壁があれば楽しめます。あと、必要なものは想像力でしょうか。

(さきほど述べたように、想像力は夢の片割れです。過剰で過激な想像力があるから、人は人なのです。人からこれを取ったら、何も残りません。)

手と指を動かして、壁に影を映してみる。いまちょっと居間でやってみましたが、わくわくします。懐かしさでいっぱいになりました。

まぼろしです。幻影です。影が動いているさまを目の当たりにすると、「移っている」を体感します。そのリアルさは「映っている」どころではないのです。

さらに言うなら、「移っている」どころか、そこに「ある」のであり、そこに「いる」のです。動いて「いる」のです。

言葉を編む、影を編む

言葉は事物の影
言葉は現実の影
言葉は幻実という影

言葉は事物の影であり、現実の影だと考えることができます。

事物も現実も容易にいじれないから、影である言葉を人はいじるわけです。言葉はある程度、簡単にいじれます。現実のままならさに比べれば、はるかに思いどおりになる気がします。

言うことを聞いてくれそうな影、それが言葉です。もちろん、人工の影です。

*

言葉をいじり、作文する。

作文では、書くというよりも編むのです。編んで模様や形や姿を作るのです。それが影です。

あくまでも言葉という影なのにもかかわらず、現実や事物の影に思えてきます。人には、とほうもない想像力があるからです。

表情、身振り、話し言葉、書き言葉のうち、書き言葉である文字こそが人の作った最強の影であり——絵や映画や動画なんて目じゃありません——、人の過剰で過激な想像力と相まって、この文明をここまで築きあげたのです。

上でも述べましたが、文字は、写り（複製）、移り（拡散）、残ります（保存）。最強の人工の影と言わざるをえません。

*

言葉をいじり、作文する。

文章を書くことは、影を編むのに似ている気がします。

いま、私は、うつるとうつすという言葉を使って影を編んでいます。いじれない自然界の影（現実）の代わりにいじれる人工的な影（言葉）を編んでいるのです。

空しくないとさえ嘘になります。影は空っぽなのですから。

その空っぽを満たすのが想像力です。人の想像力の過剰さと過激さを感じます。

幻灯、幻影、映写

話を木に戻します。

窓ガラス越しに見える木を指でなぞる。

窓ガラス越しに見える木をマーカーでなぞる。

指でなぞるくらいならいいでしょうが、ガラスにマーカーで線を描いたり、塗りつぶしたら、叱られるでしょうね。そんなお子さんがいても不思議ではありません。

これが車の窓だったら大変なことになりそうです。

*

ガラス越しに見える木を、いろいろな色のある水性のマーカーで描き写したとすれば、それはスライドではないでしょうか。適切な光源と、壁かスクリーンがあれば、立派なスライドであり、立派な幻灯になりそうです。

想像しただけでぞくぞくしてきました。小学生のころに、学年別の学習雑誌の付録で幻灯セットがあったのを思い出しました。スライドはセットに含まれて用意されていました。

説明の絵を読むのが待ちきれず、息をはずませながら、紙製の幻灯機を震える手と指で組み立てた記憶があります。たしか、懐中電灯を光源にするものでした。

昼間なのでカーテンを閉めて、白い壁をスクリーンにして幻灯を見たのです。なにか悪いことをするような、後ろめたい気持ちが湧いて、よけいにぞくぞくはらはらしたような気がします。

移っている

あのときのあれが、どんなスライドだったのかは忘れました。

色つきのかさかさぺらぺらした透明のセルロイドかプラスチックのようなものでした。その紙みたいなものが、壁にうつりました。思いだそうとしているのですが、スライドの絵はぜんぜん覚えていません。

気が遠くなりそうなぞくぞくした思いだけが、いまここによみがえっています。息が苦しいくらいです。

あれは「映っている」ではなく「移っている」だったといまになって思います。それが、いまここに「移っている」気がします。

ただ、いまここに移っているものが何かのはさっぱり分かりません。移っているという思いだけがあるのです。

この思いは心地よいです。官能的ですらあります。しばらく浸っていたい気分です。

これを言葉で影と呼ぶ気にはなれません。いたずらに手なずけたくないのです。名づけずに、そっとしておきたいのです。意味もストーリーも要りません。

#日本語 # 影 # 幻灯 # 写真 # 記憶 # 思い出 # 幻影 # 映写 # 文字

意味のある影、意味のない影

＊

意味のある影、意味のない影

星野廉

2022年8月5日 08:12

影も陰も姿も像も反射も、すべてがかげと呼ばれていることに気づきます。
(拙文「「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれませんが。」より)

目次

影をうつす、影がうつる

一対一に対応する目映い影

言葉という影が、影という言葉に

正確に、細かく、うつす

現実をうつす

「似ている」の世界、「同じ(同一)」の世界

もっともっと鮮明にうつす

作られた影

筋書きやストーリーのある影

影に影を投影する

筋書きも、目的も、意味もない影たち

影をうつす、影がうつる

影といえば、映画や写真を避けて通るわけにはいきません。

幼いころに映画館で見た映画を思い出します。映画館が真っ暗なのです。いまの映画館は明るいです。

真っ暗な中で見る映画に惹きつけられ魅惑された記憶がかすかにあります。かすかで断片的なのですが、強烈なわくわくをともなう思い出なのです。

映画も本来は銀幕上に投げられた「影」なのです。その影に、人はいろいろなものを投影し重ねるわけです。影に影を重ねる映画の鑑賞はじつにスリリングな体験だと思います。

銀幕上の影に、言葉という影を重ねる行為もです。

＊

写真も影ですね。

私は映画にも写真にも疎いので、知っていることだけを頼りに書いてみようと思いません。この記事のためにあえて調べ物はしないという意味です。

できるだけ、いまここにあるもので、ああでもないこうでもない、ああだこうだを試してみるつもりです。

映画、写真、映画用のカメラ、写真を撮るためのカメラ、望遠鏡、顕微鏡、影絵、幻灯、スライド、複写機。

思いつくままに並べましたが、広げすぎたみたいです。それぞれの仕組みについてはよく知りません。まったく知らないものもあります。ただわくわくします。

私は研究者でも探求者でもないので、分からないという気持ちと不思議だという思いを大切に、楽しみながら書いてみます。

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうはずっと大切に思えます。目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

分からないときには知ろうとしたり分かろうとするのではなく、気づかないものに目を向ける。これが私には合っているようです。横着なのでしょうね。

一対一に対応する目映い影

話を映画と写真に絞ります。ざっくりと両方とも影だという前提で話を進めます。映画と写真で思いだすのが、写像という言葉です。中学か高校か覚えていないのですが、たしか数学の授業で聞きました。

ぼんやりとしたイメージは、AというグループとBというグループがあって、それぞれの構成要素が一対一で対応しているとか、多対一とか、そんな話だったと記憶しています。

調べれば真偽が明らかになるのですが、あえて調べずに、いま述べたイメージに沿って書いてみます。

大切なのは、一対一で対応するという話です。とても刺激的なイメージです。

昔の写真で、すごい解像度のものをテレビで見たことがあります。モノクロで見るから古い写真なのですが、細部が半端じゃなく鮮明なのです。鉱山の写真だった気がします。

集合写真もあったのですが、百人近い人たちが会しているのです。その一人ひとりの顔がそれなりにはっきりと写っていました。

写真は影なのに目映いくらい映えるのです。「映る」は「映える」。人が写し映した人工の影だから、映えるし生えるし栄えるのです。

一対一に対応することを押しすすめた、人のつくる影はあまりにも目映く、人が追いつけないくらいに鮮明なのです。

言葉という影が、影という言葉に

ここで頭の整理のために、「うつる・うつす」を使って作文をしてみます。言葉は文の中で生きるからです。「うつる・うつす」とは？　なんて考えても何も出てきそうにありません。

写真に姿が写る。母と写っている写真はこれしかない。このページに裏ページの絵が写っている。

板書をノートに写した。写本。写経。筆写。書写。複写。写生。

鏡に顔が映る。水面に木の姿が映る。影が壁に映る。障子に人の影が映る。この辺はテレビがよく映らない。テレビにあなたの家が映ったよ。目に映る像。

プロジェクターを壁に直接投影する。プロジェクター映像を白い壁に映す。映写機。

＊

難しいですね。こういうのは苦手です。辞書や用字用語集を参照しないと作文できません。大ざっぱな表記と言葉の使い方がつかめたので、これでよしとしましょう。

＊

影には「物の姿」という意味もあるのですね。

上の例文を見ていると、言葉は影だどつくづく感じます。影という言葉が言葉という影に擬態して、表情豊かに影の舞と言葉の揺らぎを演じている。そんな気がします。

言葉という音声の波や文字の形にも、影という光の濃淡にも、それが外にある限りは意味がないのです。それでいて、外にない限りは見て確認することができない。意味は人の中にある揺らぎではないか。そんな気がしてなりません。気がするだけです。

影は言葉をなぞる。言葉は影をなぞる。なぞるはなぞ、鏡にうつる影のように永遠に解けない謎。

影を前にして、人はなぞるしかなさそうです。

正確に、細かく、うつす

上の作文を見ていると、話が大きくなり、どんどん広がりそうな予感がするので、なるべく広げないようにします。

私にとっていちばん大切というか興味深いのは、一対一に対応することなのです。

映画も写真も一対一に対応させるのが目的で作ったものだという気がします。言い換えると、風景や物を正確に、しかも細かく、そのままに「うつす」ということでしょう。

「そのまま」というのは曖昧な言い方ですが、今回は深入りしないでおきます。これを本気で考えるのは素人には無理だという気がします。わくわくしないし、楽しくもなさそうです。

現実をうつす

物や風景を写真という形で、一対一に対応させる。

あっさり書きましたが、すごいことです。気が遠くなりそうになります。現実を「うつす」、つまり写し映し移すわけです。そんなことが可能とは思えないだけに、すごいなあと感心してしまう自分がいます。

うさんくさいのです。荒唐無稽にも感じられます。平たく言えば、「うっそー！」です。「ありえない」です。「よく言うよ」とも思います。

似ていると同じ（同一）は違います。

影は「似ている」の世界にいる（ある）と言えそうです。器具や器械や機械をつかわないと「同じ（同一）」を確認できない人間も「似ている」の世界に生きているのでしょう。

人は「似ている」という印象の世界（見える世界）から「同一（同じ）」の世界（観念の世界）を夢見ているのかも知れません。

もっともっと鮮明にうつす

一対一に対応する。

うーむ。対応するのでしょうか。すかすか、まだら、まばらならできる気がします。解像度の問題でしょうか。

これくらい鮮明なら、ま、いっか。ここまでそっくりなんだから、ほぼ同じっぼい。いや、もっともっと、くっきりはっきり、リアルに。

欲張れば切りがないと思います。贅沢を覚えるとエスカレートしそうです。これ以上を望みたいとは思いません。

作られた影

写真や映画は作られた影です。地面や水面にうつった影とはそこが違います。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうね。

何を見るためにでしょう。「そっくり」を見るためではないでしょうか。

「そっくり」を見るためには、正確で細かくなければなりません。解像度を高めるわけです。これは切りがありません。もっともっとになります。

(何にそっくりなのかといえば、現実にそっくりなのであり、同時にそれは人にそっくりであり、自分にそっくりなのだという気がします。このことについては、いつか記事として書いてみたいです。)

*

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

無限に広がった紙やスクリーンにうつすわけにはいきません。人間、そこまで欲張ってはならないでしょう。

映画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間ですが、これは長いものを編集したもののようです。たとえば、ディレクターカットとか言いますよね。完全版も聞いたことがあります。トレーラー（予告編）もあります。

いろいろな編集が可能だけど、最終的にとりあえず作られ配給されたのが「作品」みたいです。それぞれ、長さ、つまり上映時間が異なると考えられます。

いずれにせよ、作られた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。空間と時間を切り取っているからでしょう。切り取ることにより、切り捨ててもいるにちがいありません。

やはり作りものなのです。うさんくささがつきまといます。

筋書きやストーリーのある影

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。

写真であれば目的やテーマです。つまり記念写真だとか、エロ写真だとか、可愛い動物とか、報道写真とか、ブロマイドとか（死語ですか？）、カボチャの成長の記録とか、

指名手配とか、漠然と「涼しげな風景」とか、キャプションみたいなのです。

映画であれば、作品名、あらすじ、脚本、受賞歴、批評家や映画誌での評価、ジャンル、成人向けか否か、サウンドトラック……、あとが続きませんが、いろいろありそうです。とにかく、目的やテーマのほかに、話というかストーリーがあります。

ネットなんかの動画であれば、情報カメラによる映像とか、お笑いとか、ユーチューバーの動画とか、PVとか、MVとか……、目的やテーマやジャンルや用途があります。

要するに、地面の影、水面の影、鏡に映った影（像）とは違って、何らかの目的やストーリーがあって作られているわけです。

＊

鏡像というのも、じつは作られた影ですね。そもそも鏡は作るものです。丹念に磨きあげて作ります。作られたものに映る影は特別なものであるはずですよ。

自然界で水面を覗きこむのとは一線を画してしかるべきだと思われたい。

鏡には枠があります。何らかの目的があって、作られているし、それぞれの目的があって各人が枠のある鏡を覗きこむわけですよ。目的があるのですから、その始まりと終わりという時間的な枠もあります。

お化粧、試着、顔色を見るため、歯磨き、うっとりするため、白髪を確認するため、毛の残り具合を確認するため、口内炎の状態を見るため、鼻毛を抜くため……。

ぱっとしない目的とストーリーですけど、ドラマがあることは確かですよ。じつに人間くさいドラマですよ。

＊

作られた影には作られたストーリーとドラマがある。

なんてまとめることができるかもしれません。したがって、筋書きがあるとも言えますし、フィクションであるとも言えそうです。

「そのまま」撮ったと言っても、ある視点から撮影したのであり、機器を用いる以上、修正と調整と加工と編集なしには撮影と再生はありえません。

また、作意も作為もノイズもアクシデントも、撮る者の意図なしに生じるものですから、撮ったものは（写し映したものは）、どうしてもフィクション（作り物）であり、偶然の産物になります。

こうしたことは、私のような素人がここで指摘するたぐいの話ではなく、現場で撮っていらっしゃる当事者の方々がいちばんよくご存じのはずです。

＊

ストーリーとドラマは動きです。広い意味でのプレイ (play)、つまり演技、演劇、ドラマ、遊戯、演奏、競技、パフォーマンスがつまっているとも言える気がします。

だから、わくわくするのは。どきどきするのは。ぞくぞく、あらら、という感じ。撮る側ではなく見る側の私はそれを楽しむだけです。

影に影を投影する

作られた影には、作られたストーリーがあるという話でした。そう考えると、やっぱり現実ではないわけです。作った物ですから当然です。フィクション、虚構です。

ましてや、一対一に対応しているなんて、まさにフィクションでしかないわけです。

＊

り、いろいろな物たちがあちこちに影を投げたり落としています。

映ったり写ったり移ったりする影たちもいます。誰かが動けば、何かが動けば影は移ります。揺れます。時の経過とともにもうつります。そうでなくても、つねにかすかに震えているのが分かります。

そこには筋書きもドラマもありません。

意味に疲れているからでしょうか。私は最近、意味のない影たちの意味のない揺らぎに心を動かされます。ほっとするのです。

影を前にして、人は迂回するしかなさそうです。おそらく言葉という影にまどわされながら、でしょう。人が（に）先立つ影に、人が導かれるはずがありません。人は影には追いつけません。気づくのにもいつも遅れるのです。全体像を目にすることさえできないのです。

ぼけーっと影をながめながら生きる。これは人に備わった健全な知恵だと思います。さもなければ壊れるでしょう。だから、ぼけーっとしているのです。私のことです。手遅れかもしれませんけど。

#言葉 # 日本語 # 影 # 鏡 # 絵 # 文学 # 芸術 # 映画 # 写真 # 意味 # 迂回

大切な人の写真が踏めますか？

＊

大切な人の写真が踏めますか？

星野廉

2022年8月31日 07:58

「映す」も「写す」も、姿だけでなく心や魂を「移す」ということで、今回はまとめたと思います。

眠れない夜の遊びにお付き合いいただき、ありがとうございました。

(拙文「眠れない夜の遊び」より)

昨夜もなかなか眠りに就けなかったので、うとうとしながら考えたことを思いだして言葉にしてみます。

目次

地面に映る

鏡に映る

人工の影

影を写す

言葉は最強の人工の影

過剰で過激な想像力

想像力を消していれば、ボタンが押せる

地面に映る

木が地面に映る。

木の影が地面に映る。

木の姿が地面に影として映る。

実際問題として何が移るのでしょうか。移動という意味です。影が映っているわけですが、その影って何ですか？

たぶん理系の問題みたいなので、理系的な発想ではなく考えてみます。光とは何かとか影とは何かなんて、私には荷が重すぎます。わくわくしません。

わくわくするどころか難しそうで気持ちが萎えてしまいます。

＊

物が移っているわけではないですよね？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしか私にはできません。

姿が影として、その輪郭だけが歪んで地面にうつっている。いまズルをしました。映っているのか、移っているのか分からなくなったのです。

ひらがなは便利ですね。漢字と違って、分からないところを保留できるのです。ぼかせるのです（多義的になるとも言えます）。ひらがなモザイク説。

＊

輪郭はいいです。輪郭がうつる。木という物、つまり本体は移っていない。

これは確かでしょう。たぶん。

なんか変です。

輪郭じゃなくてシルエットではないでしょうか。輪郭は枠で、その中が塗りつぶされている感じですから、シルエットに訂正します。

＊

木が地面に影として映る場合には、木という本体はそのままで、シルエットが地面にうつる。

あっさりとしれっと書きましたが、不思議ですね。いったい何が起きているのでしょうか。謎ですから、なぞるしかなさそうです。空（くう）をなぞるのです。

想像するのです。像を想いえがく。イメージを抱く。抱きしめるのです。

鏡に映る

木が水面に映る。

木の姿が水面に映る。

実際問題として、何が移るのでしょうか。移動という意味です。地面の影とは違って、水面だと条件がよければ鏡みたいに映るわけです。

木の姿が鏡に映る。

これとほぼ同じではないでしょうか。映っているのは、姿であり、映像であり、鏡像とも言います。鏡像は私にとっては嫌な言葉です。理系ばいですよ。

辞書で調べてみました。やっぱり理系です。しかも数学とも関係あるみたいです。それに私の苦手な「鏡像段階」なんて言葉も載っていました。こういうもっともらしい用語はパスします。

＊

物が移っているわけではないですよ？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしかできません。

鏡に木が映っているのをイメージします。想像するという意味です。鏡を持って木のそばに行く気にはなれないのです。そんなところを近所の人に見られたらどうしましょう。

ただでさえ変人に見られているのに、へたすると通報されますよ。

「近所のおじいさんが、手鏡を持って桜の木のそばに立ってキョロキョロしています」

うちの居間でおとなしく想像しているほうが、ぜったいによさそうです。だいいち安全です。

*

木の姿が鏡像として鏡に映っている。木という本体の何かが移っているわけではなさそうです。木が傷ついたり、木の一部が欠けたり、減っているとは考えにくいです。

鏡像って何でしょう。理系的には考えられないので、想像しつづけます。左右が反対なんですよね。ところで、なんで上下はそのままなのでしょう。

なんだかとんでもない方向に行きそうなので、上下は考えません。

鏡像という言葉の意味不明なままに保留して使いつづけるのがいちばん、私にとって現実的な方法みたいです。

*

木が鏡に鏡像として映る場合には、木の本体はそのまま、その左右反対の鏡像が鏡にうつる。

あっさりかつしれっと書きましたが、不思議です。いったい何が起きているのでしょうか。

人工の影

ちょっと待ってください。

鏡に映す像は意識的にうつします。これは「写す」ではないでしょうか。さらに言うな

ら「移す」です。そもそも鏡は人が作るものです。人の作った物に人が意識的に像（姿）をうつすのです。

映像、影像、いや、むしろ影（かげ・えい）と書きたいところです。自然にできている影と、人工的に作った影とは違うと思います。

＊

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。写真であれば目的やテーマです。（拙文「意味のある影、意味のない影」より）

そうでした。そんなふうに考えていたのを思い出しました。

＊

人は影に意味を見るのです。自然の影であれ、人工の影であれ、その影に意味を見るのです。この意味には、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などが含まれます。

各人が影に勝手に意味を見るのですから、個人的なものでまちまちです。意味は人の中にあるものですから、確認も検証もできません。何らかの判断をするためには、各人の証言が必要です。

証言は言葉という形をとります。話し言葉であったり、書き言葉、つまり文字です。

影の意味は、文字として固定され、「残る・残す」ことが圧倒的に多いと思われます。

＊

影に何がうつっているかは、一概に言えるものではなく、各人がそれぞれ影に何を見るか、正確に言えば何を五感で知覚するかである、なんて言えそうな気がします。

もっと正確に言えば、影で各人のいづくイメージは刻々と変わるにちがいありません。猫を検索して、画像検索をするといろいろな猫の画像が出てくるのに似ています。一定していないし、固定していないように思います。

影に何が移っているかは、客観的にも普遍的にもとらえられないということですね。各人による言葉による証言しか、判断材料はないわけです。頭の中を見るわけにはいきません。

しかも証言は当てにならないでしょう。刻々と移り変わりつつある自分の中にある「何か」を言葉にするなんて土台無理なのです。だいいち、言葉はその「何か」ではないのですから。

言葉はお茶を濁すために存在するようです。

＊

とはいえ、言葉は大したものなのです。後で触れることになりますが、言葉によって、脳が暴走するのです（想像力のことです）。その起爆剤が言葉ですから、捨てたものではありません。

影を写す

人は影を意識的にうつします。影を作るのです。自分で作った影に意味を見たいからでしょう。正確に言えば、人は自分が見たい意味を見るために影を作るのではないのでしょうか。

ぜったいにそうです。さもなければ、わざわざ「鏡」（比喩です）を作ったり、その鏡に「影」（比喩です）をうつすなんて、面倒なことはしません。

人は自分の見たいものを見るために影を作り、あるいは見つくろった影を持ってきて、その影に自分の見たいものを見て、気持ちよくなりたいに決まっています。ぶっちゃけた話が、やらせなんです。

自分を基準にして人類を語って、ごめんなさい。

*

影を写生する。

絵による写生、描写。言葉による写生、描写。

この場合には、本体つまり被写体、写される対象は無傷のはずです。何かが減ったり加わったり、変化することはないでしょう。

せいぜい、写生される間に時間的な拘束を受けて、劣化する、腐敗が進む、あるいは成長するぐらいでしょうか。

*

影を写真に撮る。

静止影像としての写真、写真撮影。レントゲンやCTやMRIも含めていいと思います。

フィルムによる映画の撮影、デジタル映像による動画。これもCTとかMRIがある気がします。詳しいことは知りません。

この場合には、被写体は何らかの変化をこうむるようです。放射線を浴びるなんて、目に見えないし、その後遺症は時間の経過を待たないと確認できそうもありません。

あ、そう言えば私は、この種の撮影の前に何度も造影剤を飲んだことがあります。あれって体に何らかの影響を与えているはずですが、大丈夫なのでしょう。

フィルム撮影やデジタル撮影は、ただ見ているだけでは済まない気がします。人は撮りたい絵を取ろうとしますから、被写体をいじったり、移動させたり、光や風など環境

を変える可能性が大です。

*

映画や写真にはぜんぜん詳しくないのですが、撮影には加工、修正、編集がつきものだと聞いています。

よく考えると当たり前です。写真や動画は被写体である事物ではないわけです。

そこに特撮、漫画、アニメ、CGといったものを考えあわせると、訳が分からなくなります。

私には荷が重すぎます。研究でも探求でもなく、私は好きで楽しむためにやっているのですから、知らないことを調べて深入りはしません。

寝入り際にネット検索なんてできません。いまは眠れない夜のとりとめのない思いを思っているのです。

言葉は最強の人工の影

人はなんで言葉を使うのでしょうか？ 伝えるため、つまり伝達のためだけではない気がします。

人は気持ちよくなりたいから言葉を使うのだと思います。具体的には、言葉を入れたり出したりするのです。言い換えると、読んだり、聞いたり、見たり、触れたり、話したり、叫んだり、詠んだり、歌ったり、唱えたり、論じたり、書いたりします。ここには「伝える」も入ります。

伝えるとは他人とつながりたいからする行為ですから、やはり「気持ちよくなりたい」に通じると考えられます。じっさいには伝えようとして伝わることは難しいし不可能なことが多いのですが、それでもめげずに人はせっせと伝えようとしています。

読む、聞く、見る、触れる、話す、叫ぶ、詠む、歌う、唱える、論じる、書く、伝える
――。

どれも気持ちがいいです。適度に苦しいと、これまた気持ちがいいです。適度の締め付けや縛りは気持ちがいいものだということを、みなさん日常的に経験なさっているのではないのでしょうか。ああきつい、でも気持ちいいわ、なんて。

気持よくなるためにたしなむものに嗜好品と薬物がありますが、人にとって最高で最強の嗜好品であり薬物は何でしょう？ 言葉です。

人は言葉という最強の嗜好品であり薬物を楽しむために、さまざまな嗜好品や薬物をたしなんだり摂取します。

コーヒーあるいはお茶を飲みながら詩を書く、あるいは詩を読む至福の時。お酒をちびちびやり、好きな小説を読む最高の時間。書きものや読書の途中で煙草を吸う、これほど心が安らぐ時の過ごし方はない。そういえば、いわゆる麻薬やドラッグを服用して書いたと言われる文学作品は多いです。

お芝居や映画や楽曲やテレビ番組やネット上の映像にも、言葉がともないます。動きに満ちたスポーツも、言葉による解説と言葉で述べられるドラマがあつてこそ盛り上がります。映像や音楽や動作を一種の言葉と見なす人もいます。

持論ですが、人が臨終という究極の時に必要とするのは、あるいは頭に浮かべるのは顔と言葉だと思います。この顔については、またいつか書きたいです。

＊

話し言葉である音声も、書き言葉である文字も、事物とはぜんぜん似ていません。少し似た感じがする身振りや表情という視覚言語にくらべても、似ていない度ははるかに高いです。

それなのに音声と文字による意味の喚起力、つまり意味、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などを呼びさましたり、さらには音声と文字をきっかけに、それらの意味を勝手に生み出す力には、想像を絶するものがあります。

そうです。想像力のことです。

この文字の呼びさます、そして文字が勝手に生み出す力は、文字を学習した成果なのでしょうが、そのように言葉で置き換えたところで、不思議さは解消されません。

過剰で過激な想像力

人の想像力は、過剰で過激なのです。逸脱しているのです。

だから、「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字を見て、各人が勝手に猫を想像するのです。

「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字は猫に似ていますか？ 「ねこ」と発音して、その音は猫に似ていますか？

ぜんぜん似ていないのに、猫を想像するのです。あっさり書きましたが、すごいことではないでしょうか。腰を抜かしても罰は当たらないと思います。

*

言葉は人の作った最強の映像、つまり影だと思います。

話し言葉（音声）や書き言葉（文字）によって、意味という像（イメージ・印象）が浮かんだり、意味の暴走が始まるのですから、これは絵や影や写真や動画と同じく映像と見なしてかまわないと思います。

そんなわけで、写真と動画の話に移ります。

*

あなたは愛する人の写真を踏めますか？ その人ではなく、ただその姿が写ったものですよ。

愛する人の動画がけなされても平気ですか？ 動画を変なふうに加工作られて、冷静でいられますか？ その人ではなく、その姿が映っただけのものですよ。

あなたの愛するキャラクターやフィクシャスな人物の映像が汚されて、憤りや悲しみを感じませんか？ キャラクターやフィクションの人物には実体がないのによ。

想像力を消していれば、ボタンが押せる

愛する人の写真を踏める人は、想像力が欠如しているか、想像力を消している人でしょう。

想像力が欠如しているか、想像力を消していれば、平気で文字としての人を、数字としての人を処理したり処分できます。

(文字も数字も抽象だからです。抽象の恐ろしさは「顔」がないことです。「顔」とは、人の中で想像力をかきたてる「何か」なのでしょう。)

数字を思いうかべてみてください。並んだ数字や、個人を識別する番号を。文字や、名前という文字列でもいいです。

抽象的なものは、人の目には、似ていたり、そっくりだったりします。だから簡単に複製ができるし、数字や文字として簡単に処理も処分も廃棄もできます。何をとって、人を、人がです。

個性が消えているからかもしれません。顔が見えないのです。顔が見えないものや顔が感じられないものに対して、人は冷淡で残酷になります。

ニワトリやサンマの顔が見分けられますか？ 私にはそっくりに見えます。

さらには、文字や数字としての人を大量に処分するボタンを押せるでしょう。いろいろなボタンがありますが、もう何度も、無数に押されていますね。無数の人が大怪我をしたり命を落としてきました。

最終ボタンだけは押す結果にならないでほしいです。祈っています。

私たちは抽象と無縁であるわけにはいきませんが、抽象に抗う必要があるように思います。抽象に抗うための武器は、個人的なレベルでの想像力と個人的なレベルでのイメージではないか。そんな気がします。

どうして「個人的なレベル」にこだわるのかというと、想像力とイメージは集団で共有されるときに抽象となり、その集団が大きくなるほど抽象度が増すからです。(拙文「異物を入れる、異物を出す」より)

大切な人の写真が踏めますか？

もし踏めないとすれば、移っていると感じているからではないでしょうか？ 映っているでも、写っているでもなく。そして、それが想像力ではないでしょうか。借り物ではない、共有物でもない、個人的なレベルでの想像力です。

移っているのは、何か？ 人それぞれです。まさに、それがここで言っている個人的レベルでの想像力ですから。魂、心、命、思い、顔.....。

Imagine.

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉# 文字 # 漢字 # 鏡 # 影 # 写真 # 映像 # 映画 # 動画 # 想像力

似ている、そっくり、同じ、同一

＊

似ている、そっくり、同じ、同一

星野廉

2022年9月3日 14:39

目次

再現ではなく再演

顔が見えない

そっくり

そっくりという抽象とまぼろし

そっくりに囲まれて、そっくりに生きる

同じ、同一

同じ、同一という抽象とまぼろし

抽象、まぼろし

再現ではなく再演

夢の中でストーリーを思い出すことがありますか。

夢のストーリーではなくて、夢の中に小説とか映画とかテレビドラマとかそうした作品が出てきて、そのストーリーが思い出せるだろうか、という意味です。

ストーリーといえば、ある程度の長さを持ったものとイメージしています。自分の見た夢を例に取るしかないのですが、夢の中でこれまでに聞きし作品の断片が出てくることはあります。登場人物であったり、演じた俳優であったり、アニメの主人公やキャラクターであったりします。

夢の中で映画やテレビを見るという展開もありそうですが、そんな夢を見た記憶はありません。夢の中で誰かの話を聞くという場合の話も、筋があるとすれば一種のストーリーではないでしょうか。

夢の中で、昔話や童話の登場人物やある特定の場面が出てきたことはあるような気がします。でも、こうやって夢を思いだして、後付けで言葉にしているのですから、こじつけっぽくて怪しいものです。

私にとって夢とは、見ている最中には断片的で薄っぺらいものを感じられます。それにこうやって意味づけするのは、夢を思い出しているときの覚めた意識なのではないかという気がしてなりません。

夢のさなかには意味づけなどする余裕はなく、あれよあれよと展開していきます。こう考えると、夢は再現できないという意見に傾きますが、そうすると現実と同じではないと思ひあたりました。

夢も現実も再現できない。過去も再現できない。そもそもヒトに再現などできるはずがない。人の意識の根本には、「何か」を「その「何か」とは異なるもの」で置き換える、つまりすり替えるという仕組みがあるのだから——。そう考えると、再現できないのは当然だと納得しないではられません。

ただ、再演ならできるというか、再演しているのではないかという気はします。再演ですから、毎回、ずれているという意味です。再演の演とはプレイ (play) をイメージしています。演技であり演奏であり競技であり遊戯なのです。

顔が見えない

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形 (自分の姿) ではなく「とき」 (自分のイメージ=心象) であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがひありません。他のものを見るのとは異なる次元に

いると言いたいくらいのお話なのです。

ひょっとすると、鏡の前では見ているのではなく、おののいているとしか考えられません。それくらい鏡を覗くと緊張するのです。たとえば、鏡に映っているとされる自分を見つめながら、いきなり目をつむるとしますね。そのときに瞼の裏か頭の中か知りませんが、自分の顔が浮かんでほしいのに浮かばないのです。

浮かべ浮かべと念じて、浮かぶのはいつか見た写真に映った自分の顔であり、ほんの数秒前に鏡に映ったはずの自分の顔ではないのが不思議でなりません。つまり私の頭の中にある自分の顔は、ぜんぶ写真で見た顔だということになります。

とにかく見えないのです。ひとさまのことは知りません。問いただすような親しい相手がないからなのですが、たとえ親しい人がいたとしても、恥ずかしくて尋ねる気にはならないでしょう。親しい人とはこのたぐいの話はしたくはないのです。

いつだったか、出てくる人がことごとく同じ顔をしているという夢を見たことがあります。見たのは一度だけなのですが、何度も何度も繰り返して思い出したので、いま覚えているその夢はそうとうズレているにちがひありません。

そういえば、どの登場人物も同じ顔をしている映画があったら面白いだろうと考えたこともあります。そんなことを想像したらぞくぞくしてきました。軽い息切れさえしてきました。この手の話が私は好きみたいです。この手の話というのは、顔とか表情とか仕草とか、似ているとかそっくりとか、そういうたぐいの話です。

考えていると時間が経つのを忘れるほどです。

そっくり

掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。

上に引用したのは有名な一節ですから、ご存じの方も多いでしょう。そうです。夏目

漱石の『我輩は猫である』の冒頭のほうにある文章です。あの長い小説で私がいちばん好きな箇所です。

人の顔を猫の目から見ているという設定ですが、もちろん、これはある人間が想像、いや空想した猫の視点であって、それ以上でもそれ以下でもありません。そもそも、小説とは人による人のためのものですし、漱石先生はそれくらいのことは意識してお書きになったにちがひありません。

いずれにせよ、人間以外の生き物になった自分を空想するのはわくわくして楽しいし、いい頭の体操になります。

あなたは猫の顔が見分けられますか？ 猫や犬は人間にとって最も身近な生き物ですし、ペットとしている人も多いですから、見分けられる人は珍しくないと思います。ニワトリ、牛、馬、ヤギなどの家畜として飼われている生き物についても、その業者さんたちの中には見分けられる方が多いと聞いたことがあります。

要するに興味や愛着があれば、見分けられるのではないのでしょうか。逆にいうと、興味や愛着のない人には、どれも似たり寄ったりに見えるような気がします。

つまり猫やニワトリやイワシから見れば、ヒトはどれもそっくりというお話です。もちろん、猫やニワトリやイワシに聞いたことはありませんから、ここでしているのは戯言にほかなりません。

＊

スーパーの様子を思い浮かべてください。イワシ、サンマ、キュウリ、トマト、パック入りの牛乳、ヨーグルト、マヨネーズ、蚊取り線香、乾電池……。

こうしたものたちは、そっくりなものが集めて売られていますね。そっくりという基準では動物、植物、製品とか、生き物か無生物か、などという区別は意味がありません。そっくりは印象だからです。いちいちその出自に注目はしません。

見た目至上主義みたいところが、そっくりにはあります。似ているとそっくりの区別もきわめて曖昧でいい加減です。そもそもそんな区別や分析とは遠いところにあるのが、そっくりなのです。

ちょっと分析すると、スーパーやホームセンターや家電の量販店で並んで売られている、そっくりなものたちには、製品であれば大量生産され、動植物であれば大量に飼育や栽培された、あるいは捕獲されたり採取されたという共通点があります。

そっくりであるほど、十把一絡げ的に、まとめて扱えるからでしょうね。一つ一つが違くと値段もつけにくいし運びにくいにちがいありません。なにしろ、早くさばくのが商品の販売の鉄則みたいです。個性と最も遠い世界にあるのが量販店で売られる商品なのでしょう。

*

そうした大きなお店では、売る人も制服を着て、そっくりに見える場合が多いです。上で述べたようにあくまでも印象の話です。そうしたお店で働いていらっしゃる方には失礼な言い方になっていることをお詫び申し上げます。

場所もそうです。特に同じチェーンのお店だと、店舗のつくりも、商品の陳列の仕方も、流れる音楽も、店内の匂いも、雰囲気も、トイレの様子も、レジでの人の流れも、そっくりに見えてなりません。こういうことに割と敏感なせいか、私は軽い目まいを覚えることがよくあります。

特にコンビニがそうです。フライヤーというのですか、あの油の匂いを嗅いで頭がふらふらしているところに、既視感の洪水というか、反復の反復というか、目の前のコピー感と記憶にあるコピー感がシンクロして、倒れそうになることも珍しくありません。

どこに行っても、同じなのです。そっくりなのです。視覚だけでなく、嗅覚、聴覚、たずまい、そうしたものを総動員したうえで、そっくり同じように感じられます。やはり、似ているどころか、そっくりと言いたいところです。

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりな

お客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、嘔然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

そっくりという抽象とまぼろし

自分もまたそっくりである。そっくりの一つである。こうした状況は、無関心と関係があります。つまり、自分に興味がなく愛情も感じない人にとっては、自分はそっくりでしかない、その他おおぜいの一人でしかないと考えると分かりやすいでしょう。

立場を逆にして、世界のどこかにいる誰かは、あなたにとってそっくりなものの「一つ」であり、「一人」と数えるにも値しないほどのものだと考えられます。言い換えると人間としてではなく、抽象的な存在、たとえば76億人という数字の一つにすぎないのです。

数字や数は抽象です。お金も数値という意味では抽象です。

ただし、お金がたとえ15,867,232円という具体的な数字であっても、それが家を購入する資金であれば、抽象ではなくなります。意味とイメージをともなうからです。数字も、777であれば、ある人たちにとっては特別の意味とイメージを持ちます。42が不吉だと感じる人もいます。

0203が自分の誕生日と同じ並びであれば、あるいは何かの暗証番号であれば、それは数字でありながら言葉と同じくらい意味やイメージが付着したものになりえます。また、たとえば364という数字が、その日に何度も目につけば、それを「シンクロ現象」と見なす人も多いようです。

数学者でさえ、そうした数字の非抽象化とは無縁ではないでしょう。ある数字を見て冷汗をかくたり、あるいはにんまりするという意味です。承認欲求とかゲシュタルト崩壊という、一見客観的であったり抽象的な言葉をつかってメタな視座に立っているつもりでも、そうしたものから逃れている人などいない、とえば分かりやすいかもしれま

せん。

抽象というのは人が考えているほど抽象でなかったり、人が思いもしない物事が抽象として立ち現れる事態もおおいにありうる気がします。

そっくりは印象なのですが、このそっくりさえも抽象として立ち現われる気がします。

そっくりに囲まれて、そっくりに生きる

たとえばどこかをスマホを見ながら歩く人たち。たとえばどこかの待合室でスマホに見入る人たち。

スマホというモノもそっくり、その画面に映っている映像もそっくり、聞こえてくる音声もそっくり、ときどき鳴る合成音やブルブルいう振動もそっくり、そのスマホに見入っているヒトたちもそっくり、ヒトたちの身につけているモノたちもこの瞬間に地球の至るところでそっくりなものがあるはずです。

どことは言いません。至るところでの話ですから。誰とは言いません。誰もが免れない状況なのですから。

「わたしはスマホはつかわない」ですか？ テレビでもラジオでも新聞でも本でも車でも病室のベッドでも棺でもお墓でもかまいません。いま挙げたもののほとんどが、大量生産され、印刷という形で複製されたものです。あなたがつかっている、目にしている、耳にしている、皮膚にまわりついている、横たわっているそれは他のどこかにそっくりなものがあるはずです。

至るところにあるのは厳密な意味での同じや同一ではありません。同一は世の中にたった一つしかないものを言います。分子や原子レベルでの「同じ」だと考えてもいいでしょう。こうなると同一とは、個性とかアイデンティティとかいう言葉で語られる次元にはない気がします。

いま話しているのは、そっくりについてです。

なにしろ、そっくりなのです。そっくりはそっくりな点がそっくりであるところまでいくと、抽象というのがふさわしいのではないかと思われることがままあります。ここでの抽象とは、「ヒトの頭の中にしか存在しない」くらいの意味です。言葉の綾と置き換えても大差ない気がします。

言葉は物も事も現象でもありません。その代理なのです。したがって、言葉をつかって、そっくりとか似ているとか同じとか同一とかいう話をすると、齟齬が起きます。これは致し方ないことでしょう。

ではどうしたらいいのでしょうか。一つはレトリックでお茶を濁すことです。ほのめかすとか匂わせるのもいいでしょう。言葉の限界と幻界を意識して、一見矛盾であったり荒唐無稽やナンセンスに感じられる言い回しをして、その限界および幻界ぶりをほのめかし匂わせるという、ほのめかし方や匂わせ方もできるでしょう。

言い換えると、本当は何も言えないという限界と幻界を意識しつつ、何かを言っているふりをして、実は何も言っていないふりを演じるイリュージョンをすることです。つまり、「ふりのふりをする」ことなのですが、そう言うくらいの芸しかいまの私には思いつかないのです。そうです、私は芸のつもりで記事を書いています。私は、note という寄席にいるピン芸人なのです。申し遅れましたことをお詫び申し上げます。

レトリックとたわごとはさておき、話を「そっくり」にもどしましょう。

同じ、同一

「そっくり」という、「その他おおぜいのうちの一つ」（複製としての抽象）が、ある人にとっては「掛け替えのないたった一つのもの」（同一性を帯びた具象）であるということもあります。

あるお子さんが、大量生産された玩具の一つを気に入り、それでしか満足しないというケースもおおいに考えられるという意味です。愛車もそうでしょう。お気に入りの品とは、そういうものです。愛着と興味がそこに詰まっているという言い方もできるでしょう。

「そっくり」な抽象的な存在である複製の一つに、「顔」を見だし愛着を覚えれば、それは「個性」を帯びた具象になるのです。

抽象と具象のあいだにはグラデーションとしての愛着があるのかもしれませんが。この愛着を私は「顔」としてイメージしています。あるものに「顔」を見る度合いが高いほど具体性を増すという意味です。この場合の「顔」とは、赤ちゃんにとってのまわりにある「顔」のことです。

また、抽象と具象のあいだにある愛着には、生まれながらに備わっているものと、後天的に学習や習慣によって育まれるものの二種類あるような気がします。

＊

ここで整理します。

「似ている」と「そっくり」は印象であり、印象は人の中にあるものですから、確認できません。基準が、人それぞれという意味です。「同一」とは世の中にたった一つのもので、これを確認するのは至難の業です。ヒトの知覚と認知機能には限りがありますから、器具・計器、器械、機械をもちいて初めて「同一」かどうかを確認できます。

「同じ」は曖昧な言い方で、人によっては、あるいは時と場合によっては、「そっくり」と「同一」の意味でつかうことがあるでしょう。この記事でも文脈に応じてつかい分けるつもりです。

＊

話を進めます。

文字が究極の「同じ」であり「同一」であることを思い出しましょう。

猫、ねこ、ネコ、neko。

どんな活字やフォントや文字の大きさであろうと、誰が口にしようとして、いま挙げた語

は同じです。文字は複製なのに、そっくりどころか、むしろ同じであり、同一なのです。

ここでの文字は、インクの染みとか画素という意味ではありません。抽象的な意味での「猫、ねこ、ネコ、neko」という語の話をしています（観念や概念という言葉をつかうヒトもいるでしょうが、観念や概念は手垢にまみれた言葉で抽象的な話をするのには適していません）。

文字を含めて、言葉は外からやって来るものです。人の内にはありません。「猫、ねこ、ネコ、neko」は、あなたが生まれたときに既にあった語です。それをあなたは真似て学んだのです。ちなみに真似ると学ぶは同源らしいですが、ここではそんなことはどうでもいいですね。

大切なことは、文字を含む言葉が外から来ているものであり、外にあるものだという点です。正確に言うと、人の外にある言葉しか、他人といっしょにその存在とありようを確認できない、となります。

同じ、同一という抽象とまぼろし

同じとか同一という抽象は、外にあり、外と内を行き来します。これが抽象なのです。というか、抽象というとりとめのないものを言葉にするさいの一つのイリュージョン、つまりレトリックです。言葉の綾とも言います。

さて、言葉、とりわけ文字は同じであったり同一であるからこそ（つまり抽象であるからこそ）、人の外にあったり、外と内を行き来するのですが、これは意味やイメージを取り去った文字や数字だという説明もできます。文字や数字には意味とイメージが付きもので、「意味とイメージを取り去った文字と数字」なんて人にはとらえられないものなのかもしれません。

ややこしいですね。実のところややこしいのです。簡単にすばっと切り取ることができれば、そんないいことはありません。というか抽象とか「意味とイメージを取り去った文字と数字」なんて考えてもいいことは一つもありません。こういうことは、本気でやることではないのです。単なるお話とか戯言として楽しめばいいという意味です。人それぞれですけど。

抽象、まぼろし

「似ている」と「そっくり」は印象であり確認できないので、まぼろしだと考えてみます。まぼろしは、人それぞれがいただくものです。人の中にあるものですから、見えないし、触ることもできませんから、他の人といっしょに確認しようがありません。

「同一」（世界で宇宙で「たった一つ」）は、計器や機械をもちいないと人には確認できません。「同じ」は曖昧です。時と場合によって、そっくり寄りであったり、同一寄りであったりします。

「同じ」には複製として「同じ」という場合があります。典型例は、文字です。文字の抽象的な部分、つまり形の特徴をとらえて、人は「同じ」と知覚し認識していると考えられます。学習の成果です。何度もなぞったり書いたり読んだりして真似て覚えていきます。学習ですから、間違いもあります。

＊

複製としての「同じ」を、絵画で考えてみましょう。版画を除いて、実物とか本物と呼ばれているものはふつうたった一つしかありません。同一と呼んでもよさそうです。絵画の鑑賞は複製でおこなうことが習慣化されていますが、さまざまな複製があります。粗悪な複製もあれば、精巧な複製もあるでしょう。程度の問題です。

印刷物であれば、紙質、インク、濃度、鮮明度が異なります。ネット上であれば、端末の環境によっても左右されるでしょう。絵画における複製の複数性と多様性を無視することはできないと思われます。

次に、複製としての「同じ」を、文字で考えてみましょう。文章もまた絵画と同様に複製で読まれることが習慣化し、一般的になっています。たとえば、小説、新聞、雑誌、論文、公用文といった文書（テキスト）は複製として存在し、拡散（流通）し、複製され（複製の複製です）、保存（保管）されると言えるでしょう。現物（実物）で利用されるもののほうが圧倒的に少ない気がします。

文字の複製にも、複数性と多様性が見られます。書体、フォント、サイズ、レイアウト、印刷物であれば紙質、ネット上であれば端末の画面に差があります。

＊

複製では、たった一つという意味での「同一」（同一性）よりも、同じであるという抽象面での類似性を利用して、拡散（流通）し、複製され（複製の複製です）、保存（保管）されるようです。

この類似性に支えられた「同じ」ですが、これを学習の成果だと見なせば、学習できない生き物には通じないだろうと考えられます。その意味（ヒトの頭の中にだけ存在するという意味です）で、複製としての「同じ」は、抽象であり、同時に、その意味でまぼろしだという気がします。

一概には言えないでしょうが、複製としての「同じ」（たとえば、文字や絵や映像）は、イヌやネコやニワトリやイワシには通じないだろうと思われまふ。ただし、生き物によっては部分的な学習は可能かもしれません。なお、かなりうまくいっているらしい機械に学習させることについては、ここでは触れまふせん（ひとこと言うなら、人のつくった機械は人の外にある「外」です）。

一方、「同一」（複製としての「同じ」とは対照的に）は、ヒトの知覚と認知機能を超えた精度の「類似」の話であり、ヒトのつくった機械や光学的な仕組み（ヒトがつくったとはいえ、ヒトの外にある「外」です）は、同一（ガチガチの抽象です）に支えられているようなので、まぼろしとは言いにくい気がします。ある程度の有効性が認められるからです。

まぼろしのおかげで、ヒトが仲間を月面に立たせたり、2000年問題に打ち勝ったり、地球の気温を何度か上げたりした、なんて言い方は、プライドの高いヒトが許さないにちがいありません。

以上、私小説あるいは心境小説的なお話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉 # 表象 # 日本語 # 抽象 # まぼろし # 似ている # そっくり # 同一# 文字 # 数字

影に先立つ【引用の織物】

＊

影に先立つ【引用の織物】

星野廉

2022年9月4日 08:15

ガラスの内には典雅なニス塗りの、棺が飾られて、これも朝日を浴びていた。店の奥にはさらにいくつかの棺が、すこしずつ意匠を異にするようで、壁や椅子にやすらかに立てかけられ、楽器のようにも見えた。

(古井由吉作「物に立たれて」(『仮往生伝試文』所収)より引用)

目次

棺＊

棺＊＊

棺＊＊＊

棺＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊＊＊

枠と境

そっくり

真似る

見えないものは目の前にある

枠にひれ伏す

決めたのではなく決まった

影に先立つ

棺＊

人間には一人であるべき空間がある、と彼女はよく考える。寢床、風呂、鏡の前、ス

トレッチャー、病床、死の床、棺、安置室、火葬炉、墓。夢の中や心の中と同様に、そうした場所には誰も入ってほしくない。できれば一人でいたい。
(拙文「一人でいるべき場所」より)

棺**

たとえばどこかをスマホを見ながら歩く人たち。たとえばどこかの待合室でスマホに見入る人たち。

スマホというモノもそっくり、その画面に映っている映像もそっくり、聞こえてくる音声もそっくり、ときどき鳴る合成音やブルブルいう振動もそっくり、そのスマホに見入っているヒトたちもそっくり、ヒトたちの身につけているモノたちもこの瞬間に地球の至るところでそっくりなものがあるはずです。

どことは言いません。至るところでの話ですから。誰とは言いません。誰もが免れない状況なのですから。

「わたしはスマホはつかわない」ですか？ テレビでもラジオでも新聞でも本でも車でも病室のベッドでも棺でもお墓でもかまいません。いま挙げたもののほとんどが、大量生産され、印刷という形で複製されたものです。あなたがつかっている、目にしている、耳にしている、皮膚にまわりついている、横たわっているそれは他のどこかにそっくりなものがあるはずです。

(拙文「似ている、そっくり、同じ、同一」より)

棺***

* 枠、タブロー、スクリーン

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしていると思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。聞こえないものを真似ている。感知できないものを真似ている。知らないものを真似ている。

なぞる。何かはわからないままになぞる。なぞっているという意識なしになぞる。

*

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。空(くう)をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

*

枠、frame、フレーム、figure、フィギュア。

仏壇、位牌、写真、卒塔婆、墓、墓石。棺桶、棺、火葬炉。

地獄絵、極楽絵図。

アイコン、アイコン、アバター、分身。

(拙文「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」より)

棺****

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。冷蔵庫をつくったために、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。パソコンをつくったために、パソコンの従者や下僕になった。スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わせて生活するようになった。

それだけではない。

大量生産されたそっくりなものを使う人間は、地球のあちこちで同じ仕草同じ動作をするようになる。そっくりがそっくりを生む。そっくりをそっくりが真似る。シンクロ、同期、似ている、激似、酷似、そっくり、同じ。

*

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。うつったものに似せる、うつったものに似てくる。ミメーシス、模倣、描写。

うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

(拙文「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」より)

棺*****

寝入るとき、人はとつぜん一人になります。二人で抱きあって寝ていたとしても、眠りに入った瞬間に二人は別れます。どんなに愛し合っている、二人いっしょに眠りの中にいることはできません。

お墓とはちがうのです。そんなの、嫌ですか？ 悲しいですか？ お風呂もベッド

も夢も、いっしょじゃなきゃ嫌。せっかく生きているのに。人生の三分の一は眠っているというのに。

お風呂はお墓に似ている、と書いた作家は誰だったか？ それとも、浴槽は棺桶に似ている、だっけ？ あ、トイレで縦長のドアが並んでいるのを見るたびに、縦に並べたお棺に見えると言った女性を思い出しました。

詩を書いていたあの人にまた会いたいです。夢でもいいですから。

(拙文「同床異夢、異床同夢」より)

棺*****

いま自宅の居間にいる私は自分の視界を意識しようと努めているのですが、その視界がどんな形をしているのか、さっぱり見当つきません。みなさんはどうですか？ 横長であるという気はしますが、長方形だという感じはありません。横に長い楕円形みたくにも感じられます。

そう考えると、映画やテレビやPCの画面に似ていますね。本は縦長ですが、見開くと横に長いようです。昔の巻物もそうでした。人の頭というか意識の中には長方形の枠があるのではないかと疑りたくなります。それをなぞるといふか真似て、物をつくっているのではないか。私たちは長方形に囲まれていませんか？

生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いといふか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、PC、スマホ……。人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めっちゃくちゃ言ってごめんなさい。

人は自分（あるいは自分の中にあるもの）に似たものをつくり、しだいにその自分のつくったものに似てくる、似せてくる、とつねに感じているのですが、人は「自分のつくったもの」に「自分もどき」を見て初めて、「自分そのもの」に気づくのではないか、なんて考えてしまいました。

そのひとつが長方形の枠ではないでしょうか。

(拙文「直線上で迷う」より)

棺*****

長方形というと、ひとりである場所をイメージしてしまいます。上で述べた長方形の場所や「容れ物」ではひとりでない場合のほうが多いのにです。たぶん、多くの人に囲まれていても人はひとりであるという気持ちが強くあるからだと思います。

寝床、ベッド、布団、病床、シーツ、ストレッチャー、トイレの個室、棺桶、お墓、遺影。こうした場や容れ物にひとりである人が頭に浮かびます。誰かに似ていますが、想像の中にあるその顔は見えません。見たくないのかもしれませんが。

意識だけとか目だけになって道を進むさまが、寝際によく浮かぶのは車に乗っている時を思いだしているのかもしれませんが。道は、たとえそれが獣道であっても、舗装された道路であっても長方形を延長していったものに見えます。

テレビにしろ、映画にしろ、液晶画面にしろ、本にしろ、車窓にしろ、枠があり、その枠はほぼ横に長い四角に見えます。視界もほぼ横長の楕円形に思えます。その横に長い長方形の枠のある光景を見ながら、人は生きていく。そのあいだに枠を意識することはまれにしかない。

こういうのはこじつけなのでしょうが、こじつけというAとBに置き換える作業が、視覚や知覚全般の根底にあり、たとえば言語活動や広義の比喻や印象やイメージという形で、人においてあらわれているのだと思われます。目だけでなく、また意識だけでなく、魂の働きだという気がします。

(拙文「夜になると「何か」を手なづけようとする」より)

棺*****

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。これもレトリックですけど。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

スマホに限りません。車がそうです。自転車もそうです。三輪車もそうかもしれません。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産されたそっくりさんたちですが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をします。

ひとりひとりの顔も個性も違いますが、やることがそっくりなのです。

(拙文「私たちは同じではなく似ている」より)

枠と境

名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name

difficult to tame

difficult to frame

抽象だから、似ているというよりも、そっくりというよりも、同じであり、同一。同期。

same

なぞ、なぞをなぞるというゲーム。なぞるが目的化して空回りする。

game to play

aim

aimless game to play

何のため？ 名前のため？

aim、name、fame、frame

それは罠だってば！

You're framed!

筋書き (aim) をなぞり、名 (name・fame) を残し、枠 (frame) を残すのに血道を上げる。

ゲーム (game) をプレイ (play・演じ戯れ競い奏で賭け、なぞり) しながら、自分が獲物と餌食 (game・prey) になってしまうのに気づかない。いまは祈る (pray) べき時なのに。player ではなく prayer であるべきなのに。

いまはもう、両の足で立つのもままならないのに気づかない。

We're already frail and lame.

言葉にひれ伏し、辻褃合わせに終始する非難合戦。

blame game

敵に屈しているのではなく、言葉という枠に屈していることに気づかない。

shame

*

It's the blame game.

It's time the game came to the end.

Who is to blame?

Shame on who?

*

謎も境も、知ろうとしたり分かろうとしたとたんに消える。

気づいたとたんに枠でも境でもなくなる。

意味であり無意味。抽象であり具象。中傷であり愚笑。

*

文字の形と音が意味をなす。同音で一瞬だけむすびつけられる文字とイメージと事物。
韻、隠、陰、淫、印、因、姻。

偶然と必然が意味を無くし、同時に意味を有む瞬間。

そもそもないものをなぞるといふ謎。空の雲に何かをなぞるといふ謎。その形を指や
目でなぞるといふ不思議。

なぞることで枠と境が立ちあらわれる、とつぜんの異物感と異物性。

*

どうして、文字の形、文字が喚起する音（おん）、形と音が呼びさますイメージと意味
という似ても似つかない異質な物と事と言（こと）同士が、そこに立ちあらわれてしま
うのだろうか。こんな不思議なことがあっていいのだろうか。

その不思議が当り前のこととして見過ごされるという、さらなる不可思議さ。これは
知恵にちがいない。これこそ、人知なのだろう。さもなければ、人は日常生活をいと
めない。

線で文字をなぞるといふ謎。目でなぞるを追うといふ不思議。目線、視線が線である
不可解さ。

無意識になぞるべきもの。それが人の知恵、人知、陣地。最後に最期の知、血、稚、痴、恥、遅。

そっくり

そっくりなものはたいてい人間がつくり出したものではないでしょうか。
そっくりな点がそっくりなのです。
それくらいそっくり。不自然なのです。

人には同じに見える、そっくりなものには自然物にはない精巧さが備わっています。
同じものなんて、人がつくらないかぎりないのではないのでしょうか。

人がつくるそっくりなものには、どこか人に似たところがあります。部分的に似ているも含めて。

人に似ているのは、むしろ人が無意識に似せているからかもしれません。

自分や自分の仲間に似ているから安心するのです。

人は不気味なものはつくりません。不気味に似たものはつくりますよ。でも、何にも似ていない不気味なものはつくりません。

(拙文「引用の織物」より)

真似る

荒唐無稽で根拠なしの空想。馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

*

物語を模倣する人間についての小説。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。まさか、小説を壊しているのではないか。できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

(中略)

小説を模倣する人間についての小説。小説と現実を混同してしまう人間についての小説。

小説というジャンルの始まりと洗練。律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

小説を模倣するボヴァリーを人は笑えるだろうか。映画を、テレビドラマを、CMを、アニメを、(演じる)俳優を、ストーリーを、ドラマを、キャラクターを、出来事を、事件を、報道を、ディスプレイに映った像やテキストを真似て、引用し、似せて、なりきる私たちは、そっくりな身振りをしていないだろうか。

ボバリズムとは、私たちのことではないか。

フロベールが「ボヴァリー夫人は私だ」と言ったという神話があるが、そう口にすべきなのは、私たち一人ひとりではないのか。ボヴァリー夫人は私たちなのだ。

(拙文「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」より)

見えないものは目の前にある

テレビ、映画、写真、絵画、文学、美術、映像、動画——こうしたものは人が現実の影、つまり現実とそっくりなものを求めて作った影です。

目的があり、ストーリーやドラマ、つまり意味のある影です。だからぞくぞくわくわくするわけですが、これだけ意味に満ちた影に囲まれて生きっていると疲れることがあります。

ます。

(拙文「意味のある影、意味のない影」より)

*

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」(いわば鏡の中に見ている)のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということです。これがラカンについての私なりのまとめでもあります。

(拙文「人は存在しないもので動く」より)

枠にひれ伏す

人の作るものとは、言葉であり、物であり、事です。そのどれにも枠がありますが、枠とは境でもあります。

枠も境も、切り取るからできるものです。「切り取る」には「切り捨てる」がともないます。

そもそも切り取るのは、すっきりとしてきれいに見せるためです。持ち運んだり、簡単にさくさく処理するためには、すっきりとして無駄のない形をしていなければなりません。軽いことは絶対条件です。

軽くてすっきりしているのは、枠と境がある証拠だとも言えます。要するに不自然なのです。

*

自然界には枠と境はないにもかかわらず、人は自然界に枠と境を作ることで、言葉の

世界と現実の世界を一致させてきました。自然界に枠と境を作ることは、世界の言葉化でもあるのです。

自然も世界も、人の都合のいいように変えられてきたと言えますが、人はこの自然と世界の中にいるのであり、その逆ではありません。人も言葉化されてきたのです。

人は言葉を崇め、言葉にひれ伏しています。言葉の上での辻褃合わせと筋を通すことに血道を上げています。しかも、そのことに気づいていなかったり、気づいたとしても事の大きさにひるみ、すぐに忘れます。

それが人の面子（体裁）であり、同時に尊厳（プライド）であるとすれば、悲しいレトリックです。

（拙文「人の作るものは整然として美しい」より）

*

We're framed.

決めたのではなく決まった

鏡、影、落書き、絵画、写真、映画（影や幻影の進化したもの）、テレビ、動画、VR。これほど人が「見る」に取り憑かれているのは、じつはいまだに「見えていない」からであり、その不十分な「見る」を補助するような物や仕組みや枠組みをつくるたびに、思いがけない、つまり想定外の「見る」や「見える」を見てしまい、驚き、ぶったまげ、何かにはっと気づく。そんなことを繰り返してきた気がします。

そう考えると、「見る」というのは「とりあえずつくった言葉」であり、その「見る」について、人は何も分かっていないのではないかというふうに思えます。「見る」「見える」という言葉をつくったから、「見る」「見える」んだ、うん、そうだ、と「決めた」とも言えそうです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問

い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

(拙文「直線上で迷う」より)

＊

人は「決めた」と思っているのに、じつは「決まった」のではないのでしょうか。

同様に、事物を「作った」のではなく、「できた」。言葉を「放った・発した・話した・放した・離れた」のではなく、「離れた」。「書いた・描いた」のではなく、「書けた・描けた」。「掛けた」のではなく、「掛かった」。「賭ける」のではなく、単なる「賭け」。

つまり、人の行為は、その行為をしたとたんに、人を離れて人の外での出来事になっているという意味です。要するに、人の行為は外にあるのです。さらにいえば、人の思いどおりにならないという意味で「外」なのです。

「決める」は人の為すこと、「決まる」は人知を超えている。そんな気がします。べつに神とか神秘を持ちだす話ではなく、「外にあるから見えない」だけなのでしょう。

だいたいにおいて、人が神や神秘を持ちだすのは、人が自分の落ち度を認めたくないときなのです。

「目の前にありながら外にあって見えない」という言葉の綾を文字どおり取るしかなさそうです。

＊

言葉の綾と現実の綾が食い違っても当然なのです。言葉の世界と現実の世界と思いの世界は、それぞれ別個の論理と文法に従っていると思われるからです。

ただし、「なぞる」は「なぞられる」のではなく、「謎」である気がします。「賭ける」が「賭けられる」のではなく、「賭け」であるように。

「なぞる」も「賭ける」も外にあるようには見えなくて、つまり目の前になくて、それで見えないのですから。謎です。外にない外なのかもしれません。

「なぞ(る)」と「賭け(る)」——おそらく「決まる・決まり」も——の対象であり主体だと思われる(この三者には共通して固定化指向が強いという特徴があります)、文字はいったいどこから来たのでしょうか。どこへ行くのでしょうか。

影に先立つ

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに さきだつひとを おくるかげ

(拙文「「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれない。」より)

*

鏡、落書き、絵画、文字、書物、文書、写真、映画、テレビ、動画、VR——。人のつくった影たちは何らかの形で残る気がします。

初めは人が影に先立ったのに、影が人に先立つようになり、最後には人が影に先立つのでしょうか。あるじをなくした影たち、いや、そもそも影たちはしもべではなかったのかもしれない。

つねに人の外にあり、ときどき人の中に入ったり出たりする、人の思いのままにならない「外」であるもの。影は不動、人が揺らぐ。

とりわけ気になるのは、人のつくった影の中で最もしぶとい文字です。

人に先立たれた文字。人の影であったはずの文字が残る。影が残る。影は人を見送ってくれるのでしょうか。そのさまを思いえがくと苦しくなります。

ヒを浴びて 影に先立つ 空睨み

人が影を落とした大地と水面（みなも）には、もはや人の影はない。そんな地球上で、人のつくった影たちがどこかに残っている。遺っているのではなく、生き残っている。ひょっとすると、増えつづけるのではなく、殖えつづけている。

そうしたさまが、オブセッションとなって離れません。寝入り際にも、眠っている最中にも、浮かぶことがあります。

*

消えないだけに、残るだけに、しかもいまや急速に増えているだけに——複製でありながら同一であるという最強の抽象を武器にして——、文字が気に掛かります。文字の暴力的なまでの異物性が気になってなりません。こんなものはこの星で他にあるのでしょうか。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

先立つ人を見送るかのよう（これでは、まるで人は利用されただけで終わるかのようです）。新たななぞり手に先立つかのよう。待つかのよう。

文字は影どころか、粹なのです。

線からなる文字が、なぞるべき粹という棺に見えてなりません。語源はさておき、駄洒落と掛け詞好きの私にとって、棺は分く（分ける）粹です。別く（別れる）粹なのです。粹に収める者と収まる者とのわかれです。

棺下ろし 境で別れ 雲疾し

＊

雲をつかむような、個人的なオブセッションとギャグに満ちた話にお付き合いいただき、ありがとうございました。思いを書いて供養するしかなかったのです。

#言葉# 日本語# 文字# 枠# 境# 影# 鏡# 模倣# シンクロ# フローベール# フロベール# 棺# 古井由吉

見るために人がつくった「影」

＊

見るために人がつくった「影」

星野廉

2022年12月3日 07:43

目次

人のつくったもの

見るために人がつくった「影」

意味、メッセージ、筋書き、ストーリーのある影

学習の成果、学習の素地

意味、異見、違見、移見

「何か」に「何か」を見てしまう、置き換えてしまう

自分が知っていると思うものを見てしまう

現在に生きる人は忙しい

見たくないものは見ないし、見えないようにできている

人のつくったもの

自然界で角（かく・かど）のあるものを見かけると、人のつくったものだということがよくあります。四角や長方形は、そこに人がいる、いた、いるだろうという印なのです。

空を見ても四角は見当たりません。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものがありません。直線もありません。空に見える直線は電線と飛行機の跡の白い線くらいです。

四角や長方形や五角形や六角形は、自然界ではあまり目にしません。直線自体がまれなのです。そうしたものを自然から採取して見るとすれば、顕微鏡や電子顕微鏡という道具や器械をもちいるしかない気がします。

結晶には多面体が多いですね。つまり肉眼をふくめた五感では出会えない形なのではないでしょうか。

角があるのは分けたり切ったからでしょう。分けるとか切るは、人の中にあるのではないのでしょうか。欲求とか欲望のことです。それが直線や長方形や四角という形として、人から出てくるといえるか、人がつくる。

なにしろ、人のつくるものは整然として美しいのですが、その基本にあるのは、まっすぐな線と尖った角であり、自然界にはあまり見かけません。

見るために人がつくった「影」

写真や映画はつくられた影です。ここで言う影とは、写したものや映したものを指しますが、つくられた影は自然界にある地面や水面にうつった影とは異なります。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうかね。何を見るためでしょうか。「そっくり」を見るためではないでしょうか。

つくられた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。みなさんがこの文を読んでいる端末にもスクリーンとか画面という枠があります。枠は限度でもあります。

映画や動画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間です。始まりがあって終わりがあるということになります。

つくられた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。空間と時間を切り取っているからでしょう。切り取ることにより、切り捨ててもいるにちがいません。

意味、メッセージ、筋書き、ストーリーのある影

つくられた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとはつくられたものです。物語であり、フィクションのことです。写真であれば目的やテーマです。

映画であれば、作品名、あらすじ、脚本、受賞歴、批評家や映画誌での評価、ジャンル、成人向けか否か、サウンドトラック。こうした目的やテーマのほかに、話というかストーリーがあります。テレビの番組やネット上の動画もそうでしょう。

要するに、地面の影、水面の影、鏡に映った影（像）とは違って、何らかの目的や意味やメッセージやストーリーがあってつくられているわけです。

学習の成果、学習の素地

写真、映画、動画、絵、文字、文章、楽曲といった「つくられた影（写されたもの・映されたもの）」である「何か」に、「自分の見たいもの」や「自分が知っているもの」を見てしまうのは、学習の成果であったり、学習できる素地の有無に大きくかかわっているとも言えそうです。

レプリカ、レプリカ、レプリカ。

三つのうち、真ん中の「力」は漢字の「ちから・リキ」なんですけど、こんなの分かりませんよね。逆に言うと、カフカをカフカと読んでしまうのは、日本語の表記を学習した成果であって、学習した人がそう読み間違えないほうが尋常ではないと思われま

また、レストランの入口近くに陳列された料理のサンプルを見て、お腹が鳴ったり、口に唾が出てくるのも、学習の成果であり、条件反射でもあるでしょう。おそらく、この場合にはパブロフのワンコちゃんの唾は出ないのではないのでしょうか。出たら、ごめんなさい。出た時にはクマに訂正します。

なにしろ、写真や動画に映った「あれ」（「なに」でもいいです）を見て、ヒトは欲情するのです。これがいちばん分かりやすい説明になるでしょう。あれは紙やインクや画素に欲情しているわけではありませんよね。「見たいものそのものではないもの」に、「見たいもの」を見ているのです。「知っているものではないもの」に、「知っているもの」を見ているのです。

同じ理由で、おさるさんはある種の文章を読んで欲情もしないし、ボヴァリー夫人やドン・キホーテのように小説と現実を混同もしないと考えられます。AIが上手に描いた絵を見て、またはAIが上手に書いた詩を読んで、嫉妬したり危機感を覚えることもないでしょう。ある架空のキャラクターに恋愛感情をいだいたり、人形に話しかけることもないはずです。

「人のつくった影（写したもの・映したもの）」は人が「見たいもの」と「知っているもの」を見るためにつくったのですから、そうできているのは当然なのでしょうが、あらためて考えるとすごい仕組みだと感心しないではいられません。

その素地としてある「何か」に「何か」を見てしまう能力もまた、すごいと思います。

意味、異見、違見、移見

「何か」に「何か」を見てしまう。異なったものを見る、違ったものを見る、移りゆくものを見る。意味の発生を感じます。

異見、違見、移見と表記したくなります。こういうのを異見（いけん）と言うのですね。

「何か」に「何か」を見てしまう、置き換えてしまう

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かに何かを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。いや、むしろ「現れる」というべきでしょうか。



上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。

● .

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなと子ども。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

*

● .

上の ● と ・ をご覧ください。● が手前に、・ が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから追いかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、研、エコー、太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなってくる、「おーい！」「何だーい？」「待ってくれ」「さようなら」ー。子を見送る親、「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

ストーリーを感じませんか？ 声が聞こえてきませんか？

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。要するに、連続して置き換わっていくわけです。動きやドラマが生まれてくるとも言えます。

もう一度見てみましょう。

.



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

*

いや、そんなふうにはぜんぜん見えないけど。純粹に黒い丸と黒い点にしか見えない。

いや、黒い丸と黒い点には見えないけど。画素の集まりにしか見えない。

以上のような意見や感想があっても私は驚きません。人は印象の世界に住んでいるからです。印象やイメージは、人それぞれです。

こんなふうに、私も「ある発言」（自分の書いたものですけど）に、自分が知っていると思っている「ある感情」を読む、つまり見てしまいます。これは動揺を静めるためではないかと自己分析しています。

つぎに、こうした心理について触れてみましょう。

自分が知っていると思うものを見てしまう

あ、それってゲシュタルト崩壊。科学的に説明可能なの。なんの不思議もないわけ。

そんなことで感動していちや駄目よ。プルースト効果って聞いたことがない？ 検索してみよ。プルースト効果、勉強になった？

「何か」を見て「自分が知っていると思うもの」に置き換えることを思考停止とか判断停止と言います。なんの不思議もありません。勉強になりましたでしょうか。

言葉だけで知っているレッテルや決まり文句を貼る行為にはある種の快感がともなうことは否定できないようです。誰もが嗜癖し依存します。名づけることは対象を手なづけ、飼いならそうとする行為だからでしょう。

名前や名詞に置き換えるだけですが、そうだからこそ簡単ですし、気持ちいいのではあります。なんといっても、考える必要がなくなるのがいちばんうれしいですね。私も愛用しております。

現在に生きる人は忙しい

「そのツイートは、要するに嫉妬ね。読まなくてもいいよ、次に行こう」

上の言葉の「ツイート」を「記事」や「論文」に置き換えてもいいでしょう。「嫉妬」を、「あおり目的」、「愚痴」、「自分でも何を書いているのか分からない」、「単に、かまってほしいというメッセージ」、「自分が物知りだと誇りたい気持ちのあらわれ」、「自分は詩人であるという主張」、「ばかやろうと言いたいのを気取っているだけ」、「あーあ、退屈だとぼやいているだけ」に置き換えることもできそうです。

現在、文字や文字列や文章は、だんだん読まれなくなっています。ざっと見る対象になりつつあります。ざっと見て、自分にとって都合のいいメッセージに置き換えるのです。

誰もが忙しいからです。流通している情報量が多すぎるのかもしれませんが。

見たくないものは見ないし、見えないようにできている

人は「何か」に「何か」を見てしまうのですが、それどころか、自分が見たいものや自分が知っていると思っていることを見てしまうようです。

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということになります。

人は「見たいもの」（それが「見えない」にもかかわらず）を「見える」と決めるために、その根拠となりそうなものを求めるのです。

＊

こうも言えるでしょう。人はないものをあると決めるために、その根拠となりそうなものを求める。捏造する。その根拠は何であってもかまわない。いわば、イワシの頭も信心からの「イワシ」は何でもあってもいいのです。

求める、でっちあげる——それが人の「見る」であり「見える」です。これは、気持よくなりたいたらに他なりません。

見たくないものは見ないし見えないように人はできているのでしょう。だからこそ、人はわざわざ自分で影（写したもの、映したもの）をせっせとつくり、つくり続け、そこに見たいものを見る、見つづけるにちがいありません。

自分のつくった影には、人が見たくないものもうつつているはずですが、それは見ないのです。人は見ないことに長けています。見ないようにできていると言うべきかもしれませぬ。「見る」は「見ない」、「見える」は「見えない」でもあるようです。

#イメージ # 影 # 自然 # 映画 # 写真 # 意味 # メッセージ # 感情 # 印象 # 物語 # 筋書き # 四角 # 直線

影を踏むのをためらう

＊

影を踏むのをためらう

星野廉

2023年2月22日 13:24

私は辞書を読むのが趣味なのですが、好きなのは「かげ」という見出し語の項目です。読むというより見たり眺めていることがよくあります。語義や例文の字面を眺めているだけで幸せな気持ちになるのです。

辞書では多義的な言葉の項目ほど読んだり見ていてわくわくしますが、そのひとつである「かげ」の場合には、その意味を考えると反対であったり別物に思える語義がいっしょに並んでいて、読むたびにその意外性にはっとします。

たとえば、光という語義がある一方で、光が何かの表面に反射して目にうつる物の形、水面や鏡にうつる物の形、光が物にさえぎられてできる暗い部分、という語義が並んで挙げられています。単純に言えば、光と物の姿とその影をひっくるめて「かげ」と呼んでいる、つまり同じ語が当てられているわけです。

こんな文も書けそうです。

<午後強い日の影に照らされて地面に落ちた木の影が濃い。>

<月影の下で、池の傍らにそびえる木の影に目を凝らし、庭の砂利の上に長く伸びる薄暗い木の影から、水をたたえた池に映るその木の黒々とした影へと視線を移した。>

ややこしい話なので説明すると、次のような意味になります。いずれにせよ、悪文です。

<午後**の強い日の影（光）に照らされて地面に落ちた木の影（映ったかげ）が濃い。**>

<月影（つきあかり）の下で、池の傍らにそびえる木の影（姿）に目を凝らし、庭の砂利の上に長く伸びる薄暗い木の影（映ったかげ）から、水をたたえた池に映るその木の黒々とした影（映ったかげ）へと視線を移した。>

*

光と物の姿とその影に同じ「かげ」という語を当てる、日本語の言葉の世界を思うとき、それが現実になっている世界をも思いうかべてしまう自分がいます。光と物の姿と影が同じである世界です。

三者が同じである世界と言いましたが、物理的に同じであるとか、それぞれが一对一に対応するという話ではなく、光と物の姿と影を同じだと見なす世界観、つまり考え方があるという意味です。

（もちろん、ある時期、ある地域、ある集団に限定された、日本語特有の語感であり世界観なのでしょうが。）

言葉や絵や映像や音声や象徴は、森羅万象をうつす影である。森羅万象とそうした影たちは、物の姿とその影のありようを成り立たせている仕組みと連動している。そんなふうに私は夢想するのですが、あくまでも夢想であり根拠などぜんぜんないわけです。

一方で、森羅万象と、それを照らす光と、光によってうつりうつされる影たちが同一視されている——別個のものたちが同じだと見なされている——のが、人の世界ではないかという気もします。話す言語に関係なくです。

たとえば、映画、動画、ドキュメンタリー、ニュースは、映像や音声や文書からなる物語であり、人はそうしたものを見聞きして世界を感知したつもりになります。うつっているものを、ものと同一視するわけです。

物と、それらをうつした別の物と、そうしたうつりうつされるという物のありようを成り立たせている仕組みが、自然で当然のものとしてとらえられている。

言い換えれば、ある物の代わりに、その物ではない別の物で済ます——要するに、Aの代わりにAではないもので済ます——という仕組みが、人の世界では当り前のこと（いちいち深く考えないこと）としてとらえられているのではないか。そんなふうには私を感じています。

（Aの代わりにAではないもので済ますという仕組みの根っこにあるのが、広い意味での言葉——話し言葉（声）、書き言葉（文字やしるし）、映像、音、表情、身振り——だと思っています。言葉にどっぷり浸かっているから言葉の仕組みに気づかないし、気づいてもすぐに忘れて意識しないという意味です。）

極端な言い方になりますが、人は人や物の影を踏むのに躊躇する唯一の生き物なのです。

地面や水面や鏡にうつった影は、物や人の影であると同時に、物や人そのものでもあり、さらには物や人の影を作る光でもある。そんな思いが人の心のどこかにある。（とりわけ影が光でもあるという思いは人にとって決定的な意味を持ちます。光を畏怖しているからであり、人にとって光と闇は同じだからです。これは科学的知識と併存しています。人は矛盾を生きる生き物だからです。）

だから、人は大切な人の名前を書いてある紙や大切な人の姿が写っている絵や写真を踏むのにためらいを覚えるのではないのでしょうか。

文字やうつった像が、その文字や像が呼びさます物や人そのものではないのにもかかわらず、です。こういう人の気持ちは、学習した知識や理屈で押しつぶしたり抑えられるたぐいのものではない気がします。

逆に言うと、こうした感情（想像力と言ってもかまいません）を押しつぶせば、文字や像だけでなく、物や人そのものもためらいなく踏めるにちがいません。そこには光もないはずです。

#影 # 光 # 辞書 # 言葉 # 多義性 # 言葉 # 写真 # 絵 # 名前

影に影を見る

＊

影を踏むのをためらう

星野廉

2023年2月22日 13:24

私は辞書を読むのが趣味なのですが、好きなのは「かげ」という見出し語の項目です。読むというより見たり眺めていることがよくあります。語義や例文の字面を眺めているだけで幸せな気持ちになるのです。

辞書では多義的な言葉の項目ほど読んだり見ていてわくわくしますが、そのひとつである「かげ」の場合には、その意味を考えると反対であったり別物に思える語義がいっしょに並んでいて、読むたびにその意外性にはっとします。

たとえば、光という語義がある一方で、光が何かの表面に反射して目にうつる物の形、水面や鏡にうつる物の形、光が物にさえぎられてできる暗い部分、という語義が並んで挙げられています。単純に言えば、光と物の姿とその影をひっくるめて「かげ」と呼んでいる、つまり同じ語が当てられているわけです。

こんな文も書けそうです。

<午後**の**強い日の影に照らされて地面に落ちた木の影が濃い。>

<月影の下で、池の傍らにそびえる木の影に目を凝らし、庭の砂利の上に長く伸びる薄暗い木の影から、水をたたえた池に映るその木の黒々とした影へと視線を移した。>

ややこしい話なので説明すると、次のような意味になります。いずれにせよ、悪文です。

<午後の強い日の影（光）に照らされて地面に落ちた木の影（映ったかげ）が濃い。>

<月影（つきあかり）の下で、池の傍らにそびえる木の影（姿）に目を凝らし、庭の砂利の上に長く伸びる薄暗い木の影（映ったかげ）から、水をたたえた池に映るその木の黒々とした影（映ったかげ）へと視線を移した。>

*

光と物の姿とその影に同じ「かげ」という語を当てる、日本語の言葉の世界を思うとき、それが現実になっている世界をも思いうかべてしまう自分がいます。光と物の姿と影が同じである世界です。

三者が同じである世界と言いましたが、物理的に同じであるとか、それぞれが一对一に対応するという話ではなく、光と物の姿と影を同じだと見なす世界観、つまり考え方があるという意味です。

（もちろん、ある時期、ある地域、ある集団に限定された、日本語特有の語感であり世界観なのでしょうが。）

言葉や絵や映像や音声や象徴は、森羅万象をうつす影である。森羅万象とそうした影たちは、物の姿とその影のありようを成り立たせている仕組みと連動している。そんなふうに私は夢想するのですが、あくまでも夢想であり根拠などぜんぜんないわけです。

一方で、森羅万象と、それを照らす光と、光によってうつりうつされる影たちが同一視されている——別個のものたちが同じだと見なされている——のが、人の世界ではないかという気もします。話す言語に関係なくです。

たとえば、映画、動画、ドキュメンタリー、ニュースは、映像や音声や文書からなる物語であり、人はそうしたものを見聞きして世界を感知したつもりになります。うつっているものを、ものと同一視するわけです。

物と、それらをうつした別の物と、そうしたうつりうつされるという物のありようを成り立たせている仕組みが、自然で当然のものとしてとらえられている。

言い換えれば、ある物の代わりに、その物ではない別の物で済ます——要するに、Aの代わりにAではないもので済ます——という仕組みが、人の世界では当り前のこと（いちいち深く考えないこと）としてとらえられているのではないか。そんなふうには私を感じています。

（Aの代わりにAではないもので済ますという仕組みの根っこにあるのが、広い意味での言葉——話し言葉（声）、書き言葉（文字やしるし）、映像、音、表情、身振り——だと思っています。言葉にどっぷり浸かっているから言葉の仕組みに気づかないし、気づいてもすぐに忘れていたり意識しないという意味です。）

極端な言い方になりますが、人は人や物の影を踏むのに躊躇する唯一の生き物なのです。

地面や水面や鏡にうつった影は、物や人の影であると同時に、物や人そのものでもあり、さらには物や人の影を作る光でもある。そんな思いが人の心のどこかにある。（とりわけ影が光でもあるという思いは人にとって決定的な意味を持ちます。光を畏怖しているからであり、人にとって光と闇は同じだからです。これは科学的知識と併存しています。人は矛盾を生きる生き物だからです。）

だから、人は大切な人の名前を書いてある紙や大切な人の姿が写っている絵や写真を踏むのにためらいを覚えるのではないのでしょうか。

文字やうつった像が、その文字や像が呼びさます物や人そのものではないのにもかかわらず、です。こういう人の気持ちは、学習した知識や理屈で押しつぶしたり抑えられるたぐいのものではない気がします。

逆に言うと、こうした感情（想像力と言ってもかまいません）を押しつぶせば、文字や像だけでなく、物や人そのものもためらいなく踏めるにちがいません。そこには光もないはずで。

#影 # 光 # 辞書 # 言葉 # 多義性 # 言葉 # 写真 # 絵 # 名前

月影、星影

＊

月影、星影

星野廉

2023年2月24日 11:56

目次

月影、星影、火影

言葉が言葉を呼びよせる

言葉と言葉のずれをすくい取る

文字は複製で読むもの

作文の鑑賞

月影、星影、火影

辞書で「かげ」の語義としてある「日・月・灯火などの光」（広辞苑）の意味で「かげ」や「影」を使ったことは、私にはありません。話し言葉でも書き言葉でもです。こういう不慣れた言葉遣いの語感をさぐるのには、例文を読むのがいちばんわかりやすいと思います。

とはいうものの、広辞苑にある「月影がさえる」という例は私にとってぴんと来ないので、手元にある別の辞書やネット上にある複数の辞書に当たってみたところ、次のような言い方ができそうです。

月影（つきかげ）、月の影、淡い月影、星影（ほしかげ）、火影（ほかげ）、灯火の影、木陰にまたたく灯火の影、日の影。

こうした言い回しが複数の辞書に共通して見られるのは、いわゆる孫引きがおこなわれているからかもしれませんが、辞書がまちまちであっては困るわけですから、当然の結果でしょう。

言葉が言葉を呼びよせる

月影と星影と日影と火影は手持ちの辞書では独立した語として見出しがあります。無理をしてまで使う気持ちはありませんが、このうちの星影と月影はぜひ使ってみたいです。

複数の辞書に載っている例文を見ると、星影は「きらめく」「きらきらと光る」「ちらつく」「見える」と、月影だと「淡い」「(月影で・月影に) 見る」「さす」「(月影に) 浮かぶ・浮く」「浴びる」と相性がいいようです。

「日影」と「火影」はぴんと来ないのですが、「日の影」なら使ってみたいと思いました。「日の影にゆらめく」「○○が日の影にゆらめいて見える」というフレーズがいま浮かびましたが、これは「陽炎(かげろう)」を連想したようです。

「日の影」の「影(かげ)」につられて「陽炎(かげろう)」が出てきたわけですけど、言葉が言葉を呼びよせた、つまり影が陽炎を呼びよせた気がします。当然のことながら、言葉といっしょにイメージも呼びよせられます。

「星影」と「星明かり」は私の中では異なっています。さらに言えば、「星影、ほしかげ、ホシカゲ、星明かり、星あかり、ほしあかり、ホシアカリ、HOSHIKARI」もそれぞれ違う気がしてなりません。

この思いは、ニュアンス、語感、イメージ、印象、字面、連想という言葉を使って説明できそうです。「星影」も「星明かり」も同じものをさすのだから同じなの。現実も事実も言葉もすごくシンプルなわけ。そんなふうには威勢よく片づける気にはなれません。

言葉と言葉のずれをすくい取る

私にとって言葉とは、「同じ」と「異なる」が同居する、シンプルとはほど遠い「何か」なのです。

「星影、ほしかげ、ホシカゲ、星明かり、星あかり、ほしあかり」で並んでいる各語が文字または文字列としてぴったり一致していないのは確かです。ぴったり重なっていないのですから、ずれている、つまり「異なる」わけです。それでいて「同じ」ものを指すとされています。

ずれ（「異なる」）は観念でも抽象でもなく具体的な「物」として、そこに「ある」のです。それが言葉のありようです。一方で、上の各語が「同じ」だというのは抽象であり観念なのかもしれませんが、それもまた言葉のありようなのです。

「異なる」（具体）と「同じ」（抽象）の同居こそが、言葉のありようである、とまとめることもできるでしょう。

具体と抽象が同居する、言葉における「ずれ」（たとえば表記のずれ）をすくい取り、ずれにこだわった上で言葉を選ぶことが、文学や広告・宣伝の現場でおこなわれている作業ではないでしょうか。

文字は複製で読むもの

文字は複製として読み書きされるものです。小説であれ詩であれビジネス書であれ法令であれ、それが文書として読まれるのであれば、複製を読んでいると言えます（元原稿や原本であってもです）。文書を成り立たせている文字が複製でしかありえないからに他なりません。

複製が複製を生む。これが複製である文字のありようです。文字は複製されるために存在するかのようです。世界は、複製である文字に満ちています（同じ言葉でも、話し言葉である声や、視覚言語と言われることもある表情と身振りが発せられた瞬間に消えるのに対し、文字だけが残るからです）。

言い換えると、文字は、現物や実物のない複製、または複製の複製であり、さらに言えば起源のない引用、または引用の引用でもあります。文字にとって、現物や実物や起源は抽象であって観念でしかありえません（書道、カリグラフィー、タイポグラフィ、活

字やフォントの制作の現場においては話は別です)。

＊

このように、複製（複製の複製でもかまいません）として読まれ書かれるとき、同じ文字だという点で「星影と星影」は「同じ」どころか同一なのですが（抽象）、「星影とほしかげと星明かりと星の光」となると、それぞれ「異なる」別物（具体）なのです（先に述べた「抽象と具体の同居」という言葉のありようがここでも見られます）。その異なる別物の間の「ずれ」の話、いまはしています。

では、「ずれ」にこだわって作文をしてみます。

作文の鑑賞

「星かげにうかんだ少女の姿」「星影に浮かんだ少女の姿」——「かげ」と「うかんだ」に少女のやわらかな体を感じます。「影」と「浮かんだ」には、すっと立った少女の姿が目に見えるようです。ひらがなは触覚を刺激し、漢字は視覚に訴える気がします。

「星明かりがきらめくなかで競うように輝く蛍たち」「星影と競う蛍」——前者は語数が多いだけに冗漫な印象がして、言葉に酔っている書き手を感じます。後者は簡潔ですが、簡潔なだけにかえって星空の下できらめく蛍の群れが目には浮かんできます。

「月明かりのもとで見る彼女の顔」「月影に浮かんだ彼女の顔」——やっぱり「明かり」と「影」は印象が違うなあと思感します。両方ともここでは光を意味するとしても「明かり」には色があるのです。「彼女の顔」に「赤み」が差していると妄想してしまうのは「あかり」からの連想でしょう（「明」「日」「月」という文字と「赤」の持つイメージを多用し偏愛した古井由吉について語りたくなります⇒拙文「異、違、移」）。

「月影がさす庭にたたずむ人」「月明かりに照らされた庭にたたずむ人」——前者のほうが光の背景にある闇を感じさせます。私の印象では、後者のほうが散文的です。

以上、自分で作文して自分でああでもないこうでもない鑑賞していれば世話ないですが、そんな感想を持ちました。ふだんの私はこういう思いをあまり意識せずに文章を

書いています。

いずれにせよ、言葉が言葉を呼びよせるということはあると思います。言葉が異なれば、呼びよせる言葉も違ってきます（その時々気分によっても異なる気がしますけど、この点には立ち入りません）。呼びよせるのは言葉だけでなくイメージも、です。

私は部外者なのでぜんぜん知りませんが、俳句や短歌の世界では、星影や月影を使う人がいまでもけっこういるのかもしれない。詩や歌詞にも不案内なのですが、積極的に使う人がいてほしい気がします。

私は小説を書くことがあります。星影と月影を使いたいと思いつつも、特殊な設定でないかぎり、小説では星影と月影を使いにくいと感じています。散文だからでしょうか。私は散文的な人間で、詩を書いたことはありません。

#辞書 # 日本語 # 表記 # 字面 # 言葉 # ひらがな # 漢字 # 影 # 星 # 月 # 文字 # 複製
引用 # 散文

蛍の影、螢の影、火垂るの影

＊

蛍の影、螢の影、火垂るの影

星野廉

2023年2月25日 09:58

目次

文字どおり取る

掛け詞、駄洒落

作文

火垂る、蛍、螢

蛍の影

文字どおり取る

星影（ほしかげ）と月影（つきかげ）を文字どおりにとってみましょう。星の影と月の影のことです。

とはいうものの、星影って何でしょう？ 月影とはどんなものを指すのでしょうか？ 愛用の辞書には、星影は「星の光。ほしあかり。」（広辞苑・以下同じ）とあり、月影だと「月のひかり」だけでなく「月の形。月の姿。」という語義も載っています。

星の明かりという意味での星影と、月の光という意味での月影は、私にはいまだにぴんと来ません。星影や月影というと、地面や壁に映った黒い影と、または水面やガラスや鏡に映った姿が私の頭には浮かびます。絵として浮かぶのです。

水面に浮かんだ星や月の姿ならじっさいに見た覚えもありますが、地面に星や月の黒い影が映っている光景となると現実にはありそうもありません。でも、思い描くことならできます。これが星影と月影を文字どおり取るという意味です。現実にある日食や月食など「食（蝕）」の話ではありません。

地面に星や月の黒い影が映っている光景——そんな絵を頭の中でいったん思いうかべてしまうと、そんな光景が現実になりそうな気がしてきました。どこかでじっさいに見たような気持ちも起こります。偽の記憶になりそうで、そう感じる自分を怪しく危ういと思う自分がいます。いわば自分の中で分裂が生じるわけです。

掛け詞、駄洒落

「アルミ缶の上にあるミカン」と同じです。この有名な駄洒落のおかしさは、言葉が掛けてあるおもしろみだけでなく、文字どおりに取ったときに浮かぶシュールな絵のおかしさが重なることだと思います。

掛け詞も駄洒落も——さらには比喻も——基本的には同じ操作をしますが、駄洒落は掛け詞の別称であると同時に蔑称でもあるのです。

「ニューヨークで入浴」なんていうのも、私は好きです。かつては、自由の女神像の真下に据えられたバスタブのお湯に浸かっている自分の姿が目蓋の裏に浮かんでならなかったのですが、いまお気に入りの絵は、摩天楼の屋上に置かれたバスタブから五番街を見下ろしながら入浴する自分の姿なのです。

自分だけ受けするギャグみたいなもので、シュールと言うより滑稽です。他人に話せば失笑を買うか、うんざりされるだけです。

寝入り際や、じっさいに湯船に浸かっているときや、トイレでぼーっとしていると、ときどきこれらの絵が浮かぶことがあります。

このように、言葉が呼びよせる言葉やイメージはきわめて個人的なものであることが多いようです。だからこそ、自分だけのイメージは愛おしいと感じます。寝入り際の夢うつつにだけでなく、意識があれば、たぶん死に際になってもやってきて慰めたり笑わせてくれるのではないのでしょうか。

言葉は、世界を相手にするとき、いつもそばにいてくれる友達なのです。呼べばすぐに来てくれます。いつか意識が薄れる直前に、あなただけに受けるギャグであなたを笑わせてくるかもしれません。

作文

星影（ほしかげ）、月影（つきかげ）、火影（ほかげ）——漢字で見ても、ひらがなで見ても、声に出してみても、綺麗に感じる言葉です。自分が使うことはなくても、目に耳に肌に心地よく感じられます。

寒い夜に星影がまたたく。
庭に月影がさす。
ろうそくの火影がゆらめく。

頑張って作文してみました。作文する前と後とでは、星影と月影と火影に対する語感や親しみが変わっています。前に比べると、ずっと頭に入るだけでなく、おなかのあたりにも来る感じがします。「腑に落ちる」というのはこういうことなのでしょうか。

でも、そんな腑に落ちる感はまだ身につけていないので、すぐに消えそうな予感があります。ある言葉を身につけたり慣れるためには時間をかける必要があります。気長にかまえましょう。

火垂る、蛍、螢

星影（ほしかげ）、月影（つきかげ）、火影（ほかげ）——。

このうち、「星影（ほしかげ）」で連想する言葉は「きらきら」だったり「またたく」だったり「ほしの光」だったりします。「ほしの光」から「蛍の光（ほたるのひかり）」を私が思うかべるのは、「ほ」という同音があり、思いえがく星の点滅するさまが蛍の青白い光のまたたきに似ているからでしょう。

星影（ほしかげ）、月影（つきかげ）、火影（ほかげ）——。

そう思った心で「火影（ほかげ）」を目にすると、たぶん「ほ」の連続と「火」という文字からでしょう、『火垂るの墓』（野坂昭如作）を思い出しました。この表記が気になってネットで検索して調べてみたところ、複数のサイトに「ほたる」の語源として共通する諸説が紹介してありました。

火垂り（れ）、火照り（れ）、火（ひ・ほ）立る、星垂（ほしたる）

上のような文字列が見られるのですが、節操がない私はどれにも説得力を感じています。楽しいのです。これもいいけど、あれもいいなあ。ぜんぶ、いいなあ。

諸説のある語源は正しい正しくないという対立ではなく、それぞれの説のいい点を尊重しながら楽しみたいと私は考えています。一つの解を求めてはいませんが、最後は好みでしょうか。正解ではなく好みです。

この小説のタイトルでは、蛍でも螢でもほたるでもホタルでもなく、「火垂る」という表記が選ばれているわけですが、私の場合には作者の意図を考えることはありません。勝手に想像します。

火垂るの墓、火照るの墓、火立るの墓、星垂るの墓——こんな言葉とイメージが浮かびました。どれもが言えている気がしてなりません。

この短編を読むと大空襲が出てくるので、空に火が垂れるさまが目浮かびます。火とはつぎつぎと投下される爆弾のことです。夜であれば、地面が照らされるでしょう。防空壕へと走りながら空をあおぐと、星のまたたきに似た点滅が目映るかもしれません。それが垂れる、つまり降ってくるのです。

その「火（が）垂る」という恐ろしいイメージを想起させる言葉と「墓」が組み合わせられているのです。しかも、「ほたる」と読ませます。あの美しくはかない光を発するホタルです。水生または陸生の幼虫が、成虫になってからの期間はごく短いと聞きます。

恐怖、悲しみ、弔い、点滅、肉親への愛、光の美しさ、生と死、光と闇、空と地面、「飛ぶ」と「横たわる」、上昇と下降、飛翔と落下、美と醜、香（かお）りと臭（にお）い、「長い」と「短い」、火・風・水・土——そうした相反する感情と要素が「火垂るの墓」と

いうタイトルの文字列に込められている。そんなふうに感じます。

いかにも安易な連想ですが、「火垂るの墓」という言葉から「野垂れ死に」「はかない」も想起されますが、じっさい、この小説にはそれに近い死が出てきますし、墓もないわけです。掛け詞ですが真面目な話をしています。

蛍の墓、螢の墓、ほたるの墓、ホタルの墓。上で述べたのは、このうちのどれにもないイメージです。というか、そもそも「ほたるのはか」という音があって、それをどの文字に当てるかという発想で付けられたタイトルではないでしょうか。

空からつぎつぎと火が垂れてくる。この両義的、いや多義的なイメージからタイトルが選ばれた気が私にはします。

「火垂る」という文字列を見ると、野坂昭如の小説のもとになった戦争だけでなく、現在起こっている戦争を思いうかべないではいられません。そして、気配として感じてしまう、これからの戦争です。

耳すまし 火垂るの影に 身がすくむ

*

いまの私は「流星」や「流れ星」という言葉を見聞きするたびに shooting star という言葉が重なって、「空を流れていく星」という美しい光景を文字どおりに、素直に思いえがくことができなくなりました。どうしてもミサイル攻撃を連想します。shoot という言葉の語感が胸に迫ってくるのです。

shoot が「(心や身体に) 刺さる」多義語であることは、大きめの英和辞典でその語義の数々を見ると実感できます。日本語で言うと「さす、しゃ、いる」という感じがして、なにしろ暴力的で攻撃的で一方的で恐ろしいのです。シュートという音もある種の蛇を連想させて、私なんか自分で口にただけで、びくっとします。

写、射、斜、車、シャッター、カシャッ、射る、入る——こういう感じがするのです。
(中略)

指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。つまり、サディスティックなのです。

(拙文「うつる」でも「映る」でもなく「写る」より)

*

蛍影という言葉がないだろうかと思って調べてみたところ、ネット上で閲覧できる辞書に「蛍影（けいえい）」(コトバンク・普及版字通)がありました。個人的には螢影でなく蛍影がしっくり来ます。強いて文字どおりに取る必要はないのですが、この一年間で私は火という文字が苦手になりました。

いつまで続くのでしょうか。

蛍の影

蛍の影には思い出があります。

*

夜の病室で親に付き添いながら眠っているときに、ふと目を覚まして見た神秘的とも言える光景を、いまもよく思い浮かべます。

患者の生命を維持するために置かれた機器のことです。その器械に付いているいくつもの小さなランプの点滅——。それが青だったか、黄色だったか、緑だったかまでは覚えていません。ただ蛍に似ていると思ったことは覚えています。

病室で蛍に囲まれているという、あのときに見た荒唐無稽な幻想（寝ぼけていたにちがいありません）が、どうやら私の心象風景になっているようなのです。その光景の中では決まってそばに母がいます。

(拙文「病室の蛍」より)

星影に 群れ飛ぶ蛍 母のそば

#影 #星 #月# 蛍 # 日本語 # 言葉 # 連想 # 掛け詞 # イメージ # 文字 # 野坂昭如 # 辞書

影の精度を向上させる

＊

影の精度を向上させる

星野廉

2023年2月28日 09:20

かげ、影、姿、像、声、文字、表情、身振り。

こっちがあっちに映っている。似ているような似ていないような、ときには同じにも見える。映っているのは確か。こっちが手を振れば、あっちも手を振っている。

あっちはこっちとどれくらい似ているのか。あっちのこっち度。こっちのあっち度。

言葉、像、影。

あっちを「そのもの」とか「実体」とか「世界」とか「何か」とか「それ」とか「彼岸」とか呼んで名づけたところで、それはこっちで使っている言葉という影でしかありません。「あっち」はこっち、「こっち」はあっちの影でしかないから、影で影を見ている、影に影を見ているというわけです。

言葉。

手なづけようとして名づけてもなつかない。飼いならせないし、なれてくれないし、なじまない。もどかしい、ままならない。隔靴搔痒。長靴の上から痒いところを搔いても搔いても痒みが続く。夢の中で駆けても駆けても駆けたことにはならない。うつつでどんなに書いても書いても書けていない。藻搔く、足搔く。

何かの代わりにその何かではない別の物で済ましているからです。それが永遠の隔たりとなっているからです。

＊

落書き、絵、影絵、しるし、文字、筆写、印刷、写真、レコード・蓄音機、映画、複写・コピー、デジタル化した情報（映像・音声・文書）の配信・複製・拡散・保存。どれもが「うつす・うつる・うつし」です。

私たちはこうした影たちに何を見ているのでしょうか。世界でしょうか、森羅万象でしょうか。やはり、影に影を見ているのではないのでしょうか。（拙文「影に影を見る」より）

影であっちを見ている、影で影を見ているといっても、あっちのこっち度、こっちのあっち度、影の精度はそこそこあるようです。

なにしろ、影のおかげで、人は月に仲間を飛ばしたり、この星の気温を上げたり、2000年問題に打ち勝ったり（ですよ？）、高速の人工流れ星で敵を攻撃したり脅したりできるわけです。ある程度の精度がなければ叶いません。ぜんぶ、おかげさまのおかげ。かげ、さまさま。

影は実体をある程度正しく反映している、映している、写している。できれば、「移す」まで考えたいところなのです。移すとなると、何かが何かに、何かがどこかに移動するので、物理的な移動と考えた場合には、これはすごいことになります。理論から観測と実験による再現を経て実証する。

念力が可能になったも同然です。念ずれば為る。こっちで念ずればあっちで為る。隔靴搔痒の遠隔操作の有効性と実用性。精神一到何事か成らざらん。サイコキネシス、テレパシー、マインドパワー、ハンドパワー、千里眼、透視、クレヤボヤンス、テレポーション、ぜんぶオーケー。

物理的、そうなのです。メタフィジカルではなくフィジカルにいきたい。人は影の精度を物理的かつ身体的にとらえたいのでしょうか。「映る」とか「写す」なんていかにも影っぽい言い回しでは満足できずに、「移す・移る」という、なんか、こう、移動っぽい、つまりじっさいに何かを動かせる力がほしいようです。

影に働きかけることで、ものを動かす。動けばそれで結果良しとする。影がどれだけ

実体を反映しているかなんて考えているだけ時間の無駄ということでしょうか。

*

影の精度を磨く。精度を向上させる。精度、向上、です。漢語は見映えがいいし格好いいです。元気も出そう。

あっちがどれくらいこっちか。あっちがどれくらいこっちに似ているか。あっちのこっち度、こっちのあっち度。こんな和語を使った煮えきらない言い方より、漢語のほうが、ずっと「ある」度、つまり現実感や存在感やリアリティ、そして何よりも説得力があります。

「ない」を「ある」に見せかける、いや、「ない」を「ある」に変える魔法。

結局はレトリックの問題なのでしょうか。何と云うかによる、どう語るか次第というわけなのでしょうか。語るは騙る、なんて語るに落ちました。あることないことではなく、存在と無。

「無」を「存在」に偽装し、「無」から「存在」を捏造する魔法、おまじない、お呪い、呪い、*creatio ex nihilo*、*ex nihilo, nihil fit*。

見映えのいい耳にも快い、威勢のいい言葉を使って威勢の言い方をする。これで気合いを入れれば、何とかなります。じっさいに人類はそうやってきたのです。言葉は景気づけのためにあるのです。「影に影を見る」なんていって、意気消沈するためにはありません。

念力が可能になったも同然です。念ずれば為る。こっちで念ずればあっちで為る。隔靴搔痒の遠隔操作の有効性と実用性。精神一到何事か成らざらん。サイコキネシス、テレパシー、マインドパワー、ハンドパワー、千里眼、透視、クレヤボヤンス、ぜんぶオーケー。

テレグラム/テレグラフ (文字)、テレホン (音声)、テレスコープ (像)、テレビジョン

(像)、テレメデシン/テレヘルス (医療)。遠くを近くする。遠くを知覚する。こうやって生きてきたのですから、こうやって生きていきましょう。

念ずれば、テレパシーもテレポーテーションもできるはず。理論から観測と実験による再現を経て実証する。ほんまかいな。

#影# レトリック# 漢字# 漢語# 大和言葉# 和語# 掛け詞# 言葉# 日本語

おもかげ

＊

おもかげ

星野廉

2023年3月2日 08:09

毎日インスタグラムで更新される犬のアカウントを見ている。四年前に半年だけ飼った犬と同じ犬種が出てくるアカウントです。

これが同じ動物だとは信じられないくらい、犬は犬種によって容姿ががらりと違いますが、同じ種類だとその面影をたどることができるので、ついついそのアカウントのわんちゃんを見てしまいます。

楽しくもあり切なくもある習慣です。私の病状が急に悪化したために飼い続けるのを断念したという事情があるからです。その子は現在新しい家族のもとで暮らしています。

私はあの子ではない犬にあの子の面影をたどっているわけですが、面影はいい言葉ですね。面と影の組み合わせがわくわくする連想を呼ぶし、辞書にある語義や例文を読んでもみるとぞくぞくします。

私がよくつかっている、「何かに何かを見る」や「影に影を見る」という言い回しと似た発想の語義もあります。

そのほか辞書には「面影に立つ」とか「面影付」という知らない言い回しの説明も載っていました。

森鷗外が「於母影」という訳詩集を出していたと知ったのも収穫でした。鷗外主宰の結社の同人による翻訳詩を集めた本らしいのですが、翻訳というところに「おもかげ」の

意味が重なります。翻訳とは原文のおもかげを別の言語による「かげ」にたどる行為ではないでしょうか。

かげにかげをたどる。かげにかげを重ねる。かげにかげをうつしみる。

＊

母の見える「於母影」という当て字も、想像力をかきたててくれます。文字の姿と意味と、それらが連想させるイメージで頭の中がいっぱいになります。イメージのどれもが断片的でとりとめがなく、なかなか一貫した像を結ばないのです。

「かげ、影」には、目に見える物の姿、物の姿が何かに映る影、影を作る光のほかに、人が思いの中でいだく人の顔や姿という意味も辞書の語義にあります。その意味が「おもかげ」という言葉によく出ています。

「おも」に顔という意味の「面」だけでなく、「表、重、思、想、念」を感じないではいられません。表層は薄く軽いようで人にとっては厚く重いのですが、それこそが思いから生じる「かげ」なのかもしれません。

「面影を抱く」とはふつうは言いませんが、そうした人のうちにある思いとしての影(像)は、「いだく、抱く、だく、抱える、かかえる」ものです。そして、「いだく、だく、かかえる」という動作は、こちらが「ふれる」と同時に相手も「ふれる」という、触感をともなう双方向的なかかわり合いだと考えられます。

「いだく、だく、かかえる」という行為では、物理的には、こっちが相手や対象に接触するのですから、相手と対象もまた「いだく、だく、かかえる」側にあるわけです。こっちとあっちが「する、される」を相互に同時に体感する関係にあると言えます。

内なる影の場合には、ひとりの中で分裂が生じるわけです。思いやった結果として、ひとりがふたりになるのかもしれません。

その体感が残るのが、「おもかげ」なのでしょう。私には「おもかげ」が視覚的な像、つまり姿だけだとは思えません。また対象が人だけでないのももちろんです。

見たもの、聞いたもの、触れたもの、歯で噛んで舌で味わったもの、鼻を震わせて嗅いだもの、身体で気配として感じたもの、そうしたものの「かげ」が人の中にうつり、残って、いただくものになっているとき、それらぜんぶを「かげ」とか「おもかげ」と呼んでいいのではないのでしょうか。

そうやって何かがつつてきた人のうちにおいては、ひとりがふたりになるような気がしてなりません。

この人にあの人の面影を見て一瞬どう応じていいか戸惑ってしまった、ある声を聞いているうちに知っている別の人が話しているような心持ちになり相手の顔をまじまじと見ていた、ある手触りが遠い過去の手触りを蘇らせてうろたえた、この舌触りと歯ごたえはあれにそっくりだ、いま嗅いだ香りがこどもの頃のあの日の匂いとつながり無性に泣きたくなる、いまをもう一つのそっくりないまがいきなり追いかけてきて重なる、誰もが経験するデジャ・ビュと呼ばれるあの現象。

こうした瞬間に内なる自分はふたりに分かれ、二つの時空をまたいでいるのではないのでしょうか。人は影や面影をいただくとき、だかれている気がします。だから寂しくないのかもしれない。

おもかげは「倂」とも書くらしいのですが、これは人と弟をくっつけた字なので気になって漢和辞典を調べてみました。「兄弟は似ている」からという、いかにも分かりやすい説明があり、さらに日本製の漢字だと書かれていて笑ってしまいました。お茶目な感字ですね。

＊

上で述べた意味での「かげ」と「おもかげ」をつかった言い回しと例文を辞書で見ましょう。

亡き母の影を慕う、往年の面影をとどめる、母親の面影がある、亡き父の姿が面影に立つ（広辞苑）、かすかに昔日の影を残す、亡き人の面影をしのぶ、目もとに父親の面影がある（デジタル大辞泉）、古都の面影は今やない（goo 辞書）

「慕う、とどめる、ある（ない）、残す、残る、しのぶ」と相性がいいようです。「見つける、見いだす、さぐる、さがす、求める、たどる、追う、重なる、消える」とも組み合わせることができるでしょう。

こうやって影と面影のつかい方を見てみると、

<物の表面や人の顔に、何かを見る。ぺらぺらした薄いものに奥行きとして、またはその中や裏にある深みとしての「何か」を見る。いなく。そこにはないものを、そこに見る。さぐる。>

という感じがします。「おも、面、表、重、思、想、念」です。

重みがあるといっても、そのうち消えるのではないかというはかなさも感じます。影だから、当然なのかもしれません。

#面影 # 影 # 於母影 # 倂 # 森鷗外 # 翻訳 # 言葉 # 文字 # 漢字 # 日本語# 触感 # ミニチュアシュナウザー

かげ、figure

＊

かけ、figure

星野廉

2023年3月3日 08:30

目次

そこにはないものを、そこに見る

かけ、figure

英語の figure

形、形態、形状、外観

数字、計算

人の姿、人影、肖像、人物

図案、模様、図、図解、さしえ

フィギュア

名詞として、動詞として

音型、音形、モチーフ

文彩、言葉の綾

私のイメージする figure

そこにはないものを、そこに見る

森鷗外が「於母影」という訳詩集を出していたと知ったのも収穫でした。鷗外主宰の結社の同人による翻訳詩を集めた本らしいのですが、翻訳というところに「おもかげ」の意味が重なります。翻訳とは原文のおもかげを別の言語による「かけ」にたどる行為ではないでしょうか。

(拙文「おもかげ」より)

私は辞書を読んだり眺めるのが好きなのですが、これは国語辞典だけに限りません。英和辞典や仏和辞典もときどき眺めます。眺めると言っても、ある特定の語の欄だけです。わくわくするために眺めるので、その相手はどうしても好き嫌いで選んでしまいます。

英和辞典と仏和辞典で繰り返し読み、眺めるのは figure という単語です。私の中で、figure は日本語の「かげ」ときわめてよく似たおもかげを感じさせてくれる文字列なのです。

仏和辞典よりも英和辞典で見るほうが、その印象は強いです。大きめの英和辞典で figure の語義や例文を見ているときに覚える既視感は、「かげ」を見ているときに感じる心境と、そっくりとは言わないまでもとてもよく似ています。

逆に国語辞典で「かげ、影、陰（蔭）、翳」を見ていると決まって思いだすのも figure なのです。

かげ、影、陰（蔭）、翳

figure

どう見ても似ていません。

「かげ、影、陰（蔭）、翳」と figure のことなのですが、文字として、文字列としてはぜんぜん似ていません。この似てなさは、猫という文字が猫に似ていないのと似ています。

でも、似ています。気配、かげ、おもかげが似ているのです。

似ていないのに似ている。これは言葉においてはぜんぜん矛盾しないのです。それが言葉のありようだからです。具体と抽象が同居しているのが言葉のありようとも言えます。

文字や文字列で、上の両者を見ていて「異なる」——違った文字であり文字列だ——と感じるのは具体的な体験です。

一方で、似ているとか同じだと感じるのは文字と文字列という視覚的な像である具象の向こうに、意味なり語義なりイメージという手で触れることができなものの、つまり観念や抽象を見ているからです。

文字と文字列（具象）に、それとは別のもの（抽象）を見ている、言い換えると、そこにはないものをそこに見ているわけですが、これは影や面影を見ているのと似ていると言えば、分かりやすいかもしれません。

＊

そこにはないものをそこに見る。影や面影を見る。こうした行為は、日常生活において、人が物の形を見たり、人の姿を見たり、物や人の形や姿を思いうかべたり思いだしたり思いえがいたりするときに、誰もが体感しているはずです。

「かけ、影、陰（蔭）、翳」と「figure」、そして辞書にあるそれぞれの語義や例文は、まさにそうした体感を、言葉の顔や表情や身振りとして見せてくれる。そんなふうに私は思います。

これは——ややこしい言い方ではありますが——具象と抽象の同居という言葉ありようでもあるのです。

辞書に載っているのは意味ではありません。言葉なのです。意味を見たことがあるでしょうか。触れたことがありますか。

話し言葉であれば音を聞くことができます。文字であれば、形を見ることができます。それが言葉です。具象としての言葉だと言えるでしょう。

見ることも聞くことも触れることもできない意味は抽象なのです。意味もまた言葉を成り立たせているのは事実です。意味という言葉をつかうかぎり、抽象を免れることはできません。

そうであれば、言葉という具象と抽象の同居と積極的にかかわり、戯れようではありませんか。

＊

以上述べたことは、国語辞典や○和辞典だけにとどまりません。

たとえば、小説に書かれているのは言葉であって作者の意図ではなく、思想書と呼ばれる本に書かれているのは言葉であり思想ではありません。こうしたことにきわめて敏感であり、意識的に言葉を書いていた人たちがいる時期のフランスや英米加にいました。

現代思想とか新しい批評という言葉でくくられたことのある一連の本や論文が立て続けに発表され、飛ぶように売れもした時期が以前はあったのです。

そうした本や論文が日本に紹介されたとき、言葉を意味や思想や意図に置き換えるのではなく、書かれた言葉そのものに視線を向けるという手法を取った人たちがいたのですが、その紹介者たちが多くが思想ではなく文学研究の担い手であったことは注目していい事実だと思います。

それにもかかわらず、書かれた言葉にもっぱら思想や思考や世界観や生き方や本の宣伝文句を、または意図や美意識や伝統や人生観や伝記や単なる筋や誰かの貼ったレッテルといった抽象を読む人たちがいまもあとを絶たないのは、具象と抽象の同居という言葉のありようが根強くあるからにちがいありません。人はこれなしでは生きられないようです。もちろん、この私を含めての話です。

いい悪いとか正しい正しくないとか、否定できるできないといったことがらでないのは確かでしょう。

＊

繰り返します。そうであれば、言葉という具象と抽象の同居と積極的にかかわり、戯れようではありませんか。

では、じっさいに見てみましょう。

かげ、figure

まず、「かげ」から見てみます。複数の国語辞典で「かげ、影、陰（蔭）、翳」を調べる

と、おおよそ次の語義があります。

・目に見える物や人の姿、物や人の姿が何かに映る影、何かに映った影を作っている光、人が思いの中でいただく人の顔・姿や物の像、物や人にさえぎられてその後ろにできる暗い場所（陰）

つぎに figure を見てみますが、複数の英和辞典で figure を調べると、次のような語義があります。

- ・【名詞】形・形態・形状・外観、人の姿・人影、人物・肖像、有名人・名士、挿絵・図・図形、フィギュアスケートのフィギュア（動作・図形）、表象、数字・計算・総額、音楽のモチーフ、計算、模様、言葉の綾
- ・【動詞】計算する・見積もる・数字で表す、想像する・心に描く・思う・考える、かたどる・彫像や絵画として表す

フランス語の figure と英語の figure の語義はぴったり重なるわけではぜんぜんありませんが、似た印象を私は受けます。ただし、顔や表情の意味が強いのが特徴であり、最大の違いは英語のように動詞として使われない点です。

フラン語での figure を大ざっぱに分類すると以下ようになります。

・顔・顔つき・表情、有名人・名士、挿絵・図・象徴・写真・図表・模様、フィギュアスケートやダンスのフィギュア・フェンシングの構え、人物像・肖像、言葉の綾

【※参考資料：広辞苑（岩波書店）、ランダムハウス英和大辞典（小学館）、リーダーズ英和辞典（研究社）、ジーニアス大英和辞典（大修館）、スタンダード英和辞典（大修館）、プログレッシブ英和辞典（小学館）】

以下では、上で見た英語の figure の語義を小見出しに分けて、それぞれの語義について私がいただいているイメージを書いていくことにします。

英語の figure

英語の figure の底にあるのは、「形」および「形としてあらわれること、あらわすこと」のようです。語源の欄に「でっちあげる」があってはつとします（ジーニアス英和辞典）。

figure の語義（辞書に載っている意味）とそのイメージ（私のいただいている個人的な印象）を細かく見ていきましょう。

形、形態、形状、外観

形、形態、形状、外観——というふうには、英和辞典に載っている語義は訳語、つまり日本語です。確かに「意味」とも言えますが、そもそもこれは日本語の単語なのです。言葉の意味（意味とは本来は見えないものであるはずですが）、見える言葉として説明されているとも言えます。

英和辞典を読むとき忘れがちな、この事実はどうにも強調してもしすぎではないと思います。

念を押しますが、辞書に載っているのは意味（抽象）と言うよりも言葉（具象）なのであり、言葉のうちでも文字（具象）なのです。これを漠然と曖昧に「意味」（見えない観念）だと考えると悪しき抽象——私が勝手そう呼んでいるだけでそんなものはありません、これもまた抽象だからです——におちいることがあり、要注意です。

＊

形、形態、形状、外観——figure の持つある側面を日本語の文字としてこう変奏されると、そこに見える漢字や漢語にそなわった身振り、つまり形の喚起力に感心します。それぞれの形が異なっています。意味という見えないものが、具体的な文字の違いとして形を取ってあらわれているわけです。

「ぜんぶ同義だ」とか、「ぜんぶ同じだ」とは悪しき抽象でしかありません。上の文字列では、異なる日本語の単語が並べられ、同時に変奏されているのです。変奏ですから、ずれていく形とそれぞれの形が呼びさますイメージ（意味でもいいです）は異なっています。

私にはこれをぜんぶ同じだという勇氣はありません。

形、形態、形状、外観——。じっと見つめましょう。それぞれの言葉（文字列）の形が、言葉としての語義やイメージを擬態しているのか、またはその逆の事態が生じているのかが不明になり、私はわくわくどころかぞくぞくします。

数字、計算

フランス語の figure にはない数字と計算という語義が、英語の figure にはあるのですが、私にはこれが意外であり、考えこみそうになります。語源やその意味がどのような経緯で生まれたのかを調べて知りたいと思うのではなく、勝手に自分で想像してしまうのです。

数という抽象的なものを人が扱うためには、おそらく形のある物に置き換えないと難しいのではないかと想像します。たとえば、I、II、IIIや、一、二、三のように、物を模した形が数字になったのかもしれない。この場合に頭に浮かぶのは、指とか小枝とか小石です。あと貝殻も。

リーダーズ英和辞典には「(アラビア) 数字」という記述があり、ローマ数字と漢数字を連想していた私は苦笑してしまいます。

人の姿、人影、肖像、人物

「人の姿」を「人影」に置き換えると、その文字が連想させる「影、かげ」というイメージに魅惑されます。

自分の姿を肉眼では目にできない宿命を負った人間が、自分の姿を地面や壁に映った影として見る、または水面に映った像として見るのですから、はかなげで切ない気がしてなりません。

地面に落ちたり伸びる影も、水面に映る影も長くそこにとどまるものではないからです。

人が絵を描くことを覚えて姿が肖像となり、つくった話や物語の中に登場する人間が人物（キャラクター）になっていったのでしょうか。絵や言葉からなるフィクションに、人物やその姿が生き生きとした形であられるようになっていった。そう考えると興味深いです。

図案、模様、図、図解、さしえ

図案、模様、文様、紋様、デザイン、図、図解、さしえ、図形。こう並べてみると面白いですね。人において視覚がどれだけ大きな意味を持っているかがうかがわれます。身の回りを見まわすと、こうしたものだらけだと気づきます。

テレビを見ても、パソコンでネットに入っても、絵や像や模様や図に満ち満ちています。ぜんぶ見るものです。

人に備わった「見る」という行為が、その意味とイメージをはらんだ「意味」という言葉を生み、その「見る」が「まねる」「えがく」「かく」「つくる」という一連の視覚をとまなう行為や動作を増殖させていったのでしょうか。

想像すると気が遠くなりそうです。軽い目まいも覚えます。もちろん、気持ちがいいという意味です。こういう想像が私は大好きなのです。これがあるから、この文章を書いているのであり、これがあるから毎日生きていると言っても言いすぎではありません。

フィギュア

日本語で頻繁につかわれる「フィギュア」はダンスやスケートのフィギュア、つまり舞台上や氷上に描く図形から来たようです。人形の「フィギュア」もカタカナでよくつかわれていますね。

名詞として、動詞として

形を描く、形のあるものをいじる。英語ではほとんどの名詞が動詞としてももちいられる点が、日本語を母語とする私には興味深く感じられます。

たとえば、Don't dog me. で「(犬みたいに) 私を追いまわすな」、Please water these plants. で「(花などに) 水をやってください」となります。日本語では「行く (iku)」「食べる (taberu)」「整う (totonou)」みたいに「ウ段」で終わるわけですが、言葉の形のありようを比較してみると不思議です。

figure は「計算する、見積もる、数字で表す」「想像する、心に描く、思う、考える」「かたどる、彫像や絵画として表す」という動詞としてももちられています。

英語の figure には名詞だけでなく動詞があることで、figure の層が増し、さらに楽しい読み物になっていると感じます。

音型、音形、モチーフ

音楽に無知なので「音型、音形、モチーフ」という語義の意味は想像するしかありません。音にも形がある。音が心の中に形となってあらわれる。そういうことでしょうか。うっとりするイメージです。

大きめの英和辞典を読むと、さまざまな専門用語としての訳語が出てきて、驚かされることがよくあります。詳しい意味を知りたい場合には、さらに国語辞典や百科事典で調べたり、専門書に当たらなければなりません。

勉強が苦手な私は、その意味を想像してわくわくする楽しさのほうを選びます。

文彩、言葉の綾

修辞学や批評や文学研究で使用される訳語である「表象、象徴、比喩、文彩、ことば

のあや」と並べると、個人的にはぞくぞくします。

「比喩で（として）表す、表象する」、「登場する、出る、顕著に現れる、重要な役を演じる」、「筋が通る、意味を成す、理にかなっている」というイメージが頭に浮かびます。私は「正しい」とか「正しくない」にはこだわりません。

研究者でも探求者でもない私には、自分にとっての figure が大切なのです。知識や蘊蓄や含蓄は苦手です。

私のイメージする figure

もともとないものを心に浮かべるのは、空（くう）を「なぞる」に近い気がします。見えないけどなぞる。そこにはないけどなぞる。ひまつぶしになぞる。ぼんやり見えるものをなぞる。

なぞっているうちに何かが見えてくる。見えてきたものを逃さないために、さらになぞる。

空をなぞる。これがつくる、でっちあげるの一步手前の身振りなのかもしれません。ただし、次の一步は長い気がします。なぞるが無数に繰り返されて、たぶんいま創作や文芸と呼ばれるものがあるのではないのでしょうか。

ひょっとすると、文学や芸術だけでなく、科学と呼ばれる分野での発明や発見も、さらには広く文化や文明においても、空をなぞることが切っ掛けになって、「つくる（作る、造る、創る）」といういとなみが起こってきたのではないのでしょうか。

空（くう、そらやからでもいいです）をなぞる——これが私の figure のイメージです——の次の一步は永遠の途上にあるのではないのでしょうか。

何をなぞっているかは人には不明。なぞっているうちに形があらわれる。その形にうながされて、ものやことを「つくる」。

だから、なぞる。人はなぞりつづける。

英和辞典の figure に並んでいる言葉たちを見ているとそんな気がします。見ていて飽きません。

#意味 # 抽象 # 具象 # 辞書 # 国語辞典 # 英和辞典 # 仏和辞典 # 英語# フランス語
日本語 # 影 # figure

影のこだまを聞く

＊

影のこだまを聞く

星野廉

2023年3月4日 10:35

目次

こだまする、うつる

英和辞典を読む

フィギュア、フィギュール

読む快樂

文字に見つめられる

文字に先立ち、文字に送られる

こだまする、うつる

ある言葉が別の方言や言語にうつされる。こっちがあっちに映る、こっちをあっちに写す、こっちからあっちに移す。要するに、うつしうつるのが、翻訳と呼ばれている作業です。

”（前略）

そして、目を打ち開いて眺めよ、青い眼薬を塗れ、と励ます。

八百年ほども昔に生きたイスラムの神秘家詩人の、「七つの谷」と題する記から、おそらくいくつかの言語に飴して、二十世紀になりドイツ語に訳され、断片として私の耳にまでようやく響いて来た声である。”

（古井由吉作「埴輪の馬」『野川』（講談社刊）所収・単行本 p.10）

上の引用文では、大昔に遠い地で紡がれた詩人の言葉が、「いくつかの言語に飴して」、最後には「ドイツ語に訳され」、古井由吉の「耳にまで響いて来た声」と要約できそうです。

「研する」というのは翻訳という作業を指しているのですが、「響く」とも共振する、比喩的な言い回しだと思います。目の人というよりも耳の人だという印象の強い古井由吉らしいたとえです。

比喩的なだけでなく詩的にも感じられるのは、ギリシア神話に登場するエーコーを連想するからかもしれません。ナルキッソスが水面に自分の姿を「映した」のに呼応するように、エーコーの発した歌の節がこだまになった、つまり強引に言えば「うつった」と言える逸話があります。

中途難聴者だからとは言いませんが、ともすると私は言葉を視覚的に影としてとらえる傾向があり、「うつる・うつす」と結びつけがちです。そんな私には、「耳の人」である古井の比喩が新鮮に感じられるのです。

こだま、研、木霊、木魂——。

こうした複数の表記を思いうかべずにはられません。これらの言葉たちが、まさに響きあい共振しています。

かげ、影、翳、陰、蔭、景——。

一方で、こちらの言葉たちは、うつり、映り、写り、遷り、移るわけですが、こだまという聴覚に訴えるイメージと、かげという視覚的なイメージが、どこかで響きあい、うつりあっている気がしてなりません。

上のイスラムの詩人が発した言葉が声で、それが書きとめられたのか、そもそも文字として書かれたものなのかは知りません。いずれにせよ、「目を打ち開いて眺めよ、青い眼薬を塗れ」と発せられた言葉が、別の複数の言語に移され、ドイツ語訳となったものを古井由吉が読み、日本語にした一節が小説『野川』に引用されているのです。

その日本語訳を読者である私が読み、それを私が引用という形でうつした一節が、あなたの端末の画面に映され、それをあなたが読んでいます。「八百年ほども昔」にイスラムの詩人によって「はなされた」言葉が、いくつもの「うつる」と「こだまする」をへて、ここに「ある」と言えそうです。

英和辞典を読む

英語にある一つの単語が、日本語にあるたくさんの言葉とイメージを呼ぶ。そのさまをながめてため息をつく。英和辞典を読むのは贅沢な体験だと思います。

辞書を引くだけの人もいるでしょう。辞書を読む人もいるでしょう。眺める人もいます。辞書に物語を読む人もいるでしょう。辞書を読んで詩をつくる人がいても驚きません。

辞書で意味を調べると言いますが、英和辞典に載っているのは意味ではなく言葉であり文字であることに敏感でいたいと思っています。意味とは目に見えず触ることができない抽象だからです。意味は、人の頭の中だけにあるものだとも言えるでしょう。

(いま述べたことは、意味に気を取られると言葉の形が見えなくなるとも言えます。私には、言葉の形、とりわけ文字の姿や形——文字の顔と言ってもかまいません——が愛おしくてたまらないのです。このことについては後述します。)

英和辞典を引いて目にするのは意味ではなく言葉、文字、さらに言うと訳語なのです。翻訳された語ですから、上で述べたように時空を越えて、うつり響いてきた影であり餅です。

辞書の語義として並んでいる言葉たちは、文字という影として私たちの目に映り、文字が喚起する音として私たちの耳に響きます。言葉は私たち一人ひとりの心の中でいだかれる意味やイメージもまた誘いだします。

不思議でなりません。当り前のことが当り前に感じられなくなります。

フィギュア、フィギュール

figure という英語の単語を英和辞典で引いてみると、そこに書かれた語義の美しさに驚きます。字面が綺麗。言葉が喚起するイメージが美しい。ゆっくり口にする美しい

音になって流れ出ます。

figure が英語から別れて日本語でつづられた語義となって枝分かれしているさまが見えます。

たとえば、形、人影、挿絵、図、図形、フィギュアスケートのフィギュア（動作・図形）、表象、数字、音楽のモチーフ、計算、模様、言葉の綾——という名詞の語義が見えます。

計算する、見積もる、数字で表す、想像する、心に描く、思う、考える、かたどる、彫像や絵画として表す——

動詞の語義も見ていて飽きません。英語から日本語として枝分かれした語義がわくわくするイメージを発しています。奇跡としか思えない出会いと組み合わせに見えます。私は動詞に弱いのです。

figure は仏和辞典にもあります。フランス語だと顔とか表情の意味が強かったりします。

ジェラルド・ジュネットの『フィギュール』という本を思い出します。タイトルは言葉の綾とか文彩という意味です。

辞書で figure の語義を眺めていると、何かをなぞっている自分を感じます。自分の内に動きを感じます。体と心が動いているのです。気が遠くなりそうな心もちになります。

読む快樂

読む快樂はあると思います。

私の場合には、見る快樂なのです。テキストの快樂とかいう学問っぽいものではありません。単純明快。文章を見るだけです。小説なんか一度まばらに読んだものを、まだらにながめています。

私の意識はまだら状みたいなのですが、年のせいかな、このところそれが進行しているのを感じます。

ストーリーのあるはずの小説を読んでいて、好きな文字や文字列が、ところどころにある、つまりまだらにあるように見えてくるので、順不同でそこだけを見ているのです。

ある意味悲惨な話なのですが、まだらがまだらをまばらに見るのですから、本人はいい気持ちになります。

小説を読みながら、文字や文字列の形と、意味やイメージとのあいだを行ったり来たりする感じ。抽象と具象のあいだを行き来するとも言えそうです。ストーリーや内容を追うのは苦手なほうです。

だから、読む快樂よりも見る快樂だなんて言うのだと思います。

＊

小説だけでなく、辞書もよく見えています。

上で述べたように、英和辞典では figure という語の語義や語源をながめていると、気が遠くなりそうになります。

連想ゲームのように並んでいる文字たちが見せるダンスもバレエのように綺麗ですし、語義として挙げられている日本語の言葉の字面が、その意味に擬態しているさまには息を飲みます。

英語の単語が見出しにあるのに、日本語の言葉が並んでいるのです。一対一ではなく一対多の対応なのですが、これが不思議です。それがまた綺麗なものがさらに不思議。

どの言葉もみんないい顔をしています。いい顔が一堂に会した集合写真の趣があります。一編の詩にも見えます。ちなみに、私は詩を読むだけでなく見る癖があります。じっと見ているのです。

辞書の話でしたね。

辞書でお薦めしたいのは、短い言葉です。短い語ほど長い語義があるのが辞書の特徴です。一目瞭然なのです。aなんて数ページにわたるじゃないですか。

一対一ではなく一対多の対応の不可思議さ。英語もフランス語も、そしてもちろん日本語もそうです。

いくら見るのが楽しいとはいえ、辞書は読まないわけにはいきませんから、一度読んだら、あとはひたすらながめるのです。見ているのですから、こうなるともう顔をながめているようなものです。

本にも、文章にも、文字にも顔があります。少なくとも、私にはそうです。

文字に見つめられる

文字を読んでいると、見られるという瞬間があります。これも、少なくとも私にはあると言わなければならないでしょうけど。

文字に見つめられる。

文字は顔——それもたぶん自分の顔、または自分に似た顔です——ですから、目のある顔に見つめられて当たり前なのです。こっちが見れば、あっちも見ている。鏡と同じです。

瞳と同じです。鏡に映る目の中にある瞳でも、面と向かっている他人の目の中に見える瞳でも、同じです。瞳の中に自分の姿があります。文字に瞳があるようには見えませんが、見られている気配はあります。濃厚にあるというべきかもしれません。

見入られ、魅入られる——自分という異物の目に、です、見入る以上鏡には必ず目が映っていますから——ことが快になっているにちがいません。

嘘だと思ったら、鏡を見てください。そこには鏡瞳があるはずです。そこには自分あなた= I eye という他者自分=眼 meme が映っているはずです。

ちなみにだから何？、ひとみは人見から来たという説もあるみたいですか？。さらに言えばもう、やめたら？、虹彩は英語で iris ですがふーん、iris の二つの ieye の点が目に見えませんか？ 目が点ですわ ぜんぜんそうは見えませんが鏡を前にして乱れて（分裂して）失礼しました。

（拙文「異物を入れる、異物を出す」より）

見ているという気配、そして見られているという気配——。これが自分なのかもしれないと最近よく思うのですが、文字をながめているとそれが実感できます。少なくとも私にはそうです。

文字に先立ち、文字に送られる

誰にとっても生まれた時にすでに自分の周り、つまり外にあった言葉は、文字どおり外から自分の中に入ってくるわけですが、発した声がすぐに消えるのに対して、書いた文字は残ります。

文字には顔がありますが、その顔には表情が浮かびます。文字の顔を文字の形、文字の表情を意味と考えると分かりやすいかもしれません。

（文字の表情つまり意味に気を取られると、文字の顔つまり形や姿が見えなくなりますが、いまは文字の顔が無視され、ないがしろにされている時代だという気がします。）

文字は消さないかぎり残っているので、文字の表情もいつまでもそこにあって、付きまとうことになります。

しかも、文字は複製ですから、あちこちに同じ——同一と言ってもかまいません——文字が無数にあるのです。

一つ消しても、どこかに同じものがたくさんあるのです。文字の顔とそれに浮かんでいる表情が、あちこちにうようよしている。世界は、人の世界は、文字と意味に満ち満ちている。

この文字の顔と表情は永久にあるわけではありません。目をつむれば、消えます。その意味ではないのと同じです。

文字はインクや液晶という物質がなければ存在できないのですが、物質からなる、形のある物はいつか必ず壊れます。そもそも人が書く以前には文字はなかったわけですし。

文字に先立った、つまり文字の先にあった人類は、いつか再び文字に先立つ、つまり文字よりも先に消えてしまうのかもしれませんが。いや、冗談ではないのです。昨今の世界情勢とこの星の気象に目を向けると決して冗談ではありません。

世界は文字と意味に満ち満ちています。これだけ文字が増えていくのは殖えているのではないかと思うほど、複製が複製を生み産むさまが進行し拡散しています。

なにしろ、いまは文字の入力と投稿と複製と拡散と保存が瞬時に同時に並行して起こっている時代ですが、人類の歴史の中ではごく最近の出来事なのです。

いつの間にか、こうなってしまった気がします。

人が文字に先立つとき、いまや勝手に殖えつつあるかのように見える文字は——そうです、文字つまり文書の繁殖ですから、ネットの普及だけでなく、例の「名前のない怪物」の台頭を指しています——、人を送ってくれるのでしょうか。このところ、文字に先立ち、文字に野辺で送られる人の光景が、オブセッションになっています。

杞憂と妄想であることを祈るばかりです。

＊

それにしても、文字は美しい。

英和辞典で figure を引いてみてください。見るだけでかまいませんから。綺麗ですよ。いい顔たちに出会えます。

#文字 # 言葉 # 顔 # 読書 # 辞書 # 英和辞典 # 英語 # 日本語 # フランス語# 翻訳
古井由吉 # ジェラルド・ジュネット # 意味 # インターネット

素描、描写、写生

＊

素描、描写、写生

星野廉

2023年3月13日 08:00

目次

かげ、影、陰

言葉のかたち

記憶の風景、記憶のかたち

写生と描写

描写、なぞる

言葉の影、言葉というまぼろし

複写、複製、印影、拡散

外にある線をなぞる

影には追いつけない

かげ、影、陰

かげという言葉が好きです。「かげ、カゲ、影、陰、蔭、翳、景」という字面をみているだけで、気が遠くなりそうになります。

呼びさまされるイメージに圧倒されるのでしょうか、息が苦しくなり收拾がつかなくなるので、深呼吸をして心を静めます。

寝入り際に、かげについて思いをめぐらすことがあるのですが、そんなときには幸せな気分になります。

昨夜は、影と陰について考えていました。

大きな木の下を夢想しながら、かげについて考えていたのです。それを思いだしながら、文字にしてみます。

言葉のかたち

木の陰で木の影について思いをめぐらしていたのです。夢うつつの中での話です。

まず影と陰の違いを見てみましょう。影と陰の使い分けは、例文で見るのがいちばんです。以下の例文は私が作文したものです。

葉の落ちた地面に、木が影を落としている。

庭の池に木の影が映っている。

散歩の途中に木の陰で一休みした。

犬が木陰で身を横たえている。

影は光をさえぎってできる、あるいは水や鏡に映った形や姿です。一方の陰は、日の当たっていない場所です。

＊

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

もともこの島々にあった「かげ」という音の影が、ずっと後になって「影、陰、蔭、翳、景」という形の影を大陸から迎えたのですから。

「かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている」というのは、「まず現実での体験があって言葉は後に付けた」というふうにすることもできそうです。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

いや、いるかも。そういうことが、あるかも。いつか寝入り際に考えてみます。

*

言葉、とりわけ文字は後付けです。ことわり、言割り、事割り、理なのです。理屈のことです。

分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。これは、断り。言いわけです。

私は研究者でも探求者でもありません。ただ言葉が好きだけです。言葉の不思議さに取り憑かれているだけです。

こうやって言葉に付きあってもらっているだけで満足しています。

記憶の風景、記憶のかたち

話を戻します。

昨夜の寝入り際の夢うつつの中で浮かんだ景色を、いま思いえがいています。

言葉にしてみます。

*

草原を歩いていると、遠くに大きな木が見えた。近づいてみると、木のそばには池がある。草の生えた地面に木がくっきりとした影を落としている。

池には、その大きな木の先端の影が映っている。草で被われた地面に落ちている木の影が伸びて、水面に映る木の影につながっているように見えなくもない。

どうなっているのだろうと興味を覚え、歩を進めて木の陰の中に入った。地面に映った木の影が池に映った影と重なっている。

不思議な気持ちでそのさまに見入っていると、そばで何かが動いた気配がしてぎくりとした。

木の陰で身をひそめていたのか、猫がこちらを見ている。灰色っぽい毛の痩せた猫だ。

＊

この後に、寝入った記憶があります。昨夜と今朝の夢では影も陰も出てこなかった気がします。

写生と描写

以上の作文は、昨夜の寝際に浮かんだ風景を思いだしながら作ったものですが、いま読みかえしてみると、その嘘っぽさに恥ずかしくなります。

記憶を頼りに何かを思いえがいたり、ましてやそれを言葉にすることの難しさを実感しただけでなく、そこまでして言葉にしようとする自分の執念にたじろいでしまったのです。

影と陰について意識的になっているために取って付けたような作文になっています。いかにも作りものっぽいのです。

＊

文章を書くという行為は、ふつう屋内というか室内でおこなわれます。私の場合には自宅の居間でパソコンを使って書くのが習慣になっています。

何かを、あるいは何らかの風景を見ながら、その場でノートやメモ帳にペンで書くとか、スマホに文字を入力して書くというのは想像しにくいです。

書くことを職業としている人なら、現場で取材メモを取るでしょう。いわば言葉による素描（デッサン）でしょうか。でも、清書するのは帰ってからの屋内だと思います。

俳句や短歌や短い詩の場合には、その場で言葉を口にして、何かに書きとめたりすることは十分に考えられます。俳句だとそのまま、作品になるのかもしれませんが。そういう場合があるとすれば、素描がそのまま清書になる感じがします。

写生という言葉が、明治になって俳句の関係者たちの間で口にされるようになったのは、分かりやすい展開だと言えるでしょう。

＊

絵画と文章を同列に扱うことはできませんが、デッサン、素描、写生、描写という共通の言葉で論じることは多いようです。私もやっています。

文章の場合に話を限れば、その場で文字にして、以後手を加えない——一気に書く、一筆で書く、一気呵成——という写生は、きわめて稀な出来事だと思います。俳句くらいのものでしょうか。

デッサン、素描はあるでしょうが、後で清書することになります。さらには推敲もあるでしょう。

小説、エッセイ、新聞や雑誌の記事、ブログという形で、私たちが読む文章は、現場で撮られた写真とは異なり、現場から持ち帰ったメモや記憶を元にして描かれた絵に近いと言えます。

描写、なぞる

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。それもじっさいに見てから時間を経てのことです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

その意味で、描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。そもそも見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。

(意外に思われるかもしれませんが、『夢十夜』を書いたときの夏目漱石は、このことにきわめて意識的であった節があります。夢日記の形を取りながらも、あの作品が夢の再現では断じてないからです。細部に見られる優れた描写に目を注げば一目瞭然なのです。

たとえば夢日記という言葉があるから、勝手に人はその存在をでっち上げてしまうのでしょうか。その意味で夢十夜はミスリーディングなタイトルと言えるかもしれません。)

なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではないのです。

むしろ、影（言葉のことです）そのものの世界に入っていくといとなみなのです。影には影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるのです。

絵を描いているとき、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれるのと似ています。

日本でも西洋でも、絵は先行するたくさんの絵を見てその描き方を覚えたうえで、手本に沿って描く、あるいはじっさいに物や風景を見て描かれてきた。そんな話を見聞きした覚えがあります。

ほら、〇〇流とか、〇〇主義とかあるじゃないですか。描き方があって、それに従って描いていたし描いているようです。だから、その流派の絵はそれぞれ似ているのです。

個性や才能は伝統という枠の中での括弧付きのものだという気がします。

*

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

言葉の影、言葉というまぼろし

木の影と似た言い方に樹影があります。木の影と木の陰だけでなく、木の姿という意味もあるようです。

樹齢二百年という、そのいちょうの樹影がピラミッドに見えた。

即席に作った文ですが、こんな使い方ができそうです。

＊

木という生き物、その木の姿である樹影、その木に日の光が当たって地面に移る影、その木にさえぎられてできる陰。そうした「かげ」たちは、木そのものではありません。

言葉は、それが指ししめしたり、名指す事物そのものではありません。その意味で、かげに似ている気がします。いわば言影です。勝手に作った言葉、いわば自分語ですが、ことかげとか、ことえいとでも読みましょうか。

言葉には姿があります。文字のことです。文字は形であり姿ですが、文字には音（おん）も、語義も意味もイメージもあります。

音と意味とイメージは目に見えません。それなのに、音と意味とイメージには大きな存在感があります。

＊

音と意味とイメージは、まるで文字の影のようですが、そんなことはなく、むしろ音が先で、文字は後付けなのです。まず話し言葉があって、書き言葉が出てきたのはずっと後のことだと言われています。

それなのに、目に見える形としてある文字はいかにも偉そうに見えます。人は目に見えるものに信を置きます。一方で、目に見えないものに畏怖の念をいただくことがあります。

言葉は目に見えるものでありながら、目に見えないものでもあります。具象と抽象を兼ねそなえている、具象と抽象が同居しているという言い方もできるでしょう。

だから、人の外にあって、人の中に入ったり出たりできるのです。

不思議ですね。謎です。考えれば考えるほど不思議でなりません。

複写、複製、印影、拡散

まるでまぼろしのようです。幻影のようです。見ているようで見えていない。見えていないようで見える。

まぼろしは見るものではなく、なぞるものではないでしょうか。なぞるのであれば、目をつむってもできそうです。

なぞることなら、日向もなく陰もない、したがって影もない闇の中でもできそうです。

なぞることなら、生きていない物でもできるのです。人工知能のことです。コピー機のことです。ネット上での文字の入力、投稿、複製、拡散、保存のことです。

よく考えるとぞっとすることが、日々、いやいまこの瞬間にもあちこち、いや無数の場で起きているのです。

＊

見ていなくても、闇の中でも、描写はできます。無生物も、描写ができます。

まぼろしはまぼろしも描けるのです。まぼろしでまぼろしを描くこともできるのです。

まぼろしをなぞる。さらに言うなら、なぞるをなぞる。

これは、人の外にある出来事であって、人の中に入ったり出たりすることがあっても、つまり人がなぞることはあっても、外そのものなのです。

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械や AI にも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいはおそらく外にはないのです。

たぶん、あらゆるさかいがそうなのでしょう。さかいは人が決めるものです。だから、線引きをめぐる争いが跡を絶ちません。

さかいはありません。少なくとも外にはありません。

外にある線をなぞる

人は自分で勝手に引いた線をなぞっているだけだとも言えそうです。

自分が引いたはずの線が「外にある外である」のは皮肉ではないでしょうか。これは線が自立しているからに他なりません。

＊

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。人の思いや思惑とは関係がなく「ある」という意味です。

これは、いま始まったことではありません。写本、写経、印刷の時代から起きている出来事なのです。

(人が文字をなぞり写すのは、線からなる文字が外にあるからです。内にあれば、わざわざ苦労して写しません。)

そして、複写。コピー (印影と呼びたいです)、複製。さらには、現在のコピーのコピー、複製=拡散=保存が起きているのは、同じ理由でそうなっていると言えそうです。

いまや、「写す」と「なぞる」は人の手に負えないものになり、人は振りまわされています。いや、これもいま始まったことではないでしょう。

影が外にある外であるという話は、人が言葉を持ったときに始まったにちがいません。

私は詳しくない分野なのですが、おそらく音楽や演劇やスポーツも影をめぐり、影を追っているいとなみだという気がします。

影には追いつけない

プレイ (play) なのです。演技、演劇、ドラマ、遊戯、賭け、演奏、競技、パフォーマンス、これらすべてがプレイであり、影を追い、影をなぞっているのではないのでしょうか。

演じる、振りをする、遊ぶ、戯れる、賭ける、奏でる、競う、おこなう、なぞる。名詞ではなく、このように動詞としてとらえるとさらに、体感しやすいと思います。

影をなぞるというのは、動きであり、その動きが刻々とうつつっていくことだからでしょう。ほら、影って動いていますよね。だから、ずっと目で追い、体で追いつづける必要があるのです。

影を前にして、人は迂回するしかなさそうです。おそらく言葉という影にまどわされながら、でしょう。人が（に）先立つ影に、人が導かれるはずがありません。人は影には追いつけません。気づくのにも遅れるのです。全体像を目にすることさえできないのです。

（拙文「意味のある影、意味のない影」より）

そうなのです。人は決して影に追いつけません。それなのに、自然界にある影に満足せず、自分でも影を作っているのです。作りつづけているのです。

#影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 記憶 # 素描 # 描写 # 写生 # 絵画 # デッサン # 文字 # 幻
夏目漱石 # 複製 # 拡散 # AI

言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼろし

＊

言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼろし

星野廉

2023年3月14日 15:59

目次

あなた・貴方（貴男・貴女）・彼方

言葉の向こうに見える言葉

置き換える

かげ、影、陰、翳

言葉の向こうに見える現実

言葉の向こうに見えるまぼろし

うつせみのたわごと

あなた・貴方（貴男・貴女）・彼方

「あなた」は「貴方、貴男、貴女」とも「彼方」とも書けます。

こうなったのには理由があるのですが、いまのこの時点で考えると、英語で言えば、1) you の意味と、2) over there の意味の二つがあるということです。

「あなた」という音に、「貴方、貴男、貴女」と「彼方」という漢字を当てたと考えることもできるでしょう。当て字です。

言葉の向こうに見える言葉

上で述べた二つの意味の「あなた」は両方とも言葉であり文字です。言葉の向こうに見える言葉とも言えそうです。

「貴方、貴男、貴女」(you)という言葉の向こうに見える、「彼方」(over there)という言葉。

「彼方」(over there)という言葉の向こうに見える、「貴方、貴男、貴女」(you)という言葉。

どちらから見ても、言葉の向こうに見える言葉です。

いま見えると言いましたが、どちらか一方を意識していると、もう一方が見えない気がします。騙し絵のように。

不思議と言えば不思議です。ふだんは考えないことですから、当たり前と言えば当たり前かもしれません。

置き換える

「そういうのはね、両義性とか多義性と言うの」、「多義語っていうのがあるんだ」

そう言われると、「なんだそういうことか」と納得しそうになります。ある言葉に二つ以上の、つまり複数の語義や意味があるという話です。

このように、ある現象を偉そうな言葉や用語に置き換えると、それで分かった気持ちになります。それは別の言葉に置き換えただけで分かったのではないと私は思います。

偉そうな言葉に置き換えることで、それが指す現実を観察しなくなるからです。解決済みのものとしてかえりみなくなり、それについて考えるのもやめてしまうからです。つまり、思考停止状態におちいっているとも言えます。

ある具体的な体験を、ゲシュタルト崩壊とか承認欲求とかブルースト効果とかバタフライエフェクトと呼んで済まし澄ましているのと同じです。

レッテルを貼って分かった気分になるよりも、そうした現象をよく観察し自分の問題として具体的に考えるほうが、人生はわくわくと私は思います。

かげ、影、陰、翳

「かげ」を辞書で調べると、いろいろな語義が載っています。そのどれもが「かげ」です。上で述べた多義語であり、多義性が「かげ」という言葉に立ちあらわれているわけです。

言葉の向こうに見える言葉がこれだけたくさんあるなんて、すごいです。多義語とか多義性なんて言葉に置き換えて、考えるのをやめてしまうなんて、もったいないと私は思います。

「かげ、影、陰、翳」と書き分けることができるのですから、それだけいろいろな「かげ」が現実にあるのにちがいません。

「かげ、影、陰、翳」という言葉から、「かげ、影、陰、翳」を探して現実を見てみる——。そんなふうにと考えるとわくわくぞくぞくしてきます。

さらに、「かげ」を比喩的に騙し絵として考えてみると、ものすごい騙し絵じゃないですか。何通りに見えるのでしょうか。想像すると気が遠くなりそうです。

このすごさは、言葉が必ずしも視覚に訴えるものではないからなのでしょうが、だからこそ、言葉はすごいと思います。

言葉の向こうに見える現実

言葉は現実を写したもの、言葉は現実の影、小説は世界を写した鏡——このように言われることがあります。

現実が先にあって言葉が後に来るという発想です。

一方で、言葉は現実ではないので、言葉と現実がぴったり重なることはありません。言葉と現実は一对一に対応しないという意味です。

言葉には言葉の世界があります。言葉は自立した世界を持ち、自立した存在でもあるのです。

とはいうものの、言葉の世界と現実の世界は似ています。

＊

猫という文字や発音は、猫という生きものとは同じではない、つまり別物である。それどころか、ぜんぜん似ていないのに猫という文字と発音で、人は現実の猫を思いだすし、思いうかべるし、思いえがくことができるのです。

言葉の世界から現実の世界を見ているとか、入っていくとも言えます。

たとえば、学習の効果とか条件反射という偉そうな言葉に置き換えて、考えるのをやめるのではなく、人が言葉から現実に入っていく現象を、自分のこととして意識的に体験するのもわくわくするだろうと思います。

私はいまこの現象がとても気になります。不思議でならないのです。

言葉の向こうに見えるまぼろし

言、現、幻。

この三つの漢字は「げん」と読めます。

言界、現界、幻界。

この三つの漢字の文字列は「げんかい」と読めます。私がつくった自分語なのですが、よくこうやって並べたり、記事の中でつかったりします。

言葉の世界、現実の世界、まぼろし（思い）の世界。

このように変奏したり変装したり変相することもできます。こういうことが好きなのです。

*

いま私が挙げた三組の文字列ですが、これは言葉であると同時にまぼろしではないかと私は思います。いま現実目にしているという意味では現実と言えるのかもしれませんが。

これが言界であり現界であり幻界なのですが、そう自分語で言われても困りますよね。そんなことを言われても確認しようがないからです。

その意味では、言界は現界であり幻界であり、限界でもあるのです。

うつせみのたわごと

上で見てきたように、言葉の向こうには言葉が見えることがあるし、言葉の向こうには現実が見えることがあるし、言葉の向こうにはまぼろしが見えることがある。そんな気がします。

「うつせみのたわごと」（全14回）ではそういう話をしていきます。以上、「うつせみのたわごと」のご紹介と宣伝でした。

読みにくくて退屈な連載ですけど、よろしく願いいたします。

レトリック # 言葉 # 漢字 # ひらがな # 多義性 # 多義語 # 両義性 # 意味 # 日本語
自分語

影の文法

＊

影の文法

星野廉

2023年3月25日 07:37

目次

影を落とす

慣用句、決まり文句、定型を外す

定型を外す

文字どおりに取る

影の文法

影を落とす

影という言葉を使った言い回しはたくさんあります。どれもがぞくぞくするようなイメージをいだかせてくれます。

「影を落とす」という言い方が好きです。作文してみましよう。

久しぶりに庭に出ると、伸び放題になったヤツデの茂みが、これまた伸びた雑草の上に黒く大きな影を落としていた。

道に夕日が影を落としている。私はまぶしさに目を細めた。

戦争の記憶がいまも彼の日常に影を落としているのは間違いない。

＊

最初の例文は、そのまま文字どおりに取れます。ヤツデに日が当たって、その下に影

が映っているという物理的な現象を言葉にしたものです。余計な飾りを取れば、純粋な描写だと言えそうです。

「夕日が影を落とす」という場合には、「光がさす」という意味になるのですが、個人的にはこの言い回しを使ったことはありません。初めての作文です。

三番目の例文の「影を落とす」はネガティブな影響を与えるという意味ですから、比喩的な言い方だと理解しています。

慣用句、決まり文句、定型を外す

「影を落とす」という言い回しはどの辞書でも、「影」の語義の例文としてではなく、別の扱いになっています。いわゆる慣用句とか成句であり、決まり文句とか定型とも言えそうです。

「(地面や水面に) 影が映る」、「光がさす」、「ネガティブな影響を与える」——「影を落とす」は、大きく分けて上の作文で見た三つの使い方ができるようです。

つぎの例文を見てください。

彼は影を落とした。気がつくとき自分の影がなくなっていたのだ。

午後遅くのことだった。夕日が影を落としている坂道を下っていくと、長い影を引きずりながら上ってくる友人が見えた。すれ違いざまに軽く会釈した瞬間、彼ははっとした。目の前にあるはずの自分の影がないのに気づいた。

理屈に合わない描写もありますが、小説であれば、ありえる文章ではないでしょうか。「これは小説です」と断れば、それはどんなことを書いた場合でも、その言い訳になります。

*

小説と嘘は意外と近そうです。小説、フィクション、虚構、作り話、嘘と並べると分

かりやすいと思います。

小説では何を書いてもいいのです。詩もそうかもしれませんが。とはいえ、詩は嘘に近いと言う勇氣は私にはありません。書きましたけど。

こういうご飯論法はいけないですね。

小説の基本は「語る」ですから「騙る」に堕ちるのはやむをえないでしょう。「かたる・語る・騙る」、血は争えません。

一方の詩の基本は「うたう・となえる・よむ」らしいので、「かたる」とは異なる文脈でとらえたほうが良いと私は思います。

定型を外す

「そこのあなた、忘れ物です。影を落としましたよ」

これは小説ならありそうです。

シュールな展開だと言えます。この科白をうまくつかえば、おもしろい掌編小説が書けるかもしれません。

「影を落とす」という慣用句を文字どおりに取ることで、慣用句の意味をちょっとずらした、つまり定型を外したとも言えるでしょう。

「ずらす」とか「はずす」といったことを私はよくやります。へそが曲がっているからかもしれません。

*

「へそが曲がる」も文字どおりに取ると、なかなか面白い光景が頭に浮かびます。

「へそで茶を沸かす」——いま頭の中で視覚化してみましたが、仰向けになっておへそにやかんをのせている光景には、まさにへそで茶を沸かす滑稽さがあります。

文字どおりに取る

影を落とす、影が落ちる、影は落ちる、影に落ちる、影と落ちる、影で落ちる

こういうふうに、言葉を転がすことが好きです。寝入り際にやるルーティーンの定番です。眠れない夜にも、この遊びをよくやります。

浮かんだフレーズを文字どおりに取って、そのさまを思えがいて楽しむのです。もう少しやってみましょう。

影が影を落とす、影に影が落ちる、陰に影が落ちる、「影を落としたことが、その後の影の生き方に影を落とすことになった」、影と駆け落ちする

*

「影に影が落ちる」と「陰に影が落ちる」は、日常生活でよく目にします。いまも目の前にそうした光景があります。

居間のテーブルでパソコンを使っているのですが、目の前にあるモニターの背後には、窓からの光で薄く長い影ができています。そこに頭上の蛍光灯を浴びたモニターが、濃い影を落としているのです。

輪郭のあいまいな長く四角い影に、くっきりとした長方形の濃い影が落ちているわけですが、陰の中に影があるとも言えそうな気がします。

影の文法

上で述べた「影に影が落ちる」と「陰に影が落ちる」は、よく観察すると現実にある

わけです。

言葉にするとややこしいことが現実にはある。言葉にしてみるとありえない、つまり非現実に見えるけど、そんな現実がある。

言葉には言葉の世界があるのではないか。言葉を現実の影として考えると、影には影の世界があるのではないか。言葉に文法があるように、影の文法があるのでないか。

こう考えるとわくわくします。

*

繰り返します。

言葉にするとありえないことに思われることが現実にはあるのではないのでしょうか。

もしそうであるなら、現実には現実の文法（比喻です）があって、それは言葉の文法や言葉の慣用とは重ならないし、ずれていてもおかしくはありません。

こういうありえないことを想像すると、わくわくどころかぞくぞくしてきました。ありえなさにぞくぞくするのです。

ありえないこと、さらにはありもしないこと、ないことほどぞくぞくするものはない気がします。少なくとも私にはそうです。

ありそうや、あるは、つまらないのです。ありふれていて退屈なのです。

*

言葉の文法があるように、現実の文法があり、影の文法がある。影の文法なんていいですね。

影の思考とか、影の夢とか、影の言葉なんていうふうにエスカレートしたくなります。

ところで、「影の文法」という言葉に「影の内閣 (shadow cabinet)」を連想してしまい、「言葉には裏の文法がある」なんてぞくぞくするような妄想をいだきそうになります。

ありえない、ありえなさそうなだけに魅力的なフレーズです。いつか妄想してみたいです。記事が一本書けそうな気がします。

そんな妄想をしていたら、言葉には裏の文法がありそうな気がしてきました。あるかも……。影には何でもありそう。

*

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

(拙文「素描、描写、写生」より)

上の引用文ですが、もうエスカレートしていましたね。書いたことを、すっかり忘れていました (最近物忘れがひどいのですが、それでいて既視感の洪水に襲われてもいます)。

影 (言葉や絵や映像や音楽) には影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるし作られるのです。

絵を描いている最中に、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれることがあるのと似ています。

そんなときには、描く人は対象を見ながら描いていないように見えます。失礼な言い方になりますが、絵の中での辻褄を合わせているように私には見えます。

私が文章を書くとき、私は言葉の辻褄合わせに夢中になっている自分を感じます。現実にある物や風景を描写しているときにさえ、そうなのです。

細かいところになるほど、目の前の言葉に目を注ぎます。物も風景も思いうかべていないのです。少なくとも私はそうです。

そうした意味で、影（言葉や絵や映像や音楽）は自立していると思います。だから、見たことのない物や風景を描いたり書いたり作ることができるのかもしれませんが。

＊

先ほど上で挙げた作文ですが、「あるべきはずの自分の影がない」というのは確信犯的な「ありえない」だとしても、もし忠実に実写したなら、それ以外にありえない描写がありそうな（要するに下手である）気がします。

私は描写が大の苦手なのです。だから、影の文法なんて言ってレトリックを弄しているのです。

彼は影を落とした。気がつく自分の影がなくなっていたのだ。

午後遅くのことだった。夕日が影を落としている坂道を下っていくと、長い影を引きずりながら上ってくる友人が見えた。すれ違いざまに軽く会釈した瞬間、彼ははっとした。目の前にあるはずの自分の影がないのに気づいた。

作文 # 影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 描写 # 文字 # レトリック # 比喩 # 擬人法 # 夢 # 絵画

影の落とし物

＊

影の落とし物

星野廉

2023年3月26日 07:49

目次

ありえないから人を魅惑する

ありえない描写

【掌編小説】落とし物

説明と描写

ありえないから人を魅惑する

言葉にするとありえないことに思われることが現実にはあるのではないのでしょうか。

もしそうであるなら、現実には現実の文法（比喻です）があって、それは言葉の文法や言葉の慣用とは重ならないし、ずれていてもおかしくはありません。

こういうありえないことを想像すると、わくわくどころかぞくぞくしてきました。ありえないさにぞくぞくするのです。

＊

影は自立している。影には影の文法がある。

言葉は自立している。言葉には言葉の文法がある。

この考え方は私にはとても魅力的に感じられます。人は無意識のうちに、言葉の世界の論理と文法に従ったり、それと戯れたり、楽しんだり、裏切られたり、それによってもどかしい思いをしている気がします。

その一例が、「文字どおりに取る」です。文字どおりに取るとは、現実の論理を退けて言葉独自の論理に従うことでしょう。

すると「ありえない」が立ちあらわれます。

＊

月のしづく
月のシズク
月の滴
月の雫

こうしたフレーズがあります。ときどき見聞きしますが、これはありえないから美しく見えるし響くのです。

「ありえない」フレーズが人を魅惑したり打つとしたら、それはそのフレーズが、言葉の文法にしたがって書かれ（言葉の文法にしたがわなければ文フレーズは書けません）、現実の文法からしなるようにして逸れ、影の文法に寄り添っているからだと思います。

＊

月の涙

月の涙が彼女の頬を白く濡らす。

比喻、擬似法、詩的表現、陳腐、「アホか」とレッテルを貼るよりも、この「ありえない」を受け入れて、「ありえない」の魅惑に浸ってみてはどうでしょう。

言葉を楽しむのに、忖度や遠慮は無用だと思います。

「アホか」と言われれば、私はめげますけど。

＊

影が影を落とす——その光景を思いえがく。ありえないことや、ありえない姿や形、ありえない光景を思いえがく。

幼いころに歌い覚えた歌に、「もしもしかめよ、かめさんよ」があります。

月にいるウサギがカメさんに電話をしているさまを本気で思いえがいていました。いまでも、そのさまを思いうかべることができます。

ウサギといえば、勘違いの定番である「うさぎおいし、かのやま」を思い出しました。

「もしもしかめよ、かめさんよ」と違って「うさぎおいし、かのやま」は、視覚的には頭に浮かびません。でも、おかしくて、こどものころには何度も口にしていました。

いまでも、ときどきふいに口をついて出ます。漏れでる感じです。

こうした自分だけの愛おしいイメージも、影の文法に沿っていると私は思っています。

ありえない描写

この章の冒頭で、スラヴォイ・ジジェクはヒッチコックの「海外特派員」を取り上げ、チューリップ畑が続くオランダの田舎で「風車の一つが風向きと逆に回っている」ことに主人公が気づく場面に注目するのですが、次のように要約できるでしょう。

見慣れた風景（オランダの風車の並ぶ風景）に、ちょっとした特徴（風向きと逆に回っている、一つの風車）が加わったとたんに、その自然な風景が不気味なものに変わってしまう。そこには属さない場違いな、つまり何の意味も持たない細部が加わったのである。（拙文「人は存在しないもので動く」より引用）

（動画省略）

*

ありえない描写とは、言葉の世界の論理と文法に従っている描写です。現実世界とは異なる論理と文法で書かれ描かれていると言えます。

言葉を読む人は、いったんその言葉を信じないことには、読むことができません。評価、判断、否定は、後付けになります。一瞬だけでも、人は言葉の世界の「住人」になるのです。

言葉の世界ではどんな荒唐無稽も不条理も肯定されます。夢に似ています。夢ではすべてが肯定され、あれよあれよと進んでいくのです。

映画もそうですね。見ているもの（銀幕上の影です、現実ではありません）を信じないことには映画は見えません。

ヒッチコックはそのことに意識的であるだけでなく、そのことを映画という作品で具現するだけの、映画という世界での「論理力」と「文法力」を備えていた作家だと言えるでしょう。

レトリックはトリックなのです。いったん騙されないことには読めません。

【掌編小説】 落とし物

五時半が過ぎたところで、坂の上にある喫茶店を出た。外はまだ明るい。ブラックで飲んだコーヒーは美味しかったが、頭のぼんやりとした感じはまだ去らない。

夕日が影を落としている坂道をゆっくりと下っていくと、先の方に男の姿が見えた。長い影を引きずりながら坂を上ってくる。

日を背にした男の影が、長い影を従えてやってくる。

男性が苦手な私はどきどきする。できるだけ距離を置いてすれ違おうと考え、歩きつづけながらも道の端へとわずかに寄る。

坂の下から吹き上げる風のせいかわ、生臭いにおいが鼻をつく。息をとめ、目を伏せたまま、男とすれ違った。

「あとう」背後から男の声がした。「落とし物です。影を落としましたよ」

振り向こうとした私は、足元を見るわけにもいかず、かといって後ろを見る気にもなれず、息を詰めたまま空を仰いだ。

説明と描写

上の掌編ではありえない描写がありますが、お気づきになりましたか？ 話としては、影の落とし物自体がありえないのですが、そういう筋の展開という意味でなくて、描写です。

(私の描写がまずすぎて伝わらなかったら、ごめんなさい。)

描写は無視されたり、読み飛ばされる運命にあるようです。読んでいてもどかしいし、ある意味退屈だからでしょう。そこが説明との違いだと思います。

それから十年が過ぎた――。

わたしは女子高校生。

彼は娘を溺愛している。

説明はすっと頭に入るのです。「十年が過ぎた」は描写ではありません。かといって、十年間にあったことを羅列するわけにはいかないので、小説には説明が必要です。

描写ばかりの小説なんて読めたものではないでしょう。小説では、説明と描写と会話のバランスが大切だとよく言われますね。

溺愛という出来合の言葉でまとめるのも描写ではないでしょう。どんなふうに溺愛しているのかを具体的に書かないと描写ではないと思います。

執拗に細かく描写するか、要所を的確にとらえて簡潔に描写するか——。私の印象では、前者の例は川端康成だと『雪国』、後者の点描の好例は『山の音』です。

＊

いずれにせよ、描写を読むのがもどかしいのは、現実を写そうとするからでしょう。言葉と現実とは異なるし、それぞれの世界も文法（比喻です）も違ったものなのに、言葉で写そうとするのですから。

それだけに、現実を必死に写そうとしている描写は愛おしく感じられます。影に似ています。いや、写そうとしているのですから影そのものでしょう。

読み飛ばされるのは仕方ありませんが、読者の目にとまったときに伝わる描写ができるようになりたいです。

私は描写が苦手なので、優れた描写があればそれから学ぶ気持ちがつねにあります。人が書いたものでも、機械や人工知能が書いたものでもです。こちらに触れてくる描写なら出自は関係ありません。

ただし説明や成句や比喻に頼らない正確な描写でなければ尊敬できません。映像による描写に比べて、言葉によって正確な描写をするのは至難の業だと思っています。

言葉による描写が困難なのは、言葉が視覚的なものではないからです。視覚を呼び覚ますものであっても、視覚に直結していないという意味です。

要するに、視覚的ではない言葉をつかっての描写——事物や現象を写すこと——は効率が悪くて、もどかしいのです。そのため逸脱と停滞をとまいます。書く側にも読む側にも集中と忍耐が要求されます。

停滞を避けてストーリーに沿って説明するほうがずっと楽だとも言えるでしょう。いまはそうした書き方が求められている気がします。

こういうご託を並べるより精進するだけです。

作文 # 小説 # 掌編 # 影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 描写 # 文字 # レトリック # 比喻
擬人法 # 夢 # スラヴォイ・ジジェク # 映画 # アルフレッド・ヒッチコック # 風車

心が壊れないために何かにか何かを見てしまう

＊

心が壊れないために何かに何かを見てしまう

星野廉

2023年4月21日 07:51

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。

網膜、鏡面。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。

薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが。それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのは、こしらえているからではないでしょうか。

(拙文「鏡「面」画「面」顔「面」」より)

目次

目がドラマや物語の芽を生む

大きいと小さいがドラマや物語を語り始める

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かぶ

思わず「深い」とか「奥行きが感じられる」と言ってしまう

何かに何かを見て、気持ちを静める

目がドラマや物語の芽を生む

何かに何かを見る——。前者の「何か」と後者の「何か」は違います。こうなるのには何か理由があるのではないのでしょうか。

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かに何かを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。いや、むしろ「現れる」というべきでしょうか。

● ●

上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。

もし、二点が目に見えて、そこから目が見えることから顔を見てしまうとすれば、誰かに似ているとか、あるキャラクターに似ているとか、ある人形に似ているという具合に、イメージが進んだり増えたりしそうです。

連想した顔が記憶を呼びさましたり、その顔がなんらかの光景へと発展することもありそうです。

連想が連想を呼ぶ。連なる。移り変わる。動きが生まれる。関係性が生じる。

ドラマや物語の芽が生まれる。目が芽を生む。そんな気がします。

大きいと小さいがドラマや物語を語り始める

● ●

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなと子ども。人と犬。人とペット。この国とあの国。

遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。

「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

「大きい」と「小さい」という差が、ドラマや物語を始動させる。そんな気がします。

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かぶ



上の●と・をご覧ください。●が手前に、・が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

*

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景、隠れているもの、隠されたもの、というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから迫りかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、衍、エコー、

太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなっていく

向こうにあるのは何だろう、誰だろう、逃げていく、追いかけて

「おーい!」「何だーい?」「待ってくれ」、「さようなら」ー。子を見送る親、「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

*

ストーリーを感じませんか? 声が聞こえてきませんか?

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。

要するに、思いやイメージが連続して置き換わっていくわけです。

たぶん、コマ送りやバトンを手渡すように、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎ、と連なっていくのでしょう。すると、筋書き、つまり物語とドラマが生まれます。

映画や漫画やアニメのコマ送りという原理が、これでしょう。

(私は詳しくないのですが、音楽も、余韻や予感や必然性や筋をはらんだ音が、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎと連なっていく気がします。)

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かんでくるようです。平面が立体化されるとも言えるでしょう。

思わず「深い」とか「奥行きが感じられる」と言ってしまう

“水が来た。”

三島由紀夫『文章読本』「第三章小説の文章」より

「これはね、森鷗外作『寒山拾得』から引用したもので、三島由紀夫の『文章読本』で激賞されている文なんだ」

「そうかそうか、さすがに名文だね。短いけど、すごい。なんというか、こう、気品が漂ってくるのよね」、「やっぱりね。違いますよ。短いけど、そんじょそこの文章とはぜんぜん違う。なんというか、こう、文体が違います」、「分かります。そんな気がしたんだよな。言葉に独特のたたずまいがあるでしょ？　なんというか、こう、匂い立つ教養を感じるんだ」

「なるほど、深いねえ。短いけど奥行きが感じられるんだ」

*

「ねえねえ、お父さん、お隣の〇〇くんが作文でこんな文を書いたのよ」

「なにになに。『水が来た。』？ ふーん。やっぱり、小学生の作文だね。薄っぺらいし浅いんだよ」

＊

「ねえねえ、お義父さん、うちの〇〇ちゃんが作文でこんな文を書いたのよ」

「どれどれ。『水が来た。』？ おおお！ あの子は天才だ！ なんか、こう深いものが感じられる」

＊

『水が来た。』は文字からなる文字列でありセンテンスであり、日本語の表記を学んだ者であれば誰もが書き写せるし、そこそそ学んだ人がなんとか書き写すことも可能でしょう。もちろん機械に書かせることもできるし、AIが書いた文であってもぜんぜんおかしくありません。

文字には複製しても「同じ」どころかほぼ「同一」であるという驚くべき性質があります。ところが、同じ文字列の文章であっても、それを純粋にそのものとして読むことは難しく、人は必ずその文字列に何らかの印象とイメージをいだいてしまいます。

これは複製として鑑賞されるのが一般的である、絵や写真や動画や楽曲であってもそうでしょう。

誰が書いたのか、誰が撮ったのか、誰がつくったのか、誰が歌った、あるいは演奏したのかという知識で、印象が異なるのです。

純粋な鑑賞という体験（そんなものがあればの話ですけど）ではなく、教わった知識（作品の背景についての勉強を重視する人もいるでしょう）によって印象や感想が左右される点が大切だと思います。

「〇〇っぽい」や「いかにも〇〇らしい」や「〇〇のような」や「いかにも〇〇みた

い」のように。

＊

作品を鑑賞して評価を下したというよりも、たいていは知識として得た情報が作品の印象をつくる。それだけでなく、得た情報が間違いだったと言われると、手のひらを返したように印象が変わるというわけです。

「そうかあ、やっぱり〇〇だね」や「なるほど、さすがに〇〇らしい」のように。この場合、〇〇には機械や AI も、もちろん入ります。

人が AI の作品を評価するのはきわめて難しいでしょう。人類初の体験で慣れていないからです。冷静な判断ができないとも言えます。

人は何かに何かを見てしまう。そのものを見ることはできない。自分が知っているもの（知っていると思っているもの）、自分の見たいもの、自分にとって都合のいいもの、自分にとって快であるものを見てしまう。

＊

「深い」は「美しい」と並ぶ最高の褒め言葉です。私みたいなへそ曲がりでも、自分の書いたものが「深い」とか「美しい」と言われれば、小躍りして喜びます。

人は、薄い紙や画面の上のさらに薄いもの——たとえば言葉や映像——に、深さや奥行きを見てしまうのです。これは自分を観察して得た実感です。

また、たとえ見てしまわなくても、その時の乗りで「深い」とか「奥行きが感じられる」と思わず言うってしまうのです。それが人です。

何かに何かを見て、気持ちを静める

さきほどの二点をもう一度見てみましょう。

.



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

*

いや、そんなふうにはぜんぜん見えないけど。純粹に黒い丸と黒い点にしか見えない。

いや、黒い丸と黒い点には見えないけど。画素の集まりにしか見えない。

以上のような意見や感想があっても私は驚きません。人は印象の世界に住んでいるからです。印象やイメージは、人それぞれです。

*

何かに何かを見る。見てしまう。

見慣れない何かに自分の知っている（馴染みの）何かを見る。見たいもの（自分に都合のいいもの）を見る。見てしまう。

どうして、見てしまうのでしょうか。

心が壊れないためにそうしているように私には思えてなりません。自分を観察した結果、そのように思います。

見知らぬ「何か」、初めて見る「何か」ほど不気味であったり、恐ろしいものはありません。名前がないからです。そこにドラマや物語がないからです。

たとえば、その名が「怪物」や「モンスター」であっても、名前がない「何か」よりは
ずっと不気味ではないし、怖くもないです。

*

面（具象・そのもの・そこにあるもの）に立体（抽象・その向こうにあるもの・そこに
ないもの）を見てしまうとも言えます。

人がのっぺらぼうな面——意味が不在である面（無意味な面ではなく）——に、顔や
模様や奥行きや深さや遠近や背後を見てしまうのは、心が壊れないためなのです。

意味は「そこにある」のではなく、「人がそこにつくる」というのが適切な言い方だと
私は思います。「意味がある」という言い方は無意味＝ナンセンスだという意味です。

上で挙げた例で言うと、単なる点、単なる画素の集まりほど、人の心を壊すほど不気
味なものはないと言えるかもしれません。

「単なる○○」「○○だけ」の、○○には名前もなく、意味が不在でドラマも物語もな
いからです。

逆に言うと、名前と意味とドラマと物語が、人をいい意味でも悪い意味でも「深淵」
——日常空間にぽっかり空いたブラックホールのような穴——から守るのです。

*

深い

深く

深さ

深み

深い淵

深淵

ブラックホールような穴

ニーチェの言ったあの深淵

私には下に行くほど、深く感じられます。

語呂のよさや字面に左右されて、より「深い」と感じたり（つまり、上で述べた「水が来た。」のように印象とその時の乗りで「深い」と感じているだけ）、自分にとってお馴染みの安心できるイメージに置き換えて満足しているのでしょう。

それが人です。

きっと深い穴を直視して壊れたくないのです。

*

話は飛びますが、上で挙げた文字列を、ニュートラルな情報のデータとしてフラットに処理するのが、機械であり AI なのでしょう。機械や AI にとっては、深さも深みも奥行きもありません。

機械や AI は深い穴を直視して壊れることはありません。物理的に壊さないかぎり壊れないのです。

深さや深みや奥行きとは無縁の機械や AI が書いたものに、深さや深みや奥行きを見てしまうのが人です。文字だけでなく、映像や音楽でも同じでしょう。

それが人です。

ドラマ # 物語 # 意味 # 無意味 # 連想 # イメージ # 印象 # 森鷗外 # 三島由紀夫 # 文章 # 平面 # 立体

Moves Like Jagger (連想でつなぐ)

＊

Moves Like Jagger (連想でつなぐ)

星野廉

2023年4月22日 07:52

目次

動画を視聴しながらとりとめなく考える

like、似ている

似ている、同じ=同一

ミック・ジャガーの舌

翻訳、似ている、別物

仕草、表情、身振り

まぼろし、幻、影

吉田修一の作品に頻出する汗

自分を模倣する、自分が模倣される

動画を視聴しながらとりとめなく考える

(動画省略)

Maroon 5 - Moves Like Jagger ft. Christina Aguilera 2010

有名な曲ですね。リリースされたのが十年以上前ですから、いまとなっては懐かしい。

いい感じで、あれよあれよしている動画。見事な編集と構成。

それにしても、オーディションに出てくる人たちの動きと顔芸がすごい。よくぞこれだけの逸材を集めました。「似ている」大好き人間の私は、あれよあれよと見入ってしまい、気がつくと終わっています。

like、似ている

Moves Like Jagger、ミック・ジャガーのような動き、ミック・ジャガー風の振り。魅力的なタイトルです。

You want the moves like Jagger

I've got the moves like Jagger

I've got the moves, like Jagger

この like の語源を調べてみると、古英語で「～の体（形）を備えている」とあり、そこから「似ている、等しい」となったとあります（ジーニアス英和辞典）。形容詞の alike もあります。look-alike という名詞だと「そっくりなもの」とか「そっくりさん」という意味になりますね。

辞書でこういう語義や説明を読むだけでぞくぞく来ます。「似ている」や「そっくり」に目がないのです。

英和辞典は、日本語で単語の意味が書いてあるではありません。訳語集です。ということは、英語の単語を見出しに、日本語での「似ている」と「そっくり」さんが一堂に会している場と言えます。

似ている、同じ＝同一

「似ている」は目まい感をもたらします。目まいではなく、目まいに似ている目まい感ですから、心地よいです。同じや同一は——なにしろ本物であり実物ですから——緊張をもたらすことがあります。似ているは優しく包みこんでくれます。ほわっとしたものが「似ている」なのです。

(動画省略)

同期するメトロノームたち。

身振りは似ていても、あるいは同じであっても、各メトロノームは同じではない。同じ＝同一は、この世に一つしか存在しない。その意味で、メトロノームたちは同じではなく似ているのだ。

それぞれがそれぞれとしてある、またはいる。それぞれがそれ自身にそっくりなのだ。そっくりな点がそっくりなのである。

自分自身にそっくりという意味なら、同じとか同一と言えるのかもしれない。似ている、似た身振り、仕草、顔、表情が世界にあふれている。

その身振りを読む。あるいは、なぞる、真似る、まねぶ、学ぶ。または、うつす、写す、映す、撮す、移す、遷す。そうやってふえる、増える、殖える。

世界は顔で満ち満ちている。

ミック・ジャガーの舌

ところで、このPVが動画が始まってまもなく0:34あたりからミック・ジャガーのインタビューのカットが流れます。ときおり唾で濡れた舌先を出して唇を湿らすところを見るたびに、村上龍の『コインロッカー・ベイビーズ』の一シーンを思い出します。「そうか、あの舌が……」と。

ミック・ジャガーの逸話を真似たハシが舌先を鉏で切断する場面があるのです。講談社文庫の旧版（新装版ではありません）では下巻のp.67からp.69の半分までですから、一シーンとしてはかなり長いのですが、細かな描写と説明が続きます。

内容が残酷なのにもかかわらず詩的かつ正確な文章です。何度読んだか知りません。読むたびにその描写のうまさに感心して、うなってしまう自分がいます。

その一部を引用します。残酷なところはカットします。

"ハシはある実験をしようとしている。昔何かの本で読んだ。ローリングストーンズの本だ。ある偶発的な事故の後、ミック・ジャガーの声が変わった。その事故以来ミック・ジャガーはあの官能的な声を獲得した。その事故をハシは再現しようと思う。まず道具を並べる。(.....)

もう一度舌を伸ばす。目を閉じると体中が舌になったような感じだ。鋏をいっぱいを開いて舌先を挟む。冷たい刃に触れると火傷の痛みが薄れた。小さい頃乳児院でシスターに読んで貰った童話に舌を切られる雀の話があった。(.....)"

村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』下・講談社文庫(旧版) pp.67-68・丸括弧は引用者

"He had a little experiment in his mind. He had read somewhere that Mick Jagger's voice had changed drastically after an accident he'd had, that it was actually only after this accident that he'd developed his peculiar, supersensual voice. Hashi decided to arrange the same sort of accident for himself. First he assembled his tools: [...]"

He stuck his tongue out again. When he shut his eyes he felt that his whole body had become a tongue. Opening the scissors as wide as they would go, he put the tip of his tongue between the blades. The cool metal soothed the burn. Among the stories the nuns had read him when he was a child at the orphanage was one about a sparrow. [...]"

(新装版) 英文版 コインロッカー・ベイビーズ(講談社インターナショナル) Stephen Snyder 訳 pp.261-262

日本の小説の英訳を読みながら原文の日本語を再現しようとしたことがあります。翻訳家を志していた頃の話です。文章修行のつもりでやっていました。いちばんよくやったのが、『英文版 コインロッカー・ベイビーズ』をつかっての逆翻訳です。

好きな部分を段落ごとに英語から日本語に訳して行って原文と対照するのですが、その度に村上龍の描写力に驚嘆して自分の力不足に意気消沈したのを覚えています。この小説の文章は私にとって、いまも行き詰まった時に参照する規範であり続けています。

みなさんも、お好きな日本の作家の英訳で試してみませんか。一冊まるごとやると大変なので、好きな箇所だけやるのがコツです。大げさな言い方になりますが、言語観や日本語観が変わりますよ。たとえば「村上春樹 英訳」みたいに検索すると、英語訳のリストにたどり着けます。

なお、舌——薄くてべらべらした舌については、以下の記事に詳しく書きましたので、興味のある方はぜひご覧ください。

翻訳、似ている、別物

翻訳という作業も「同じ」ではなく「似ている」を作る行為です。原文と翻訳を対照すると、似ているけどどこか違うなあと感じたり、ときにはまったく別物に感じられることもあります。ある作品の邦訳が複数ある場合には、その翻訳を読み比べると面白いのです。

昔の話ですが、ジェイムズ・M・ケイン作の『郵便配達はいつもベルを二度鳴らす』(または『郵便配達はベルを二度鳴らす』)という邦訳が、田中西二郎訳、田中小実昌訳、中田耕治訳、小鷹信光訳の四種類も楽しめた(つまり本屋に並んでいた)時期がありました。原著なしで日本語訳だけを四種類読み比べましたが、わくわくするような体験でした。若くなければできない冒険だったといまになって思います。

J・D・サリンジャーの『ナイン・ストーリーズ』(または『九つの物語』)もいくつかの訳本がありました。この作品は野崎孝による邦訳しか読んだことはありません。現在は柴田元幸訳もあるのですね。いつか柴田訳を読みたいです。

仕草、表情、身振り

上で挙げた Like Jagger ft. Christina Aguilera の動画では、ミック・ジャガーがなかなかセクシーな表情を見せてくれますね。気になったので、元のインタビュー動画を探してみました。

以下の動画らしいのですが、タイトルに、1965 とあります。私はまだ小学生でした。その息の長い活動に驚かされます。

あらためてミック・ジャガーのインタビューに見入っていたのですが、ときおり唾で濡れた舌先を出して唇を湿らす表情というか仕草。あれを見ていて既視感を覚え、それが何か思い出せなくて気になりました。

で、思い出したのですが、以前に抗うつ剤を服用していた時期に、やたらに喉の渇きを覚えて、よくこんなふうに口を閉じて唾を飲むような仕草をし、口の中を潤していたことがありました。

いまでもたまにそういう人を実際にあるいはテレビで目にすると、薬の副作用で喉が渇いているのではないかと要らぬ心配や想像をしてしまうことがあります。

人の表情や身振りや仕草や動きが、ある特別な意味を持った記号のように感じられるのは興味深いし、ある意味どきどきします。

表情も目くばせも身振りも仕草も動きも、言葉。広い意味での言葉。何かのメッセージを送ってくる。何かを連想させる。遠い記憶を呼び覚ます場合もある。そんなふうに感じます。

一言で言うと「交感」です。二言で言うと「交感」と「共振」です。交わり感じて共に振れるのです。

＊

以下の動画（1969）もインタビューのものなのですが、カラーであるために、ミック・ジャガーの表情がリアルに迫ってきます。

私が注目するのは唇の動きです。別の生き物ように感じられて、知らず知らずのうちに魅入られてしまう自分がいます。ときどき歯の間から出る舌にも目が行ってなりません。

＊

上の1965年の白黒の映像と1969年のカラーの映像を見ていると、白黒のほうが月光の下にいるミック・ジャガー、カラーのほうでは日の光の中にいるミック・ジャガーに見えてきます。

こうしたコントラストを目の当たりにすると、写真も映画もテレビやパソコンやスマホ画面の映像も幻（まぼろし）であることを思い出さずにはられません。

*

上の動画を見ていて、ふと思いだしたのですが、アート・ガーファンクルのお口と舌がお好きな方には、以下の記事（「Lに似せられた作家」）をお薦めします。

(記事へのリンク省略)

まぼろし、幻、影

幻、月幻、日幻、電幻、幻影、影。

まぼろしは似たものであり、影だと気づきます。影ですから、そのものではありません。同じでもありません。言葉と同じです。いや言葉と似ていると言うべきなのかもしれません。

私たちは、まぼろしである影（映され写されもの）に、囲まれて生きています。

とりわけ、実物と現物のない複製の複製と、起源のない引用の引用に満ちた現在の世界は、「本物」や「本当」や「同じ」や「同一」とは出会えない状態が常態化しています。複製と引用物を手にしたり耳にしたり眺めながら、抽象（観念）として思い描くしかないのです。

抽象が「本物」を忠実に「反映」あるいは「投影」しているかどうかは過酷な賭けなのであり、それがまばらでまだらな「幻影」である可能性のほうが高い気がします。

抽象が「本物」を忠実に「反映」あるいは「投影」しているかどうかは過酷な賭けなのであり、それがまばらでまだらな「幻影」である可能性のほうが高い気がします。

現在の人は「本物」や「本当」や「同じ」になかなか出会えないために、「似たもの」つまり影に魅惑され取り憑かれ嗜癖し、「似たもの＝影＝複製の複製＝引用の引用」をさ

らにせつせと生産しつづけるという悪循環におちいつているかのようです。

エスカレートしていくさまは、自暴自棄にさえ見えます。

吉田修一の作品に頻出する汗

この曲について、もう一編の小説を思い出します。吉田修一の『怒り』です。冒頭近くで、鎌倉海岸の特設ビーチハウスで行われるイベントの風景が出てくるのですが、ダンスフロアでかかるのがこの曲なのです。中央公論社の単行本から引用します。

”（前略）上半身裸の胸や背中はずでに潮風と汗と砂でベトベトになっており、やはり上半身裸で踊っている男たちの間をすり抜けるたびに体が密着し、相手の汗と体温が伝わってくる。

曲がマルーン5の「Moves Like Jagger」に代わり、優馬は足を止めた。去年もこのイベントのラスト近くでかかり、盛り上がった曲だった。”

（吉田修一著『怒り 上』中央公論社 p.38）

こういう場面を読むと既視感を覚えずにはられません。この既視感が吉田の書いた小説群の魅力でもあります。吉田修一の小説では人がやたら汗をかきます。読んでいてかなり頻繁に汗の描写が出てきて目立つのです。

吉田修一の作品における汗というテーマで論文が書けそうなくらいです。吉田修一はある時期まで、全部読んでいました。吉田修一論を書こうと思っていたほどです。長編では『怒り』と『パレード』、短編集では『熱帯魚』と『女たちは二度遊ぶ』が好きです。

『怒り』は映画化されていますね。映画でも汗が噴き出ます。汗、汗、汗。そして水もよく出てきます。「吉田修一と水」というテーマで長い記事が書けそうです。

私は吉田修一の小説が大好きです。吉田修一の小説については、以下の記事（「似ている」の魅惑）で引用をまじえて論じているので、よろしければお読みください。

（記事へのリンク省略）

自分を模倣する、自分が模倣される

話を Moves Like Jagger に戻します。

YouTube で検索していてすごいと思ったミック・ジャガーのダンスというか moves の映像集を、以下に紹介します。かっこいいですね。動きが美しい。

かつてのグループサウンズや日本のロックグループのメンバーには、ミック・ジャガーの模倣から始めた人が多いという話は本当だと感じました。

(動画省略)

ああ、これは「〇〇」に似ている、と思った映像がいくつもあります（私は音楽もダンスにも無知なので、げすの勘ぐりにちがいませんけど）。

話は逆で、「〇〇」がジャガーを真似たのでしょよね。模倣されるのは、偉大なアーティストの宿命でしょう。

*

アーティスト——歌手や演奏家だけでなく小説家や作詞家や作曲家や美術作品の作家をふくむ広い意味での芸術家——が自分のスタイルを作りあげていく過程で、「他人を模倣する」（立場を変えれば「自分が模倣される」）だけでなく、「自分を模倣する」もあるのではないのでしょうか。

先行する他人のパフォーマンス（演技や演奏）や作品を模倣するだけでなく、過去の自分自身のパフォーマンスや作品を模倣するという意味です。自分自身の模倣の場合には更新とも言えるでしょう。

絶え間ない自己更新をしていかなければならない（他人ではなく自分が相手＝ライバルなのです）ことが、広義のアーティストの宿命なのかもしれません。

ミック・ジャガーがその moves =動き=振りを自分で作り出していったのか、先行する誰かの振りを真似たのか知りませんが、彼のパフォーマンスを映した数々の動画を見ていると、変容を重ねている動きが一つの身体から自然に出てきている、つねに試行錯誤=自己更新を重ねているようにも感じられます。

以下の動画「Mick Jagger on his signature dance Moves (Where Mick Jagger Got the Inspiration for His Famous Dance Moves)」は、ミック・ジャガーの moves = moves like Jagger を考える上でヒントになりそうです。

(動画省略)

#音楽# 小説# 読書# 映画# 洋楽# 村上龍# 吉田修一# 翻訳# マルーン5# ミック・ジャガー# 鏡# 影

色のない景色

＊

色のない景色

星野廉

2023年5月10日 07:45

目次

「景色から色が消える。」

味気ない、色褪せている、気持ちが動かない

文字列を引き算してみる

足し算してみる

「景色から色が消える。」

フォロワーのゼロの紙さんの言葉を、以下に引用します。

景色から色が消える。

色は認識できるのだけど、世界は

変わってしまったのだなど。

ゼロの紙「誰かの記憶になって生きるということ。」2023/03/29 より

ゼロさんの記事で上の文を読んだときに、「景色から色が消える。」の「色」とは意味なのではないかと思いました。

世界は見えている、おそらくはっきり見えている。それなのに「色」がない、色が感じられないとすれば、それは世界から意味が消えているのではないのでしょうか。

＊

「景色から色が消える。」を文字どおりに取ってみましょう。「景色」という文字列から「色」という文字を消してみます。すると「景」が残ります。

「景」は「かげ」とも読めます。影と同じく「すがた・姿・かたち・形」という意味があります。「目に映るもの」とも言えるでしょう。

ゼロさんの文章では「世界」です。「かげ」としての世界。事物の「かげ」だらけの世界。

色は認識できるのだけど、世界は
変わってしまったのだなど。

ゼロの紙「誰かの記憶になって生きるということ。」2023/03/29 より

「色は認識できるのだけど」とあるように、「景色から色が消える。」の「色」は視覚的な意味の色彩ではありません。

「色」には色彩だけでなく、「おもむき・趣」や「うつくしさ・美」などの意味がありますが、私は目に映る物の姿や形に加わる「何か」だと、とらえています。「何か」とは意味です。

以下は、ゼロさんの記事について私が引用リツイートという形で、コメントしたものです。

「景色から色が消える。」というゼロさんの言葉は、きわめて危うい心境を感覚的かつ簡潔に言いあらわしていると思います。色の消えた世界は「かげ」の世界です。陰画（ネガ）のように。

ゼロの紙さんの「誰かの記憶になって生きるということ。」という文章では、語り手の言う「色」が「母の記憶」へと変奏されて、それが感動的な展開を見せます。

これ以上私が語ると、この詩的な文章の素晴らしい展開を散文的な言葉で説明することになるので、続きはどうか記事をお読みください。お薦めします。

味気ない、色褪せている、気持ちが動かない

世界が見える。物の形と姿ははっきり見えていて、おそらく色も見えている。それなのに色が感じられない。ちゃんと周りの様子は見えているのに味気ない、色褪せて見える、見えているものに対して気持ちが動かない――。

そうした世界に欠けているものは意味だと思います。

人は何かに何かを見てしまう生きものです。前者の何かは「世界」、後者の何かは「意味」だと考えてみましょう。

意味は世界に「いろどり・色取り・彩り」を添えるものです。「いろどり」とは、見る側の視覚が機能しているだけでは感じられるものではないと思われます。心が動かないと感じられないものでしょう。

わくわく、どきどき、あらまあ、えっ、わあーっ、すごい！、げーっ！、何これ？、なんと！、嫌だ、こわっ、言葉にならない、……、――、！？

たとえば、こうしたものが「いろどり」ではないでしょうか。心が動いている「しるし」なのです。

一方で、色ばかりが目について形や姿が見えないという場合もありそうな気がします。有頂天とかエクスタシーと呼ばれる境地です。色が見えないのは悲しいですが、見えすぎるのも困りますね。

文字列を引き算してみる

心が動いている「しるし」とは、どんなものでしょう。

景色 - 景 = 色

たとえば、色です。上で述べた「いろどり」のことです。声に色がある、色を添える、の色。

光景－景＝光

光です。光の感じられない世界を想像してみてください。物理的な意味での光ではありません。見えているのに光が感じられない世界というイメージでの光のことです。

情景－景＝情

情です。まさに心の動きです。情動という言葉がありますが、emotion のことらしいです。エモい (emotional) のエモ。これがない人生は色褪せて味気ないでしょう。

風景－景＝風

風情がある、風通しがいい (悪い)、新風が吹く、風向きが変わる、という言い回しに見られる「風情」のことです。風情に似た意味の言葉に、風趣、風致、風韻があるそうですが、どれもが風味のある文字であり言葉ですね。私は「風味」に意味に近いものを感じます。

いま見える景色から色や光や情や風の消えた世界を想像してみてください。きっと味気ないでしょう。

足し算してみる

逆に言うと、目に映った世界の「かげ・すがた・かたち」である「景」に何か加わるとそれが「いろどり」になるのです。

景＋色＝景色

景＋光＝光景

景＋情＝情景

景＋風＝風景

景（かたち・すがた）に何か加わる。人は何かに何かを見てしまう。世界に意味が添えられる。

物の形や姿がはっきりと見えているのに色や光や情や風のない世界を想像してみてください。心の動いていない世界ではないでしょうか。

意味は世界を豊かにしてくれるようです。もちろん、いい意味でも悪い意味でもです。良いも悪いもあるのが世界なのですから。

（投稿：2023年5月10日 07:45）

#ゼロの紙さん #色# 彩り # 景色 # 意味 # 光 # 情 # 風

そっくりなのは、そっくりにつくってあるから

＊

そっくりなのは、そっくりにつくってあるから

星野廉

2023年5月15日 08:16

目次

言葉の不思議

文字が入る、何かが移ってくる、乗っ取られている

音声が入ってくる、一瞬変になる、震える

表情や身振りが入ってくる、ダイレクトに感じる

人のつくった影が入ってくる、めっちゃ気持ちいい

そっくりにつくってあるもの、そっくりに見えるもの

まとめーそっくりな影たち

言葉の不思議

私は言葉を広く取っています。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、表情と身振りも含めています。こうした言葉たちとそのありようを観察することが趣味なのです。

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉については、こんなイメージを持っていますが、イメージですから個人的な印象です。

以前から、不思議でならないことがあります。話し言葉と表情と身振りが、発せられると同時に片っ端から消えていくのに対し、書き言葉だけが残ることで。当り前のようですが、考えれば考えるほど、不思議です。いったいどういうことが起きていて、そう見えるのかが不思議なのです。

この不思議さは、言葉が発せられる、放たれる、つまり人から出ていくときの不思議さなのですが、今回は言葉が人に入ってくる時の不思議さについて考えてみたいと思います。

不思議だと思うままに、あれこれ考えながら言葉をつづっていくという方法を取ります。こういう見切り発車を書くときの私の癖なのです。

文字が入る、何かが移ってくる、乗っ取られている

「何か」に「何か」を見てしまう。

文字や文字列や文章を見て、それを読むときには、人は「何かA」に「何かB」を見てしまっている気がします。「文字」と「その文字で人が見てしまうもの」はふつう似ていません。まして同じではありませんが、その異なる二つのものが、人においては同居しているのです。

「猫・ネコ・ねこ・neko」という文字をご覧ください。みなさんが、この文字を見て、頭に浮かべたものと似ていますか。似ていないのに、見てしまう（思いえがくとか思いうかべるとか呼びさまされる）のです。

不思議ですよ。文字を学習した成果だと言われれば「ああ、そうですね」と納得する自分と「えっ、どういうこと？」と納得していない自分がいます。

これは、話し言葉や表情や仕草でも言えることのようなのですが、文字の場合には、人の外にあって残っているものですから確認しやすい点が、特徴的です。人の外にあって残っているのに、他の人といっしょに見て確認できるという意味です。すごいですね。不思議です。

*

文字からなる文章を読むとき、人は一種の催眠状態におちいつているのではないかと。

一時的に変な状態になっている、何かに乗っ取られている、何かが移って生きている。自分の催眠状態と変な状態を柵に上げて、そんな不穏なイメージをいただきます。

音声が入ってくる、一瞬変になる、震える

信じる時、人は一瞬あるいは短時間、自分を何かにゆだねます。心ここにあらず。目は宙を見ている。思考停止、判断停止。営業停止。忘我。頭の中が真っ白。言葉になんねー。

(拙文「信じる時、人は一瞬変になる。」より)

話し言葉である音声が入ってくるとき、人は何かに自分をゆだねて、どこかに行っている気がします。音声はすぐに消えますから、一瞬とか短時間のことです。

音声には有無を言わせないところがあります。文字の場合には見たくなければ、顔をそむけたり、目を閉じればいいのですが、耳はそう簡単にはふさぐことができません。

聞きたくなくても聞こえてしまうのです。有無を言わずに入ってくるとも言えるでしょう。不思議です。こうやって言葉にすると、分かったような気持ちになるのですが、ぜんぜん分かってなんかいないのです。不思議でなりません。

やはり音声である、音楽をイメージするとリアルに感じられそうです。音楽は否応なしに入ってきます。どうしても堪えられなくなったら、その場を去るしかなさそうです。

ぐいぐい入ってくる。これが音声の特徴ですが、入ってきたときには、頭だけでなく体に、こう、ぐっと来ませんか。大げさに言うと、震えるのですが、音声は波だと実感します。

*

話し言葉としての音声には語義（意味）があります。文字で書けば「猫・ネコ・ねこ・neko」ですが、訛りや発音や発声の個人差を除けば、同じ音として入ってきます。

この音で、聞いた人が何をイメージするかは、文字の場合と同じく、確認できません。何をイメージしたかを言葉（とくに文字）にして報告するしかないという意味です。入ってきた言葉が、中でどうなっているかは、言葉でしか確認できないのですが、変なというか不思議な話です。

*

言葉が中に入るとき、人はいったん（一瞬）その言葉を信じます。信じないと受けとめられないからです。「馬鹿！」と言われて、「馬鹿！」と一時的に言われたことを信じないと反論も批判も泣き寝入りもできないという意味です。

いったん入ってきた言葉を信じてから、事後処理として反論とか否定とか泣き寝入りが生じます。

「馬鹿！」（と言われる）

⇒ 「はいはい、そうですね」（いったん信じる）

⇒ A 「いや、やっぱり、そんなことはない」（否定する）、または、B 「はいはい、やっぱり、そうだよね」（再認識する）、または、C 「ふーん」（面倒だから取り合わない）、または、D 「……」（言われたことを忘れる）

いずれにせよ、太文字の部分スキップするわけにはいかないのです。たいていは、CかDのリアクションに落ちつくでしょう。誰もが、情報処理に忙しいからです。

ほとんどの場合、言葉が入ってきても、中ですぐに消えるのですが、これは人とその身体に備わった「知恵」です。さもないと体と心が持ちません。だいいちヒトの情報処理能力と保存（記憶・記録）する容量は、各人が想像しているより、はるかに小さいようです。

表情や身振りが入ってくる、ダイレクトに感じる

表情や身振りは視覚言語（手話も含まれます）と呼ばれることがありますが、おもに見て受けとります。

話し言葉と書き言葉との決定的な違いは、表情と身振りは生まれたての赤ちゃんの中にも入ってくるという点です。すごすぎます。不思議ですね。考えるとわくわくドキドキします。

*

赤ちゃんを見ていると意味と無意味について考えずにはられません。赤ちゃんの表情や仕草や声が信号に感じられるからです。信号というのは、前提として意味やメッセージを想定しているわけです。つまり、はらはらドキドキです。

しかも点滅してあおることもあります。この泣き声はおむつを替えてほしいなのか、お乳がほしいなのか、どこかが痒いのか、痛いのか、暑いのか、それとも熱いのか？
こんなふうに解釈ごっこになります。

初めてのお子さんだと心配でしょうね、不安でしょうね。解読地獄におちいる場合もありそうです。

でも、赤ちゃんとお母さん、お父さん、その家族の人たちの様子を見ていると、赤ちゃんの発するあらゆる信号をつねに正しく受けようとしているわけではないのに気づきます。

受け流しているように見える場合がよくあります。ほほ笑みにほほ笑み返す、ほほ笑みにしかめっ面をしてみせる、ほほ笑みをただ眺めている。泣いても知らん顔。

それだけでいい。そこにいて笑みを浮かべているだけでいい。そこで泣いているだけでいい。そこにいるだけでいい。

信号は解読すべきものではなく、ただそこに「いる」という、おおらかでおおまかな印として、そこに「ある」かのように見えます。

ただ「いる」という信号として、ただ「ある」だけ。

意味はそこにあるというより、人の中にあるのでしょうか。世界が意味だらけなのではなく、人の中が意味だらけなのでしょう。人は自分の中でたちさわぐ「意味の立ちあられ」を静める術を心得ているようです。

(※以上は、拙文「意味が立ちあらわれるとき」から引用しました。)

＊

意味と無意味のはざまにいることも可能だという意味で、表情や身振りにはダイレクトに人に「何か」を感じさせる力があると言えそうです。

ダイレクトというのは、いわば無媒介的に表情が表情を、身振りが身振りを誘発する、つまり受け手が相手の表情と身振りを模倣する（「なぞる」）という意味です。

相手の動き（表情も動きです）に合わせて、こちらも心や頭の中で——あるいはじっさいに——動くと言え、お分かりいただけるでしょうか。

身体的レベルでの「うつる」と「伝わる」が起きるのです。必ずしも「通じる」わけではありません。なぞってうつるのです。「何か」が伝わることは確かでしょう。この伝わり方をプリミティブと言う人もいそうです。

その伝わる「何か」は各人の中で起きていることですから確認できません。確認するためには、やはり言葉にして報告するとか説明するしかなさそうです。

身も蓋もない言い方になりましたが、じっさいにはそんなことはありません。みなさんの中で起きていることです。ご自分の日々の体験を振りかえってみてください。

というか、いまも、その「何か」があなたの中で起きているのです。

人のつくった影が入ってくる、めっちゃ気持ちいい

ここで、人のつくった影も、言葉のように人の中に入ってくることに気づいたので、取りあげます。

人のつくった影とは、写真、絵、映画、映像、動画をイメージしてください。ぜんぶ、「うつる・うつす、映る・映す、写る・写す」の産物です。広く取ると本や絵本も入りますが、上で取りあげた文字がからんでくるので、ここでは無視します（いつかもっと体調のいいときに考えます）。

＊

つくられた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。映画であれば時間的な枠もあります。上映時間というか作品の時間です。

つくられた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとはつくられたものです。物語であり、フィクションのことです。だから、わくわくするのです。ときどきもするのです。ぞくぞく、あらら、という感じです。

人はこのわくわくときどきぞくぞくを求めて、自分たちのつくった影を自分の中に入れます。入れるとめっちゃ気持ちいいからという単純な話に落ちつきます。

このあたりの話は、拙文「意味のある影、意味のない影」の一部を引用したので、興味のある方は、お読みください。

＊

ところで、人のつくった影は、どうして、入れるとめっちゃ気持ちがいいのでしょうか？

入れるとめっちゃくちゃ気持ちよくなるように「つくってある」からにはほかなりません。人のつくった影の、文字や音声（人がつくったというよりも備わっている）に比べての大きな違いは、それです。

「猫・ネコ・ねこ・neko」という文字は猫に似ていますか？ 「猫・ネコ・ねこ・neko」と発音したときに出てくる音声は猫に似ていますか？ ぜんぜん似ていませんよね。

それに対し、「猫・ネコ・ねこ・neko」に似せて「つくった」影は、似ています。どうか、たいてい「そっくり」なのです。絵、写真、映画、ネット上の静止映像や動画は、ふつう猫にそっくりにつくられています。

複製、似せたもの、似たもの、似せもの、偽物——お好きな言い方を選んでください。共通点は「別物」だということです。現物や実物ではないという意味です。

でも、「似ている」し「そっくり」なのは、そうつくってあるからです

そっくりにつくってあるもの、そっくりに見えるもの

「そっくり」に見えるのは、それに愛着を覚えないからだという場合もあります。「そっくり」な点に関心があっても、そっくりではない点、つまり個性はどうでもいいのです。

「そっくり」を感じているときの人の眼差しは残酷だと言えます。差別し排除しているからです。しかも排除しているものが見えていません。

人はそっくりなものに囲まれて生きていますが、そっくりなものは二つに大別できます。人が「そっくり」につくったものと、人の目に「そっくり」に映るもの（自然界にいるもの、あるもの）です。

*

人がそっくりにつくったものが並んでいるさまは壮観です。一方、人の目に「そっくり」に映るから並べられているものたちのありようには、人を一瞬すくませるものがあります。

スーパーに並んでいる製品たちと、スーパーで並べられている生きものたちの遺体を思いうかべてください。

後者を目にして一瞬すくむのは、無言で並べられているものたちに一瞬命を感じるからにちがいありません。そっくりに見えるというのは、感情も命も無視されているという意味なのです。だから並べられるのです。

飼育されている動物たち（囚人）、スーパーで並べられている魚たち（ご遺体）はどれもそっくりに見えませんか？ 私にはそっくりに見えます。

人も——生きている場合も生きていない場合もあります——ずらりと並べられることがあります、そんなときの人びとはそっくりに見えます。一部の人たち——たいてい上（トップ）にいます、たった一人の場合もありますね——によって感情と命を無視されているからでしょう。その無視は感染します。上から下へと移るのです。

「そっくり」は恐ろしいのです。

*

ところで、似ている（印象）と同じ（同一）は違います。

私たちは「似ている」の世界にいますと言えそうです。器具や器械や機械をつかわないと「同じ（同一）」を確認できないからです。

人は「似ている」という印象の世界（見える世界）から「同一（同じ）」の世界（観念の世界）を夢見ているのかも知れません。

とりわけ、工学や自然科学、そしてメタ指向（思考ではありません）が強く、それがオブセッションになっている哲学は、「同一（同じ）」の世界を夢見ている気がします。

このうちで、ある程度うまく行っているのは工学でしょう。コンピューターや重機や電気メス、そしてミサイルは「同一（同じ）」の世界に頭を突っこむことなしには（体は突っこんでいませんけど）動かせないからです。

まとめーそっくりな影たち

人類および個人という意味でのヒトの言葉とのかかわりを、時系列でまとめてみましょう。

狭い意味での言葉（話し言葉と書き言葉）を持つ以前の段階では、ヒトにとって表情や身振りが言葉であり（ほんまかいな）、ある意味ではダイレクトに（うさんくさい言い方でごめんなさい、私もうさんくさいと思います）世界と触れあっていたのかもしれない。

やがて（適当な言葉ですね）、話し言葉を持つようになり、見よう見まねで言葉を身につけ、ヒト同士でつかようになった（まるで見てきたような嘘）。話し言葉をヒト以外の生き物や森羅万象にまで当てはめる（拙文「【戯言】あなたと呼びかけて手なずける」）ようになった（文字どおり戯言です）。この辺から変になり、ぶるぶる震えることを覚えます（嘘つけ）。

なぜか（いい加減ですね）、書き言葉を持つようになって、もともとヒトに備わっていた「何かに何かを見る」に拍車がかかり、何かが移ってくる、何かに乗っ取られるという事態が生じ（もー、勝手にしてください）、ヒトは言葉の世界に生きるようになります。

上記の過程で、ヒトは世界や森羅万象に似ていたり、そっくりな影（映したり写したもの）をつかって、「そっくり」を楽しむ快樂を覚えました。現物や実物や「そのもの」にたどりつけない代償でしょう（※註あり）。自分のつくった影を見て、めっちゃ「気持ちいい」状態になるという自己完結的な快樂です。

【※註：「現物や実物や「そのもの」にたどりつけない代償でしょう」とは、「移る・移す」（移動する・させる）ことができないから、その代わりに「映す・映る」と「写す・写る」で済ますという仕掛け（機械）＝仕組み（システム）＝手品（錯覚製造装置）をつくったのです。絵、文字、印刷、電話、映画、動画、インターネット、要するに複製（「似ている」と「そっくり」）の製造とその拡散のことです。】

その快樂にヒトは嗜癖し依存して、いまに至ります。

分かりやすく言うと、「あそこ」「あれ」「なに」（何なのかは人それぞれですが、これまでもっともたくさん描かれ写され映されてきた対象でしょう）の代わりに「あそこ」「あれ」「なに」の絵や写真や画像で萌えるようにと、ヒトは進化したのかもしれませんが。（※「あそこ」「あれ」「なに」については、拙文「【小話】短い反対は長いではないという話」が詳しいです。）

ほら、世界は、人のつくったそっくりな影たちに満ちています。印刷物もネット上の映像も、そんなんばかりです。

＊

人は、影だけでなく、「そっくりなもの」に囲まれて生きていますが、上で述べたように、「そっくりなもの」は人のつくったものと、自然界にいるもの（あるもの）の二つに大別できます。

前者は気兼ねなく消費できますが、後者の場合にはその自由や命を奪わなければ消費できないので、人はある程度の後ろめたさを覚えます。

そんなわけで、人が「そっくりなもの」をせっせと量産するのは理にかなっていると言えるでしょう。「そっくりなもの」は自分でつくったほうが——つくったものには感情や命がないので——心置きなく利用したり消費できるという意味です。

＊

いまや人は、「似ている」の世界というよりも、「そっくり」の世界に生きているかのようです。この世界では何にそっくりなのかが不明になっているどころか、しだいに問題にされなくなっています。真偽の境も曖昧だし不明です。それが急速にエスカレートしています。

そっくりな点だけがそっくりなのです。目にし耳にし舌であじわい肌で感じているものの多くが、複製の複製の複製……なのです。一方で、目にし耳にし舌であじわい肌で感じているものの多くが、複製として残され続けているのです。

食べるよりもそっちのほうが気になって忙しい。景色を見るよりもそっちのほうが気になって忙しい。人と時間をいっしょに過ごすよりもそっちのほうが気になって忙しい。生きるよりもそっちのほうが気になって忙しい。

そっちというのは、そっくりをつくって保存すること。

文字にして、映像にして、音声にして保存するほうが大切。生きるより大切。

ひょっとして、そっくりに乗っ取られるのではないのでしょうか。

誇張でしょうか。妄想でしょうか。この時点でも、見たり聞いたり嗅いだり味わったり触れたりして楽しむものが複製にされつつありませんか。どんどん映像や音声や文字としてネット上で投稿・配信され、ほぼ同時に保存・拡散されていませんか。

撮る。つまり、映す、写すです。撮影（影を撮る）の「撮」は、手元にある漢和辞典によると親指と人さし指と中指の三本でつまみとることだとか書いてあります。

この三本の指ってよく使いませんか。これだけあれば操作も入力もできます。世界中で、この三本の指をつかって「そっくり」なことをしています。これも、そっくりにつくってあるからに他なりません。機械がそうつくられているのです。

指三本でパネルをタッチして撫でまわす世界。タップ、フリック、スワイプ。世界を操作するのは簡単。世界は手のひらに乗る。世界はちょろい。

複製としての世界。そっくりとしての世界。世界にそっくりな世界。いや、気分は世界そのもの。世界はちょろい。世界は自分のもの。

そっくりなのはそっくりにつくってあるからでしょう。何にそっくりなのかはもはや不明。そっくりだけが空回りしている——。複製の複製の複製……。引用の引用の引用……。本物と実物のない複製。起源のない引用。

人は自分のつくったものに合わせて、そっくりなことをこの星じゅうでやっている。みんなが一樣にうつむいて、手のひらの上の板を指で撫でまわしている。空は見ない。天

に用はない。手のひらに空がある。天がある。うつむいている限り、怖いものはない。

そっくりはうつるのです。うつるんです。そう考えると、そっくりは恐ろしい。

なんでそんなことをやっているのでしょうか。気持ちいいからでしょうか。気持ちいいというよりも、やめられなくなっているのではないのでしょうか。嗜癖です。脳内なんとがどぼどぼ分泌。

妄想でしょうか。もうそうかもしれませんよ。

※この記事は拙文「中に入ってきたときに、中で起きること」に加筆したものです。言葉（意味・複製）が人の中に「入る・出る」——といったことに関心が出てきたので（現にPCやスマホを使用しているいまも「入ったり出たり」していますよね?）、ここで一度過去の記事を読みかえしたうえで、新しい記事を書こうと思います。

（投稿：2023年5月15日 08:16）

#複製 # 似ている # 偽物# 言葉 # 話し言葉 # 書き言葉 # 文字 # 表情 # 身振り # 影

本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ

＊

本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ

星野廉

2023年5月26日 08:13

移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。

というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。

(拙文「うつすためには、うつらなければならない」より)

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂は、伝わり、移り、届き、通じます。

でも、おそらく、伝わらないし、移らないし、届かないし、通じないものがあります。

表情、身振り、文字です。これらは、むしろ、写したり、映すものです。

(拙文「伝わるもの、伝わらないもの」より)

目次

うつる、つたわる

「何か」「何が？」

うつるは、かわる

つたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

本物感と本物っぽさこそ（だけ）がリアリティ

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

うつる、つたわる

影がうつる、像がうつる、姿がうつる、形がうつる。

声が伝わる、音が伝わる、波が伝わる、熱が伝わる。

「うつる」の例として挙げた言い方に出てくる、影、像、姿、形は、動きを止めて見るものです。連続すれば動きになります。写真と動画が、そうです。

一方の「伝わる」で挙げた、声、音、波、熱は動きとして感知されるものだという気がします。見えないのです。熱が動きであるのというのは苦しい言い方になりますが、熱が伝わってくるからには、感知する側も熱くならなければなりません。これを動きとして見るかどうかですが、無理に辻褄を合わせないで話を進めます。

ここでは研究や探求をしているわけではなく、わくわくを楽しむために言葉をいじっているのです、大ざっぱにいきます。

「何か」「何が？」

姿形がうつる、姿形が伝わる。映像、録画、映写、電線、電波、電信、通信、撮影、複写、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

音声がうつる、音声伝わる。録音、拡大、増幅、電線、電波、電信、通信、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

熱がうつる、熱がつたわる。伝導、摩擦、発熱、冷却、温度差、保存。

「何か」を「何？」と追及するのではなく、「何か」として保留したまま、動きに注目してみます。

うつるは、かわる

「うつる」では、「かわる」が起こり、位置関係が維持される気がします。「何か」から、別の「何か」に「うつる」ことにより、「かわる」が起きていますが、対応関係が維持されるのです。

地面に映る木の影。水面に映る空の雲。鏡に映る顔。
写真に写る、写す。写生する（絵）。描写する（絵・言葉）。

「映っている」「写っている」と感じるためには、位置の対応が粗くても細かくてもいちおう保たれていなければならないのです。きょくたんな話がゆがんでいても、下手であっても、大ざっぱであっても、あるいは不正確であっても、映っているし写っているのです。

ゆがみや誤差は、加工や加筆によって、ある程度まで修正できるかもしれません。あくまでも「近似値」なのです。誤差やノイズやエラーがあるのは「うつる」では当然なのかもしれません。

レントゲンやMRIといった、人工的な「影」の中でも最も進化し洗練されたものになると、位置関係という意味での対応は精緻をきわめますが、影であることに変わりはありません。影は現物ではないわけです。言葉が事物ではないのと似ています。別物なのです。

ハイビジョンがフィルムに追いつけないとかいう話を聞いた覚えがありますが、写真や画像についても、たとえどんなに画質が優れてリアルであっても、やはり影は現物ではないわけです。別物なのです。

「うつる」を目的にしているかぎりは「かわる」が起きて別物になっていてもかまわないのです。大切な点だと思います。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。一時的に（あるいは長期にわたり）現物だと思っていることもおおいにある気がします。

つたわる

「伝わる」では、動きや振動や波が上下運動、あるいは線からなる何らかの模様に戻元される気がします。還元という言葉を使ったのは、抽象を意識しています。伝わるものは抽象なのではないでしょうか。

具体的な動きでありながら抽象であるというのは、言葉の上で矛盾して辻褄が合いませんが、言葉と現象がべつべつの論理と文法（比喻です）を持っていると考えれば、不思議ではありません。

別個のもの同士の間で辻褄が合うほうが、むしろうさんくさいのです。

たとえば、人は言葉で現実の辻褄合わせや帳尻合わせをすることに血道を上げています。両者が別物なのにです。それを人は知っているはずなのに、つねには意識しません。言葉で思いの辻褄合わせをすることにも熱心です。冗談ぼく言えば、捏造疑惑です。捏造常習者が言うのですから確かでしょう。

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。そんな気がします。

名詞的なものがうつるときには、うつる前のものとうつった後もの間の対応が重視されます。理想は一对一の対応であり、そのありえない理想を指向するのです。絵をイメージしてください。絵はつたわると言うよりもうつる、とりわけ写る、映るのです。図柄や模倣が壊れてはいけないわけです。

一方の動詞的なものがつたわるときには、重視されるのは動きであり、つたわる前後の位置的な対応関係は無視されます。そもそも、つたわる前のものとつたわった後のものの区別さえ大きな意味を持ちません。両者が別物であっても重視されないのです。振動や熱をイメージしてください。

外の音や声（振動）が、室内のここまで伝わってくる。糸電話で声が伝わる。テーブルの向こうに置いた鍋の熱がここまで伝わってきている。

糸電話は「伝える」（振動が）ですが、伝言ゲームは、「伝える」と言うよりも「うつる」（メッセージが）ではないでしょうか。メッセージはつたわるのではなく、むしろうつると、ここではイメージしています。それぞれの動詞の慣用とは異なるイメージですね。自分語的な用法と言えるかもしれません。

本物感と本物っぽさこそ（だけ）がリアリティ

「伝わる」も「うつる」も、置き換えが前提になっています。置き換わらないと伝わらないし、置き換わらないとうつらないわけです。

要するに、本物や起源でなくていいのです。というか、本物や起源が伝わったり、うつるのは不可能ですから、何か別のものに置き換わっていく、つまり代替りのものが本物や起源を演じる、あるいは振りをすると言えます。

「移る・移す」（移動）ができないために、「映る・映す」と「写る・写す」で済ますとか代用するという意味です。

代用は錯覚をまねきます。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。一時的に（あるいは長期間にわたり）現物だと思っていることもおおいにある気がします。

＊

世界や森羅万象と無媒介的に触れあっているのではないため、本物には届きません。時間をさかのぼることはできないので、起源を知ることはできません。自分を納得させるためには、本物も起源も、言葉で「こしらえる」しかないわけです。

本物感、本物っぽさ、本物のようなもの、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので我慢するのは、それしか方法がないからです。このことを人は意識しないで知っています（たぶん学習した知識ではないでしょう）。意識するとがっくりきてやる気をなくすでしょう。生きる気力を失うかもしれません。

大切なのは、本物「感」、本物「っぽさ」、本物「のようなもの」、起源「感」、起源「っぽさ」、起源「のようなもの」です。「感」、「っぽさ」、「のようなもの」という意味です。これこそが（つまりこれだけが）、人にとってのリアリティです。

「感」、「っぽさ」、「のようなもの」は空転しそうな語感の言い回しですが、人にとっ

てのリアリティも空回りしているように思えます。だから、人は「リアリティ」に振りまわされつづけているのでしょう。切りがないのです。

「感」、「っぼさ」、「のようなもの」は空転は錯覚そのものです。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。「感」、「っぼさ」、「のようなもの」どころか、一時的に（あるいは長期間にわたり）本物や現物だと思っていることもおおいにある気がします。自分を観察しているとそう思います。

とはいえ、絵に描いた餅は食べることができます。レトリックはさておき、精確に言うと、絵に描いた餅から絵に描いてない餅くらいならたどり着くことができるのです。「感」、「っぼさ」、「のようなもの」は精度の問題であり、絵に描いた餅を食べることができるほどには精確なのです。さもなければ、人類はとうの昔に飢え死にしています。

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

基本には「似ている」や「そっくり」がある気がします。確認するためには器具や器械や機械に頼るしかない「同じ」や「同一」ではなく。人は印象の世界に住んでいるようです。

そのため、たとえ「同じ」や「同一」というデータやそれによるイメージを得たとしても、それを「似ている」や「そっくり」でとらえる（置き換える）にちがいはありません。この置き換えという操作をおこなうことが、人である証左なのかもしれません。

大切なことなので繰り返します。

「〇〇感」「〇〇ぼさ」「〇〇らしさ」「〇〇性」「〇〇的」「〇〇のようなもの」、これこそが人にとってのリアリティなのです。「そのもの」にたどり着けない人類の歴史は、「感」「ぼさ」「らしさ」「性」「的」「ようなもの」——別物であることの隠蔽と粉飾であり糊塗やお化粧です——の洗練の追求だと言えそうです。

本物や起源にたどり着けないことを人は意識していないで知っているわけですが、ときには、あるいは人によっては、それを忘れて「〇〇とは何か?」とか「〇〇の意味はあるのか?」とかという問いを発する場合があるのは、みなさんご承知のとおりです。答

えが出ないことも、ご承知のとおりです。

私たちは、複製の複製、本物や実物のない複製、引用の引用、起源のない引用の世界に生きているようです。

【※今回の記事は拙文「名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる」に少しだけ加筆したものです。】

(投稿：2023年5月26日 08:13)

うつる # 伝わる # 複製の複製 # 引用の引用 # 本物や実物のない複製 # 起源のない引用 # 言葉 # 日本語 # 音声 # 文字 # 動詞 # 名詞 # 本物 # リアリティ

かけをうつす

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
